焼土遺構と同様の焼土とみなされる。

近接する遺構にはHc133－Ⅰ～Ⅳ建物があり、Hc133－Ⅰ建物では(1)焼土遺構が同敷地内に重複している。また、Hh133溝の北・西には(3)～(5)焼土が位置する。しかし、共に同一検出面を有して前後関係は不明であり、性格も明らかでない。

7．溝状土壙（第95、96図　付6図　第18表　図版33）

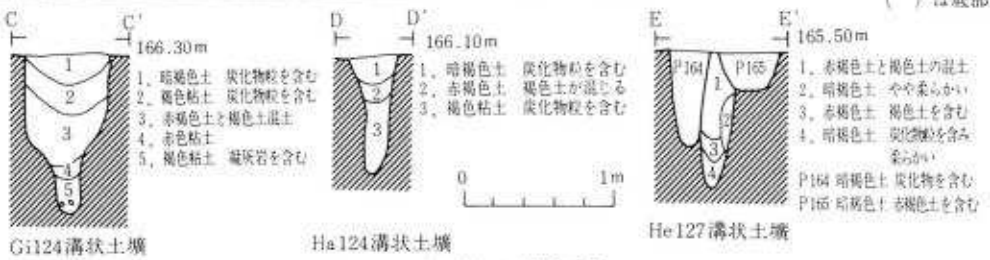
郭の中央部より西方にかけて地山切土面に検出される6土壙である。高位となる西方にほゞ同一方向の2土壙が並列するほか、分布による特徴は認められない。

土壙は長さ2.98～3.30m、幅0.33～0.79m、深さ0.35～1.22mである。検出面の高い(1)土壙がやゝ短かく、(3)土壙で幅広となり、他は殆ど近似する計測値となる。掘り込みは(1)、(3)土壙で不整な部分を認めるが、他は直線状を呈する。上部ほど幅広をなし、崩壊とみられる一部を除いて滑らかな壁面を形成する。断面は共にV字状である。底部における長さは2.50～3.06m、幅0.18～0.80mであり、検出面のそれに比して長さは10分の1、幅は3分の1～5分の1前後狭小となる。底部の長幅比は(1)～(3)は15.6～18.1、(4)～(6)では22.5～32.8となる。また、長軸方向によっては(1)、(2)、(4)の3土壙、(5)、(6)の2土壙がそれぞれ近似し、(3)土壙のみ大きく相違している。

第18表　三の郭溝状土壙計測表

No.	土壙名	長　さ	幅	深　さ	検出面の高さ	長軸方向	長　幅　比
1	Gf 121	2.80(2.50)m	0.53(0.16)m	0.35m	166.93m	N 77.0° E	5.28 (15.63)
2	Gg 121	3.13(2.94)	0.43(0.18)	0.90	166.81	N 81.5° E	7.28 (16.33)
3	Gi 124	3.03(2.56)	0.79(0.16)	1.22	166.25	N 66.0° E	3.84 (18.13)
4	Gi 130	3.30(3.06)	0.50(0.12)	1.06	166.08	N 71.5° E	6.60 (25.50)
5	Ha 124	3.02(2.70)	0.33(0.10)	1.00	165.95	N 54.6° E	9.15 (27.00)
6	He 127	2.98(2.63)	0.40(0.08)	0.86	165.41	N 58.7° E	7.45 (32.87)

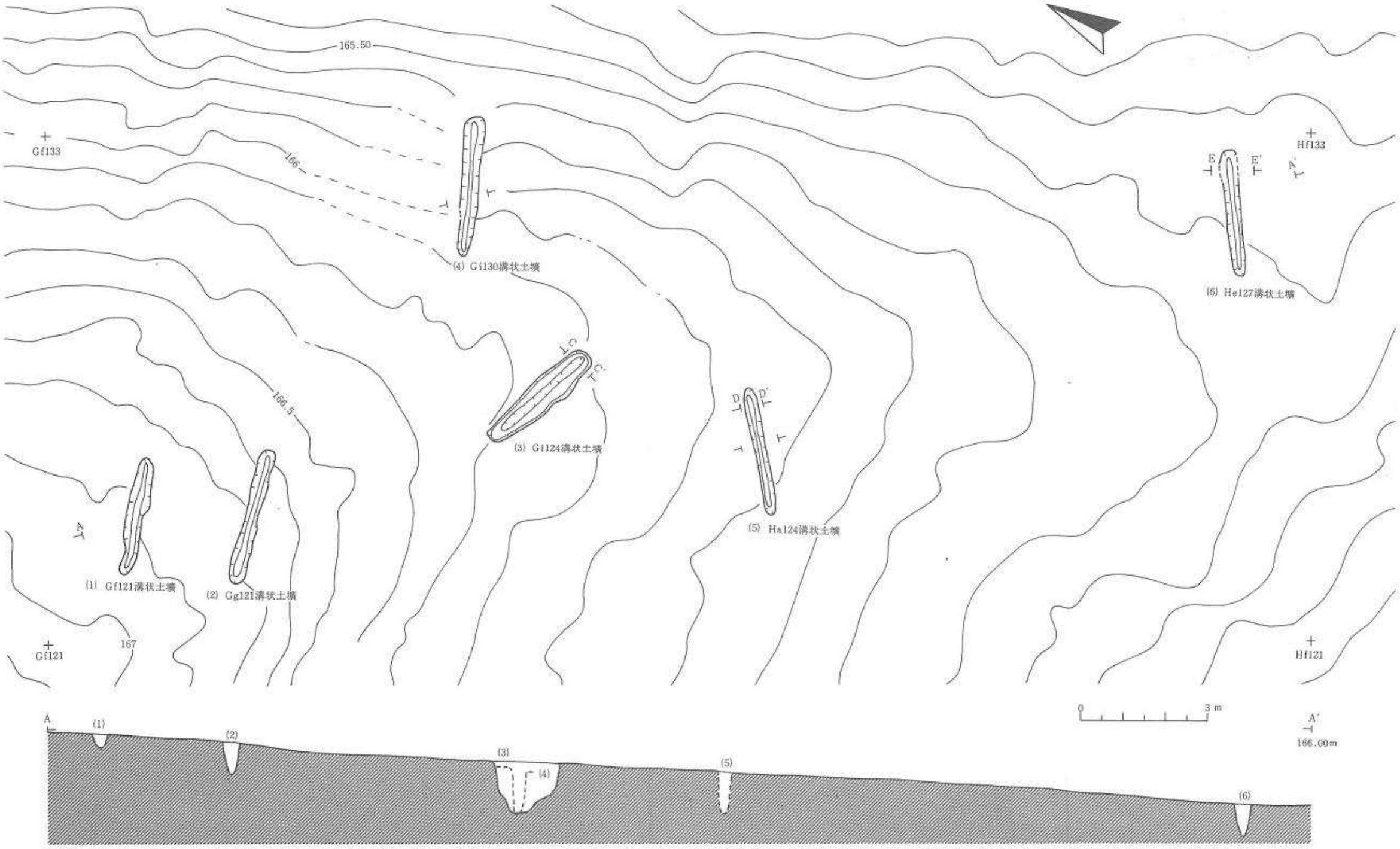
（　）は底部



第95図　三の郭溝状土壙断面図

覆土はほゞレンズ状の堆積層が共通して形成される。底部を被う下位層は安山岩質の風化礫を伴う赤褐色粘性土であり、(4)、(6)土壙では炭化物の微粒が混入する。中位層では中央部にやゝ厚く堆積する暗褐色土と褐色土の混土層が多い。上位層では中位層と殆ど同様であるが、炭化物粒の混入が多く認められる。しかし、遺物は共に1点も含まれていない。

重複する遺構には(3)土壙に既述のGh127竪穴遺構及びP10、(6)土壙にP163、P164がある。いずれも重複する遺構に先行し、後者では Hc133－Ⅱ建物構築以前に埋没するものとみられる。



第96図　三の郭溝状土壙配置図

第7章　遺物

遺物は調査区域の西方を除いてほゞ全域に分布し、総出土点数は660点余りである。特に一の郭とこれを画する3～5号堀に集中して出土し、全体の80.8%に達する。その大部分は遺構検出段階にⅠ、Ⅱ層に含まれ、空堀においては覆土の中・上位層に含まれるものである。遺構出土の遺物は既述の数点を除いて覆土中に混入し、特に地鎮のために埋納される遺物等は判明していない。いずれも破片となるものが多く、推定復元できるものは極めて稀である。

遺物は下表によって23種に分類される。陶磁器がもっとも多く、土師質土器を含む陶磁器は全体の47%に達する。そのうち磁器は66%であり、青磁、白磁、染付の順に増加している。その殆どは舶載磁器である。陶器では美濃産の灰釉陶器が圧倒的に多く、ほゞ白磁の出土点数に匹敵している。そのほか、鉄釉、無釉陶器等が若干含まれる。陶磁器に次いでは鉄・銅製品、石製品が比較的多い。いずれも陶磁器と殆ど同様の出土分布を示すものである。

第19表　出土遺物一覧表

No.	遺物	一の郭	二の郭	三の郭	2号堀	3号堀	4号堀	5号堀	6号堀	その他	合計	出土比率
1	青磁	5	1			10	8	6			30	4.6%
2	白磁	12	12		2	17	13	6		1	63	9.5
3	青花	28	4	6	1	23	34	5		3	104	15.7
4	赤絵	1					1				3	0.5
5	その他の磁器	4	3			1		1			8	1.2
6	灰釉陶器	13	5	1		17	14	13		2	65	9.8
7	鉄釉陶器	3				2	3				8	1.2
8	その他の陶器	3	2	1		3				1	10	1.5
9	土師質土器	5	1			2	10	6			24	3.6
10	須恵器					1	1				2	0.3
11	土師器								1	4	5	0.8
12	弥生土器	1		1	2	30	1				35	5.3
13	縄文土器	6	1	16	1	9	13	7		2	55	8.3
14	鉄製品	8	4	3		9	5	11		2	42	6.4
15	銅製品	2	1			1	1	1			6	0.9
16	鉄滓	1		4							5	0.8
17	古銭	5	4	3		10	4	4			20	3.0
18	石製品	14	2		3	2	8	6			43	6.5
19	石器	3		2	2		7		1	1	18	2.7
20	獣歯骨						51				51	7.7
21	柱根等	28	1								29	4.4
22	炭化(木)材	6					1				7	1.1
23	穀類	7	11	8		1	1				28	4.2
合計		155	52	45	11	138	176	66	2	16	661	
出土比率		23.4%	7.9	6.8	1.7	20.9	26.6	10.0	0.3	2.4		100.0

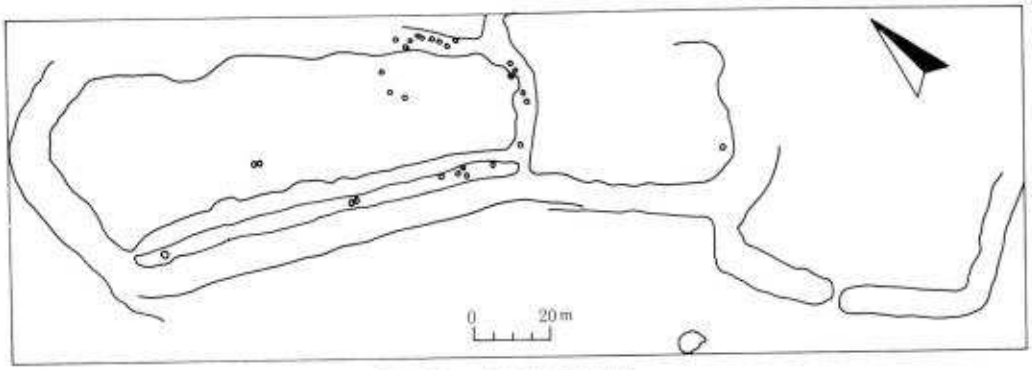
（穀類、炭化木材はサンプル数による、他は破片を含む点数）

1．陶磁器と土器

(1) 青磁（第97、98図　第19、20表　図版36）

一の郭及びその周辺に29点、二の郭に1点の合せて30点である。前者にはCg18井戸の覆土中に含まれる(2)、(3)の2点と一の郭Ⅱ層中に出土する3点があり、他は3～5号堀上層に混入するものである。(14)、(20)はそれぞれ2号堀の東西と4・5号堀に分散して出土し、接

合する同一個体である。更に同一個体とみられるものは4号堀、3～5号堀に分布し、判明する個体数は碗、皿各13点である。また、部位の確認できる破片は口縁部9点、体部4点、底部及び高台部2点であり、器形の推定できるものは皿1点のみである。

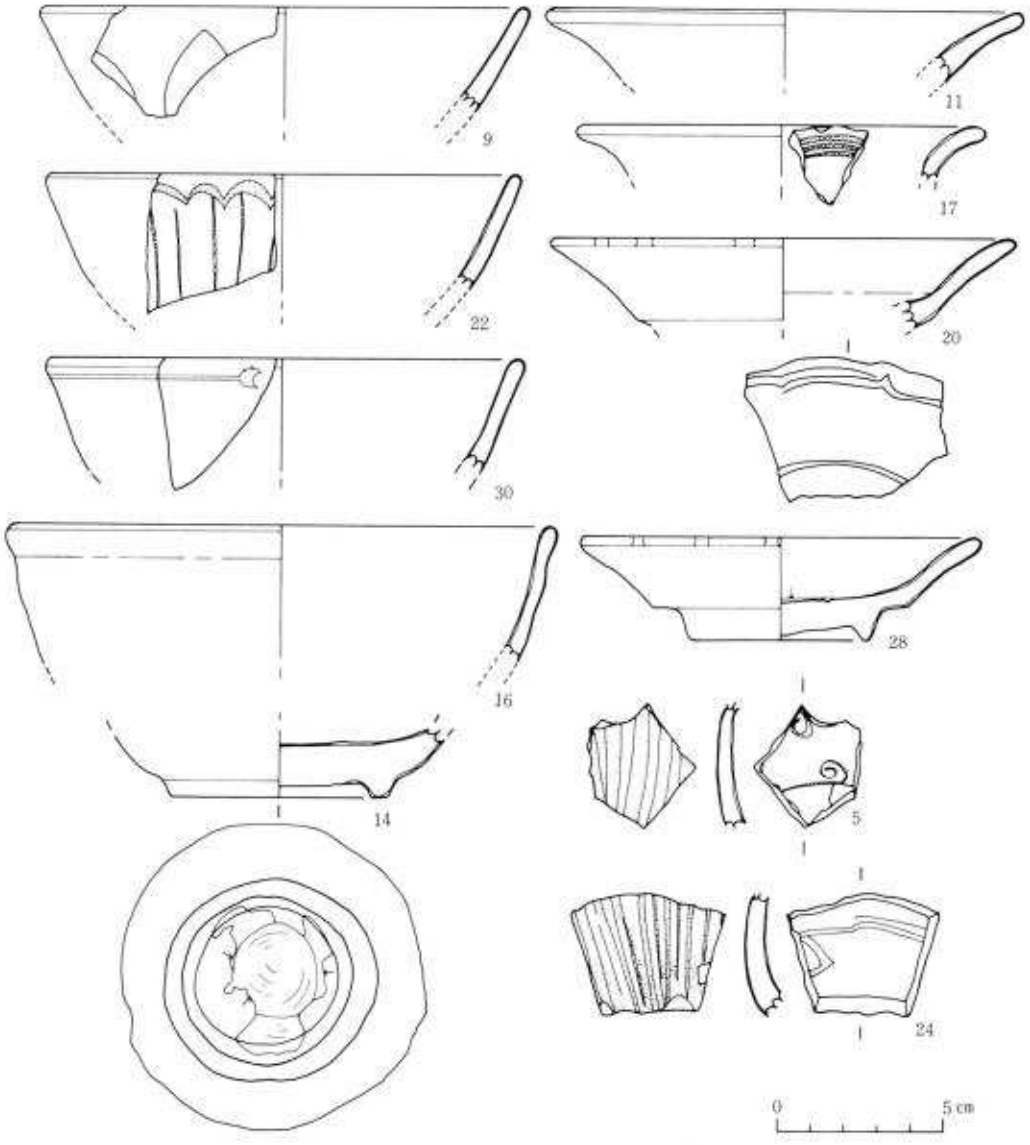


第97図　青磁出土分布図

碗は13点であり、口縁部4点、体部7点、底部及び高台部2点が含まれる。口縁部は体部より僅かに内彎して立ち上がり、口縁端部にやゝ薄くなる。推定口径は13.8～15.5cmである。体部は器厚0.55～0.90cmでやゝ分厚いものが含まれ、下方ほど厚手となる。外面には簡略な蓮弁文を有するものが多く、幅広に篦がきされるものは(2)、(9)の2点である。簡略な蓮弁文を有する(5)、(24)には内面に画花文が認められるものである。無文のものは(16)、(20)の2点である。底部は小片で明瞭でないが、内面に花文を描き、目を残す1点(3)が含まれる。また、見込みに沿って不規則な擦痕が認められ、(2)、(6)、(24)に共通している。器厚は最大1.20cmである。釉調は(9)が明緑色を呈するほかは暗緑色をなし、全体に光沢が弱い。貫入の認められるものは極めて少ない。そのほか、二次火熱をうけて光沢を失う1点(27)がある。胎土は灰白色、または白色で稠密なものが大部分である。

皿は合せて16点であり、判明するものはすべて体部より緩やかに外反する稜花皿である。口縁部は不規則に削り取って輪花をなし、内面には3条の画花文を有する。推定口径12.0～14.0cmである。体部は底部境に稜を有し、器厚は立ちあがりに沿って薄くなる。内面の底部境に沈線を有するもの1点(20)が含まれる。また、内面底部には圏文内に銘を有するもの(14)、円形に釉をかきとり、重ね焼き痕を残すもの(28)がある。底部は器厚0.70～1.50mを計り、中央部にもっとも厚い。高台部は共に削り出し高台をなし、若干斜方向に切って畳付が狭まる。畳付幅は0.4～0.6cm、推定高台径4.8～6.4cm、高台高3.1cmである。高台内は中央部に浅く、やゝ粗い削りである。すべて高台内は畳付を含めて無釉となり、殆ど黒色を呈する。

全体に釉調は薄緑色、または暗緑色を呈し、貫入が認められる。胎土は灰色を呈し、石はぜを有するものが多い。



第98図　青磁　　第20表　青磁一覧表

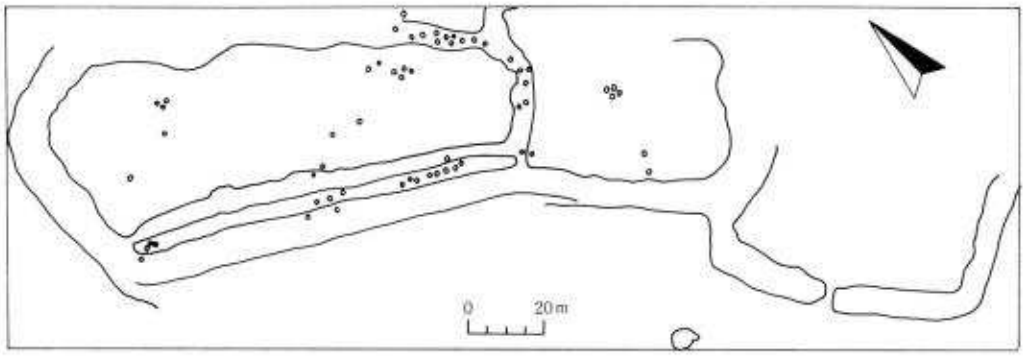
No	出土地点	遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	高台径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	釉調	胎土	紋様	その他の特徴	実測図	写真
1	Bg48	3号堀	I	皿	高台		(5.0)		0.70	暗緑	灰		貫入があり、高台内は無釉。		○
2	Cb18	井戸	1	碗	体				0.90	青緑	灰白	蓮弁文	内面に櫛状が走る。光沢が弱い。		○
3	〃	〃	3	〃	底				1.20	暗緑	灰	花文	内面に櫛状、目を有する。		○
4	Cj118	一の郭	II	皿	口縁				0.50	青緑	〃		輪花皿で、口縁部内面に波状沈線。		
5	Cj127	3号堀	〃	碗	体				0.60	暗緑	灰白	蓮弁文 劃花文	内面の花文は比較的鮮明である。	○	○
6	Da18～ Dj100	〃	〃	〃	〃				0.50	〃	〃	蓮弁文	内面底部に細線状の櫛状が走る。		○
7	Da18	〃	〃	皿	〃				0.60	〃	灰		内面に細貫入が多い。胎土分析。		
8	Da112	一の郭	〃	〃	〃				〃	〃	〃		外面に線を有し、内外面は細貫入。		
9	Da124	3号堀	I	碗	口縁	(13.8)			0.50	明緑	白	蓮弁文	口縁端が斑点状に褐色がかる。	○	○
10	Da127	〃	II	〃	高台		(4.8)		0.65	暗緑	灰白		高台高1.3cm。		○

11	Da130	4 号 堀	I	皿	口 縁	(12.2)			0.60	暗 緑	灰		輪花、胎入が多く、内面光沢がない。	○	○
12	〃	〃	〃	〃	〃				0.45	薄暗緑	〃		輪花、口縁部内面に3条の波状沈線。		
13	〃	〃	II	〃	〃				〃	〃	〃		No.11と同一個体。		
14	Db130 ～Fd128	4・5号堀	〃	〃	底		6.4		1.50	暗 緑	灰 白		箆文内に銹が認められる。	○	○
15	Db130	4 号 堀	I	〃	口 縁				0.50	薄暗緑	灰		輪花、口縁部内面に3条の波状沈線。		
16	Dc112	一 の 部	II	碗	〃	(15.5)			0.50	暗 緑	灰 白		内面光沢弱い、二次加熱？		○
17	Dc130	4 号 堀	I	皿	〃	(12.0)			0.55	〃	灰		輪花、口縁部内面に3条の波状沈線。	○	
18	Dd130	〃	〃	碗	体				〃	〃	灰 白		胎土に気孔がある。		
19	〃	〃	〃	〃	〃				0.45	淡 水	灰		細胎入が多い。		
20	Dh3	3 号 堀	〃	皿	口 縁	(14.0)			0.40	暗 緑	〃		輪花、口縁部内面に3条の波状沈線、内面底部境に沈線。	○	○
21	Di100	〃	II	碗	体				0.25	〃	〃		No.6と同一個体。		○
22	〃	〃	〃	〃	口 縁	(13.8)			0.45	〃	〃	蓮弁文	簡略化された蓮弁がある。	○	○
23	Ea127	5 号 堀	I	皿	体				〃	〃	〃		No.20と同一個体、底部境に沈線。		
24	〃	〃	〃	碗	〃				0.45	〃	灰 白	蓮弁文 劃花文	簡略化された蓮弁で密な縦線がある。	○	○
25	Ev109	〃	II	II	〃				0.50	灰 緑	灰		内面に稜があり、細胎入がある。		
26	Ea133	〃	I	〃	口 縁	(12.5)			〃	薄灰緑	〃		輪花、口縁部内面に波状沈線2条？		
27	Eb106	3 号 堀	II	碗	体				0.35	薄 緑	白	蓮弁文	光沢が失なわれる。二次加熱。		
28	Ec127	5 号 堀	〃	II	口 縁 ～底	12.0	5.1	3.1	0.70	〃	灰		見込み1条内無線、重ね焼き痕を残す、胎入が目立。	○	○
29	Ed112	〃	I	〃	口 縁	(12.5)			0.50	薄灰緑	〃		輪花、口縁部内面に3条の波状沈線、No.20と同一個体。		
30	Ga130	二 の 部	II	碗	〃	(9.6)			〃	暗 緑	灰 白		口縁部に歪みがある。	○	○

（ ）は推定値を示す。

(2) 白磁（第99、100図　第19、21表　図版37）

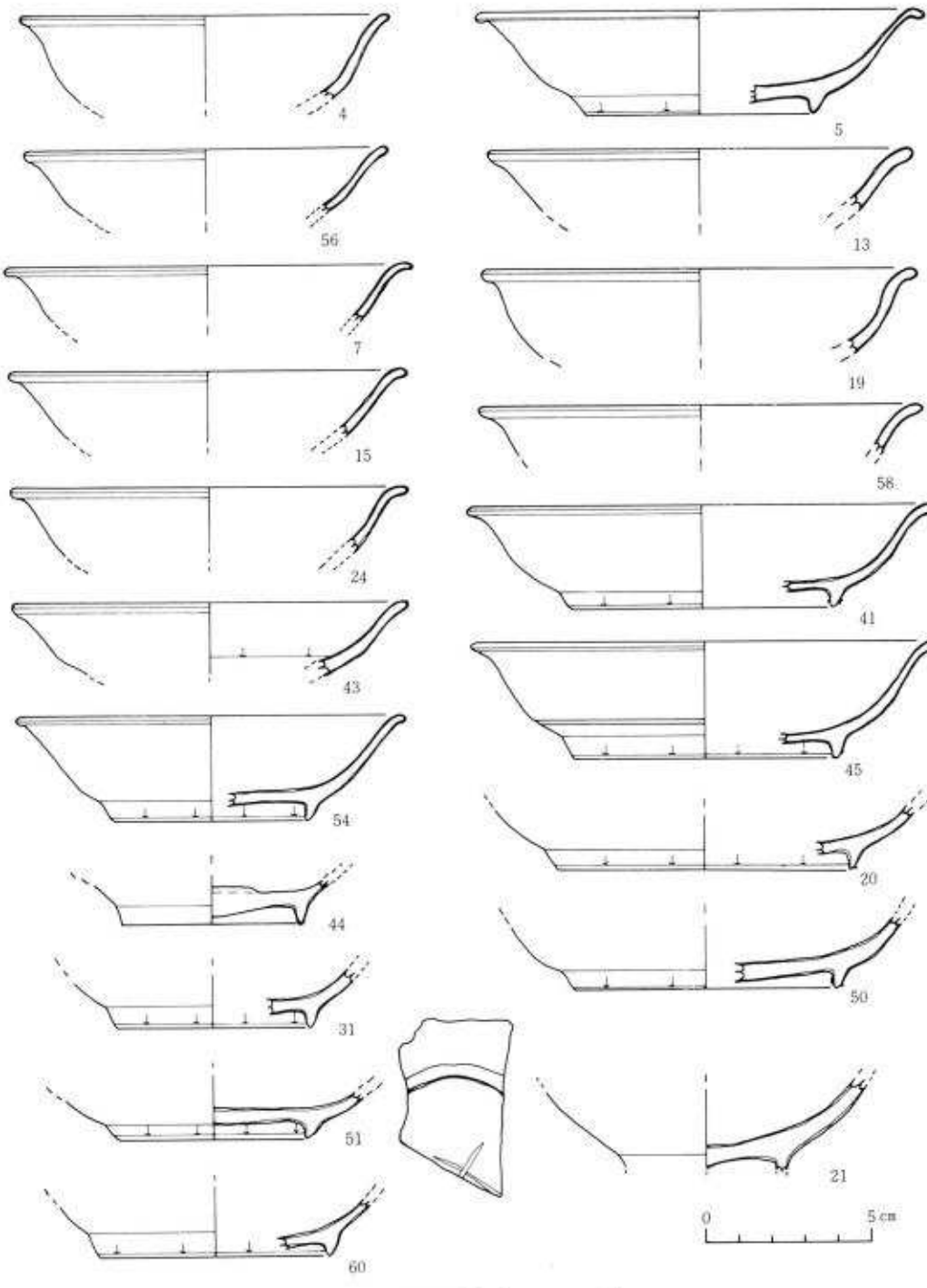
碗3点、皿58点、盃1点、不明1点の合せて63点である。共に破片であり、同一個体片7点が含まれる。一、二の郭と郭を画する3～5号堀、2号堀の覆土中に分布し、三の郭には1点も出土していない。一の郭では Aj15溝の東西及び Cf9 用水溜東より部分に偏在し、11点中7点は柱穴の埋土中に含まれる。空堀では3号堀西端に4点があり、そのほかは一の郭東半を限る3～5号堀に集中し、合せて34点にのぼる。共に中位層以上の一時的な埋没に伴う混土層に他の遺物と混在するものである。二の郭では北西隅の Ec112竪穴遺構覆土のほか中央部より南辺にかけて分布し、2号堀では南西の土塁及び東辺に流入する2点である。また、Ec112竪穴遺構の出入口に検出される同一個体2点は覆土中に含まれるものであり、郭中央部の柱穴埋土中



第99図　白磁出土分布図

の２点は一の郭のそれと同様埋設される形跡は認められない。

碗３点は口縁部、体部、底部各１点である。口縁部(６)は体部より直線状に立ち上がり、薄



第100図　白　　磁

くなって口縁端部に丸味をもつ。体部より底部(21)にかけては次第に肥厚して高台脇にもっとも厚く、削り出しによってやゝ薄い底部となる。全面を被う白磁釉は内面に擦痕を有して光沢が弱く、外面は不規則な貫入が走る。また、底部内外面には小さい刺突状の打痕があり、高台を失なって不整な断面を有する。意図的に打ち欠いているものとみなされる。胎土は共に稠密な白色を呈する。高台径は5.0cm以下と推計される。

皿58点中、同一個体を除いて復元推定できるもの4点、口縁部25点、体部4点、底部及び高台部18点が判明する。口縁部はすべて端反りをなし、(4)、(43)、(54)等の弱く外反するものと(5)、(18)、(41)等体部よりやゝ薄く挽きだされて口縁部に肥厚し、強く外反するものが含まれる。口径は11.0～14.0cmと推計される。体部より底部にかけてはやゝ肥厚して削り出し高台に続く。高台は斜方向に切られ、更に畳付直上で鋭く削り取られる。

共に畳付が狭く不整をなし、高台の内外面に砂粒の付着が著しい。高台内は中央部に浅くなり、(41)、(45)等体部に比して器厚の薄くなるものが含まれる。また、(51)には高台内に＋記号とみられる擦痕が認められる。

施釉は畳付を除いて全面に及ぶものが大部分である。白色を呈するもののほか光沢があって斑点状に灰色の混在するもの5点、灰白色、または灰色の強いもの9点、柔らかい乳白色をなすもの8点がある。また、高台内が無釉の(44)、内面底部を円形に削りとる(43)、(44)、外面に露胎を有する(55)が含まれる。(55)は内面に沈線2条が巡り、もっとも器厚が厚い。全体に高台内に小さい亀裂を残すものが多く、胎土の褐色がかったものが比較的多い。高台径は(44)の5.5cmを除き、6.0～9.0cmと推定され、器高は3.0～3.5cmを計る。

そのほか盃とみられる薄手の体部小片1点があり、灰色の付着物が内面に広がる。胎土は褐色がかった焼成不良のものである。

第21表　白　磁　一　覧　表

No	出土地点	遺構	層位	器種	部位	口径 cm	高台径 cm	器高 cm	器厚 cm	釉調	その他の特徴	実測図	写真
1	Bc36	一の郭	P175	Ⅲ	口縁	(13.2)			0.25	白（灰白灰）	端反りして薄手となる。口縁端に歪みがある。		
2	Be15	〃	Ⅱ	〃	底				0.30	クリームがかった白	光沢を失なう二次加熱？		
3	Bd15	〃	P887	〃	口縁	(12.0)			0.35	灰白	端反り口縁、No.4と同一個体。		
4	〃	〃	〃	〃	口縁体	〃	(7.0)	3.0	0.30	〃	口縁端に歪みがある。外面に斜方向の亀裂が走る。光沢弱い。	○	○
5	Baf18 ～21	〃	P739	〃	口縁～底	(13.0)			0.20 0.40	白	端反り口縁、砂高台で全体に光沢が弱い。口縁端より亀裂が走る。	○	○
6	Bg57	3号堀土層	Ⅱ	堀	口縁				0.20 0.30	白	直線状に立ちあがる薄手の小片。		
7	Bg51	3号堀	1	Ⅲ	〃	(12.0)			0.30	白（灰白灰）	光沢が殆どない。	○	
8	〃	〃	〃	〃	〃	(13.0)			0.25	白			
9	〃	〃	〃	〃	〃	(13.0)			0.30	柔らかい白	強い端反り口縁で外面に気孔が多い。胎土は褐色を呈する。		
10	Cg38	二の郭	Ⅱ	〃	体				0.35	灰白	光沢を失なう細片である。		
11	Ch27	〃	〃	〃	底				0.30	白	砂高台、光沢が弱い。内面に擦痕が不規則に走る。胎土分析。		
12	Ci15	〃	〃	〃	口縁				0.15 0.25	クリームがかった白	端反りして薄手となる。光沢がない。		
13	Ci6	〃	〃	〃	〃	(12.8)			0.35	灰白	やや厚手の端反り口縁で歪みがある。胎は灰白色。	○	
14	Ci21	4号堀	〃	〃	底				0.25	〃	胎土は灰白色で密である。No.13と同一個体。		
15	Cj112	一の郭	P1638	〃	口縁体	(12.0)			0.30	〃	端反り口縁で光沢が弱い。	○	○

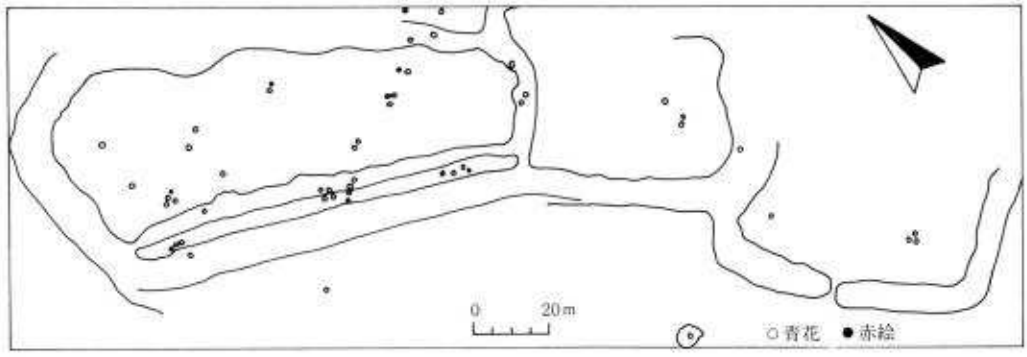
16	Cij 21	3 号 堀	II	皿	口 縁	(13.0)			0.35	白	端反り口縁。		
17	〃	〃	〃	盃?	体				0.20	〃	内面に灰色の溶融物が付着する細片。		
18	Ci100	一 の 郭	P2372	?	〃				〃	〃	薄手で光沢があり、胎土も緻密である。		
19	Cj115	〃	II	皿	口 縁	(13.0)			0.30	〃	端反り口縁で、歪みが大きいが光沢が弱い。	○	
20	Cj127	4 号 堀	〃	〃	体～底		(9.0)		〃	灰 白	砂高台で高台脇に亀裂がある。	○	○
21	Cj130	〃	〃	碗	〃		(5.0)		0.35 0.50	白	内外面に斜突状の打痕があり高台を欠く。見込みに擦痕が残る。二次加熱をうける。	○	○
22	Da24	3 号 堀	I	皿	口 縁	(12.0)			0.35	灰褐色がかった白	端反り口縁で胎土は褐色を呈する。二次加熱をうけて光沢がない。		
23	Da18	〃	II	〃	高 台				0.40	柔らかい白	胎土は褐色がかり、高台内に亀裂がある。二次加熱をうける。		
24	Da115	一 の 郭	〃	〃	口 縁 体	(11.8)			0.25 0.30	灰 白	端反り口縁で二次加熱をうけて光沢を失なう。	○	○
25	Da127 ～Dh130	4 号 堀	I	〃	口 縁				0.25	白	端反り口縁の細片で光沢がない。		
26	〃	〃	〃	〃	〃				0.30	〃	端反り口縁の小片		
27	〃	〃	〃	〃	〃				0.25 0.35	〃	反りが強く端反り部分でやや厚い。胎土は褐色を呈する。		
28	〃	〃	〃	〃	〃				0.30	白 (暗灰)	端反り口縁の小片		
29	〃	〃	〃	〃	体				0.35	白	湾曲部の細片		
30	〃	〃	〃	〃	口 縁	(12.0)			0.30	灰 白	反りの弱い口縁部で貫入が走る。胎土は褐色が強い。		
31	〃	〃	II	〃	高 台		(6.5)		0.25 0.30	灰	高台内にやや灰色が強い。中央部に薄くなる。	○	
32	〃	〃	〃	〃	体				0.30	白	外反部分に薄くなる。二次加熱で光沢を失なう。		
33	〃	〃	〃	〃	口 縁				0.35	〃	端反り口縁の小片で外反部分に稜線を有する。		
34	〃	〃	〃	〃	体				〃	白 (暗灰)	外面の光沢が弱い。		
35	Db115	一 の 郭	P1719	〃	口 縁				〃	〃	端反り口縁の小片で光沢がある。		
36	〃	〃	II	〃	体				0.30	〃	光沢ある小片である。No.35と同一個体。		
37	〃	〃	〃	〃	体 高 台				0.35	クリームがかった白	体部より滑らかに垂付に続く。光沢が失なわれ、胎土は褐色を呈する。		
38	Dc12 ～Di 3	3 号 堀	I	〃	口 縁				0.30	褐色がかった白	端反り口縁の細片		
39	〃	〃	〃	〃	底				0.40	白	高台内に砂粒が付着する。		
40	〃	〃	II	碗	体				0.35 0.45	〃	上方ほど器厚が薄い。釉薬がうすく、光沢がある。		
41	〃	〃	〃	皿	口 縁 ～底	(14.0)	(8.2)	3.1	0.30 0.40	〃	端反り口縁,砂高台で砂粒の付着が多い。	○	○
42	〃	〃	〃	〃	底				0.35	〃	No.39と同一個体の小片		
43	Dh 6	〃	〃	〃	口 縁	(12.0)			0.30 0.35	灰褐色がかった白	内面底部に円形の無釉部分があり、No.33と同一個体。	○	○
44	Di 3 ～Ea103	〃	〃	〃	底		5.5		0.35 0.90	灰 白	見込みを環状にかきとり、黒色を呈する。高台の削り出しが明瞭である。	○	○
45	Di 3	〃	〃	〃	口 縁 ～高台	(14.0)	(8.0)	3.5	0.30	白 (暗灰)	端反り口縁、砂高台、体部に成形痕が残る。	○	○
46	〃	〃	〃	〃	口 縁				0.35	白	端反り口縁で打ち欠かれるような不整な断面をなす細片。		
47	Ea130	5 号 堀	〃	〃	高 台				0.30	〃	砂高台の小片で外面の光沢が弱い。		
48	Eb127	〃	〃	〃	〃				0.35	〃	砂の付着が多く、高台内に小さな亀裂がある。外面は光沢が失なわれる。重付を不整に欠く。		
49	Ec124	〃	〃	〃	〃				0.30	〃	高台脇に亀裂がある。砂高台で特に高台内に砂粒が著しい。		
50	〃	〃	〃	〃	体 ～底		(8.5)		0.30 0.55	〃	砂高台で高台内に亀裂が走る。全体に光沢が多い。	○	○
51	Ed124	〃	〃	〃	底 ～高台		(6.0)		0.35 0.50	〃	砂高台で、中央部に厚い。高台内中央部に十の記号を有する。	○	○
52	Ed127	〃	〃	〃	口 縁				0.30	柔らかい白	端反り口縁の細片、胎土は灰白色をなす。		
53	Ef112	二 の 郭	〃	〃	口 縁 ～ 底	(11.8)	((6.0)	3.2	0.30	灰褐色がかった白	端反り口縁で内外面に小気孔を有し、光沢が弱い。		
54	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	No.53と同一個体。	○	○
55	Eh 3	2 号堀 土 層	〃	〃	底				0.60 0.75	褐色がかった白	外面に露胎があり、内面に沈線が走る。細貫入が多く、胎土は緻密。		
56	Ej130	二 の 郭	P158	〃	口 縁 体	(11.0)			0.25	白	弱い端反り口縁でやや歪みがある。	○	○
57	〃	〃	P160	〃	底				0.20	柔らかい白	薄手の小片。		
58	〃	〃	II	〃	口 縁	(13.5)			0.30	〃	端反り口縁で口縁端に無釉部分が残る。	○	
59	〃	〃	〃	〃	底				0.25 0.35	〃	No.57と同一個体。		
60	Fd121	〃	〃	〃	底 高 台		(7.0)		0.25 0.30	白	薄手で高台内に小さな亀裂が走る。	○	○
61	Fe115	〃	〃	〃	底				0.30	〃	内面底部に褐色となる部分がある細片。		
62	Ga136	2 号 堀	〃	〃	高 台				〃	〃	高台に亀裂が入り、不整となる細片で内面の光沢が失なわれる。		
63	Zz	?	〃	〃	口 縁				〃	〃	端反り口縁の小片。		

（ ）は推定値を示す。

(3) 青花（染付）（第101～103図　第19、22、23表　図版38、39）

碗43点、皿51点、盃1点、把手1点、不明8点の合せて104点である。すべて破片であり、器形の推定可能なものは僅か2点である。同一個体とみられる破片は碗3点、皿6点まで認められる。伊万里系とみられる碗2点(86)、(98)を除いていずれも舶載磁器とみられ、青磁、白磁、赤絵を含む舶載品中ではもっとも多い。

一の郭より三の郭にかけて分布し、もっとも広範囲に渡っているが、一の郭及びこれを画する3～5号堀に集中する。特に3・4号堀では全体の53.4%を占めている。二、三の郭では著しく減少し、灰釉陶器等の分布に共通する傾向にある。一の郭では柱穴掘り方の埋土中に碗6点、皿4点を含む合せて11点、Bj24井戸に碗1点があり、共に埋設されるものは認められない。二の郭の3点も同様に柱穴埋土中に出土する小片である。他は共に遺構検出中に遺物の含まれる柱穴付近に認められ、郭の南東では1点も出土していない。3号堀では西端に少なく、中央部以東に密である。4号堀ではもっとも多く、碗、皿片がほぼ全体に及び、5号堀に連続して一の郭東辺に沿って分布する。共に覆土上層に含まれ、4号堀ではIII層に僅か1点が含まれるのみである。そのほかは鞍部及びGb21井戸に出土し、伊万里系がこれにあたる。



第101図　青花・赤絵出土分布図

碗44点は口縁部11点、体部23点、底部及び高台部9点であり、同一個体には体部2点、底部1点が含まれる。口縁部は内彎気味に立ちあがり、口縁端部にやゝ丸味を有するもの(72)、(87)2点と体部に比して口縁端部に薄くなる(30)、(33)、(37)、(38)、(99)、(101)の6点がある。推定口径は前者が15.2～16.0cm、後者では13.8～16.2cmとなって一定していない。その他、口縁部が著しく外反してくびれを有する(101)1点と緩やかに外反する(70)1点があり、共に口径は12.1cmと推定される小型の浅い碗である。共に暗青色、または藍色を呈して絵付され、口縁部内外面に1～2条線を有し、うち7点には更に文様帯の描線が認められる。外面に波濤文帯を有する5点は共に内面に1条であり、2条線を描く4点は内外面に対応して巡る。(38)1点のみは条線が描かれず、内面は無文である。

体部は一定した器厚をなし、滑らかに下降して腰部に沿って肥厚する。紋様は外面にのみ描かれ、条線下、または波濤文帯よりやゝ間をおいて線描される。蕉葉文6点が含まれもっとも多く、その他は唐草文3点、草花文3点が含まれる。

第22表　青　花　出　土　表

遺構	碗	皿	不明・その他	計	出土比(%)
一の郭	11(2)	16(4)	1	28(6)	26.9
二の郭	1	2	1	4	3.8
三の郭	3	2	1	6	5.8
2号堀	1			1	1.0
3号堀	6	16	1	23	22.1
4号堀	17(1)	13(2)	4	34(3)	32.7
5号堀	3	1	1	5	4.8
その他	1	1	1	3	2.9
計	43(3)	51(6)	10	104(9)	100.0

（　）は同一個体

腰部には高台脇と共に1～2条線の巡るものが多い。(98)のみは筒形の茶碗であり、5単位の菊花文を有する。

底部は高台を削り出し、器厚は体部に比して厚薄があって一定していないが、中央部に若干厚手となる。高台はやゝ深く削り出し、畳付上方で外面より更に削り取り、畳付幅は鋭角となる断面を有して狭まる。畳付は無釉となり、内外面に砂粒の溶着するものが含まれる。外面は高台脇より1～2条線が巡り、内面では圏文、または重圏文に折技文、草花文がみられる。高台径は4.5～6.5cmと推計される。

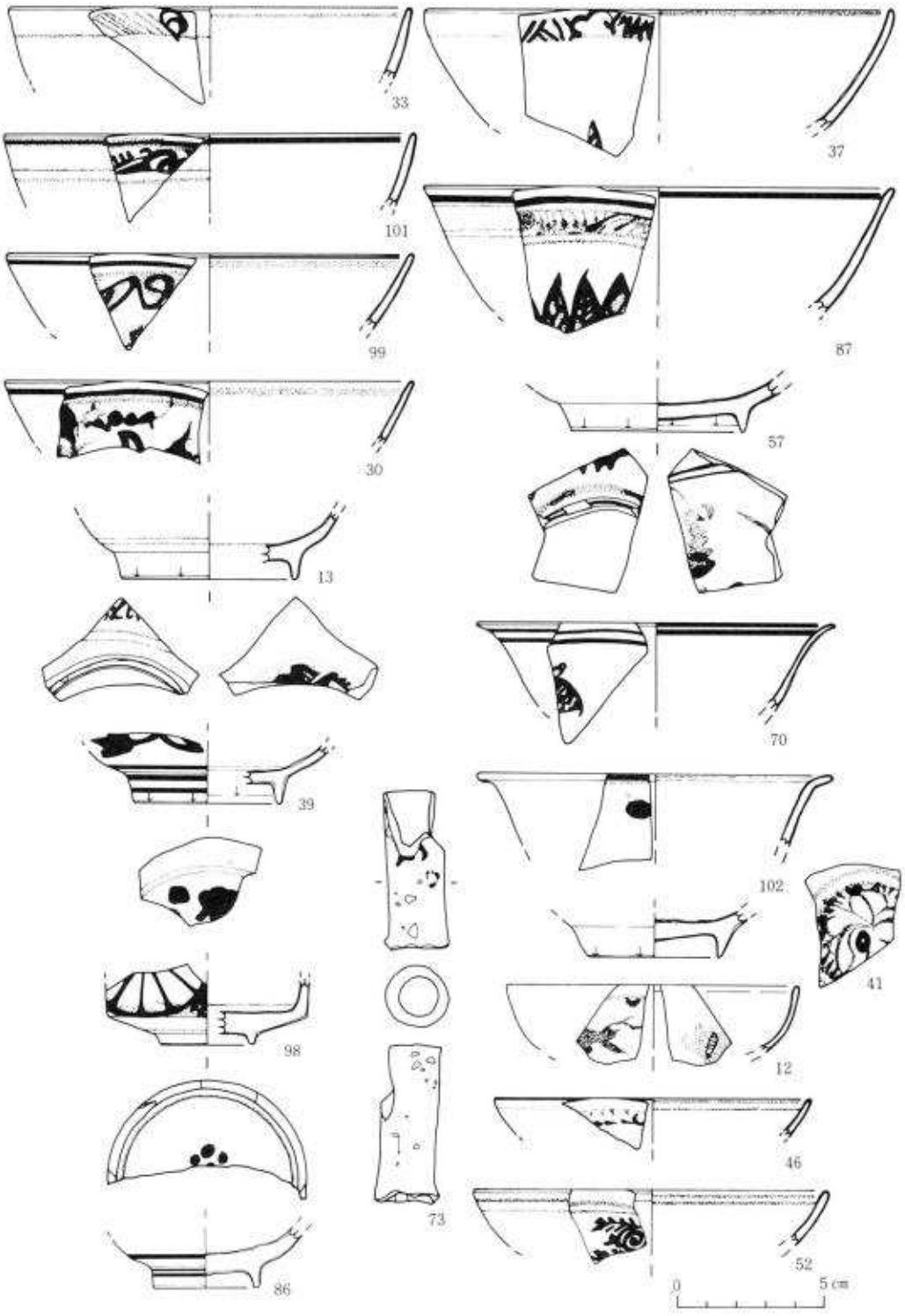
(86)、(98)の2点は共に底部の器厚があつく、低い削り出し高台で畳付幅が広く、平滑である。外面に暗い発色の1～2条線が走り、内面は(98)にのみ圏文に5弁の花文が配される。推定高台径は3.4～3.8cmで前者に比して著しく小さい。

皿は50点中器形の推定できるものは(3)、(100)の2点であり、他は口縁部19点、体部10点、底部及び高台部19点の破片である。

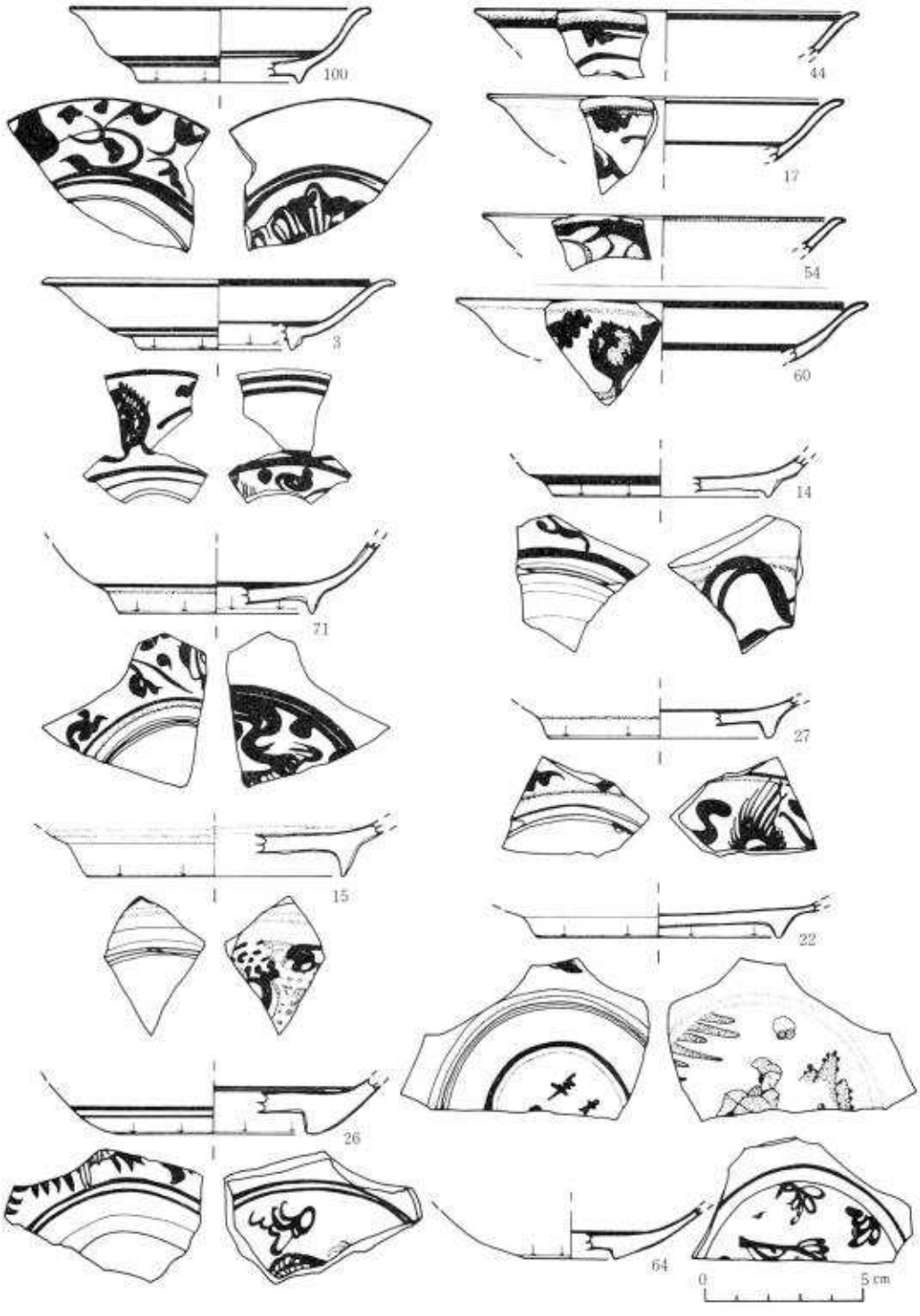
口縁部が端反りし、口縁端部に薄くなって立ち上がるものには(3)を含めて12点がある。内彎気味に立ちあがるものには薄く引き出される(1)、(43)、(46)、(92)の4点とやゝ肥厚して丸味を有する(7)、(52)、(53)の3点がある。そのほかくの字状に外反する(96)1点と体部より内彎して口縁部に厚手となる(12)1点が含まれ、口径は9.0～15.0cmと推定される。(1)を最大として11.0～13.2cmのもの12点、9.0～9.6cmのもの3点となり、12.0cm前後に集中する。口縁部の形状による変化は特に認められない。紋様は口縁部外面にすべて1～2条線を配し、(3)、(7)の2点は口縁端部に巡っている。内面は同様に対応する条線が走り、(91)、(96)の2点には上1、下2条によって波濤文帯を描く。

体部は口縁部に比して若干肥厚し、腰部にかけて殆ど一定した器厚をなし、または僅かに厚くなって底部に続く。(12)のみは体部に薄くなって湾曲する。釉調は(7)、(12)が柔らかい白色釉で光沢が弱く、(1)に貫入が走って褐色がかった白色を呈する。そのほかは一様の白色である。紋様は碗と同様であり、外面には唐草文が多い。牡丹唐草文は6点まで判明する。内面は(12)で不鮮明な草花文が底部にかけて認められるほかすべて無文である。(52)、(53)がやゝ明るい発色をなす。

底部は体部に比して浅い削り出しによって薄手となる。砂高台が7点でもっとも多く、削り



第102図　青　　花（1）



第103図　青　　花（2）

出しのやゝ深い(15) 1点が含まれる。碁笥底をなす(26)、(64)の2点は共に高台脇や高台内に石はぜが生じ、割れ目が散見される。また、前二者では畳付の断面が鋭角をなし、碗と同様である。畳付幅は(3)、(100)で0.15～0.20cmを計る。施釉は畳付内外面に無釉となるが、(14)に限っては高台内全面が露胎となる。推定高台径は(15)の9.2cmを除いて4.8～5.2cmが3点、6.4～7.6cm 4点となる。外面の紋様は腰部より高台脇に2条線が巡り、(22)にのみ重圏文内に大（明）年（造）の銘が認められる。内面にはすべて重圏文を有し、(13)の寿字文、(22)の人物文、(3)、(27)、(71)に玉取り獅子文、(100)の十字花文等が認められる。(22)が乳白色釉で線描が薄いほか、透明な青白色釉でやゝ暗い発色である。碁笥底の後者2点は体部に比して厚手となり、(64)は浅く、高台径が2.9cmと著しく小さい。共に砂粒が付着し、畳付に無釉となる。(64)ではやゝ不整に露胎をなして広がっている。全体に青味がかった柔らかい白色釉で(26)には貫入が内外面に走る。外面は(64)が無文であるが、(26)では2条線が巡る。内面では共に重圏文を有し、草花、または折枝文状の線描である。

その他は碗、皿の小片とみられるほか、水注様の把手の破片(73) 1点が含まれる。先端部に薄手となって僅かに外反し、青みがかった施釉は内面1.5cmまで及び、外面に藍色の紋様を有する。全体に石はぜが多く、胎土は碗、皿と同様の白色を呈する。先端部の径は2.1cmである。

第23表　青　花　一　覧　表

No.	出土地点	遺構	層位	器種	部位	口径 cm	高台径 cm	器高 cm	器厚 cm	外面の紋様	内面の紋様	その他の特徴	実測図	写真
1	Ai27	一の郭	P54	皿	口縁	(15.0)			0.35	条線下は無文	条線下無文	二次加熱によって光沢を失なう。貫入が著しい。		○
2	Bd36	〃	P208	〃	底				0.25 0.35	中央部に銘？	無文	中央部にもっとも器厚があつい。高台内に砂粒が付着する。光沢が弱い。		
3	Bf36	〃	I	〃	口縁 高台内	(11.1)	(4.8)	2.2	0.20 0.35	条線に牡丹唐草文、2条線	2条線 重圏文内不明	高台脇より不整に釉垂が滞留する。外面に亀裂が入る。	○	○
4	〃	〃	〃	〃	高台				0.25	不明	不明	細片No.2と同一個体で不詳。		
5	〃	〃	〃	〃	底				0.20	〃	〃	〃		
6	〃	〃	〃	〃	〃				0.25	〃	〃	〃		
7	Bf21	〃	P737	碗？	口縁				〃	条線下は不明	条線	柔らかい白色釉で紋様は不鮮明である。		○
8	Bf15	〃	P784	皿	体				〃	不明	不明	断面に鉄分が付着する小片で不詳。		
9	Bg48	3号堀	I	〃	〃				0.30 0.70	下方に蕉葉文	圏文内寿字文	明るい発色で光沢が強い。		○
10	〃	〃	II	〃	〃				0.40	外反部に条線、上不明	条線上に唐草文	体部より外反する。二次加熱によって内外面やや褐色がかる[illegible]。		○
11	〃	〃	〃	〃	口縁				0.25	2条線に牡丹唐草文	2条線下は無文	打ち欠いたように不整な断面をなす。		
12	〃	〃	〃	〃	口縁 体	(9.0)			〃	条線下は不明	花文	薄手の小皿とみられる小片。No.9に類似する。	○	○
13	Bh46	〃	〃	碗？	底		(6.4)		0.35 0.45	2条線上は不明	圏文内寿字文	砂高台は不整で、畳付は無釉である。	○	○
14	Bi48	〃	〃	皿	〃		(7.6)		0.35 0.40	高台脇2条線上は唐草文	重圏文内は獅子文	畳付より高台内にかけて無釉。見込みは光沢が失なわれ、擦痕を有する。		○
15	Bi36	一の郭	〃	皿？	〃		(8.7)		0.50	高台脇1条、腰部2条線上は不明	重圏文内は唐草文	畳付無釉。高台内の細貫入が著しい。	○	○
16	Bj24	井戸	II	碗	口縁 体	(14.8)			0.30	条線下は牡丹唐草文	口縁に条線、見込重圏文	薄手の端反り口縁。紋様はやや暗い発色で不鮮明である。	○	○
17	Ca103	一の郭	P1428	皿	口縁 体	(11.2)			0.25 0.35	2条線に唐草文	口縁に条線、見込圏文	端反りして薄手となる。	○	○
18	Ca133	〃	I	碗	体				0.40	高台脇に条線	重圏文	柔らかい白磁釉で施文は不鮮明である。No.23と同一個体。		
19	Cc100	〃	P1332	皿	底				0.25 0.35	中央部に銘	草花文？	中央部にやや厚くなる小片。		
20	Ci 21－18	3号堀	I	碗	体				0.30	不明	不明	二次加熱によって光沢を失なう細片で不詳。		
21	〃	〃	〃	〃	口縁				0.30	唐草文帯下不明	1条	柔らかい白磁釉で紋様の不鮮明な細片。		
22	Cj33	〃	II	皿	底		(7.7)		0.15 0.35	重圏文大（明）年（造）銘	重圏文内人物文	薄手で特に深い。すい柔らかい白色釉で見込みに擦痕がある。畳付は無釉。	○	○

23	Cj3	一の郭	P2352	碗	体 高台				0.25 0.70	体部下半、高台各2条線	見込みに不整な重圏文	柔らかい白色釉でやや褐色がかかり、紋様は明瞭でない。		○
24	〃	〃	〃	〃	〃				〃	〃	中央に銘？	砂高台で高台内に付着が著しい No.23と同一個体。		
25	C	〃	II	〃	体				0.30 0.45	唐草文	無文	内面に細貫入が走る。		
26	Da24	3号堀	〃	皿	底		(5.4)		0.30 0.60	2条線に唐草文？	重圏文内は不明	砂高台で畳付は無釉、高台内側に砂粒が付着する。貫入多い。	○	○
27	Da18	一の郭	〃	〃	体 底		(7.5)		0.30 0.40	体部に唐草文	重圏文内は玉取獅子文	砂高台で高台内に砂粒が広がり亀裂が走る。畳付無釉。	○	○
28	〃	〃	〃	〃	〃				0.40 0.45	高台脇に2条、腰部に2条線	重圏文内は不明	高台を不整に欠き、剥落痕が残る。明るい発色の小片である。畳付無釉。		
29	〃	〃	〃	〃	口縁 体				0.30	牡丹唐草文	口縁に条線、見込み圏文？	端反り口縁の小片。		
30	Da112	〃	P1677	碗	口縁	(14.2)			〃	2条線下に唐草文	口縁2条線下は無文	体部より薄くなって立ちあがる紋様はやや不鮮明である。	○	○
31	〃	〃	〃	？	高台				0.45	高台脇に2条線	重圏文内は不明	高台を不整に打ち欠いている小片。		
32	〃	〃	II	皿	体 底		(7.6)		0.35	高台脇に2条線上唐草文	〃	高台に砂粒の付着が多い、畳付無釉。		
33	Da118	〃	〃	碗	口縁	13.8			〃	波濤文帯	口縁に条線下無文	口縁端にやや褐色がかる暗い発色をなす。	○	○
34	Db118	〃	P1790	〃	体				(0.35) 〃	不明	無文	細貫入が多い細片。		
35	D	〃	II	皿	〃				0.25	唐草文	重圏文	やや暗い発色の細片。		
36	〃	〃	〃	〃	底				0.35	中央部に角銘	無文	高台無釉、高台内は灰色がかって銘は不鮮明。		
37	〃	〃	〃	碗	口縁 体	(16.0)			〃	口縁部に波濤文帯	口縁に条線下無文	貫入が著しく、胎土は褐色がかって粗雑である。	○	○
38	〃	〃	〃	〃	口縁	(15.0)			0.30	唐草文	無文	褐色がかって暗い発色をなす小片。		
39	〃	4号堀	I	〃	体 底		(5.0)		〃	高台2条体部下半1条唐草文	重圏文内 唐花文？	明るい発色をなし、光沢が失なわれる。見込みに擦痕を有する。	○	○
40	〃	〃	〃	盃	高台				0.15 0.35	高台脇に1条、他は不明	重圏文内は不明	明るい発色で、見込みに砂粒が付着する。		
41	〃	〃	〃	碗	底		(4.5)		0.50	無文	圏文内牡丹文？	中央部に厚くなる畳付無釉。光沢が失なわれる。	○	○
42	〃	〃	〃	〃	体				0.30	蕉葉文	重圏文	下半に釉縮してやや不整。紋様は淡い発色である。		○
43	〃	〃	〃	皿	口縁	(11.0)			0.25	2条線に唐草文	2条線	細片。		
44	〃	〃	〃	〃	〃	(11.2)			0.30	条線に唐草文	1条線下無文	端反り口縁で貫入が外面に多い。	○	○
45	〃	〃	〃	碗？	体				0.35	不明	無文	柔らかい白色釉で紋様に濃淡がある小片。		
46	〃	〃	〃	皿	口縁	(12.0)			0.15 0.25	条線に紋点状の波濤文	2条線	内彎して薄手となる。口縁の小片やや明るい発色である。	○	○
47	〃	〃	〃	碗	〃				0.25	条線下波濤文	条線下無文	口縁端は稜を残して滑らかでない。やや明るい発色をなす。		
48	〃	〃	〃	皿	〃	(12.1)			〃	条線下に唐草文	条線？	端反り口縁の細片。		
49	〃	〃	〃	皿？	〃				0.20	条線下不明	2条線	柔らかな白色釉の細片。		
50	〃	〃	〃	〃	体				0.20	条線	不明	外反部分の細片。		
51	〃	〃	〃	碗	高台				0.40	混濁して不明	圏文内不明	柔らかい白色釉で畳付は無釉、やや粗雑である。		
52	〃	〃	〃	皿	口縁	(9.6)			0.25 0.35	2条線下唐草文	2条線下無文	口縁端がやや褐色がかる小片。	○	○
53	〃	〃	〃	〃	〃	(12.6)			0.25	〃	〃	細片、No.56と同一個体。		
54	〃	〃	〃	〃	〃	(12.2)			0.20 1.30	条線下不明	条線下無文	端反り口縁の小片。	○	○
55	〃	〃	〃	碗	体				0.35	不明	無文	光沢を失ない紋様不鮮明な細片 No.36と同一個体。		
56	〃	〃	〃	皿	〃				〃	唐草文	〃	明るい発色を呈する小片		
57	〃	〃	〃	碗	底		(6.0)		0.40	高台脇2条線	重圏文内 草花文？	見込みに擦痕を有し、細貫入が多い。畳付無釉、高台内に亀裂が入り全体に粗雑。	○	○
58	〃	〃	〃	？	体				0.20	無文	無文	細片で不詳。		
59	〃	〃	〃	？	高台				0.50	高台脇条線	重圏文	〃		
60	〃	〃	〃	皿	口縁 体	(13.2)			0.25 0.35	条線下牡丹唐草文	条線、底部重圏文	端反り口縁で、口縁端部に薄くなる。	○	○
61	〃	〃	〃	？	体				〃	不明	無文	二次加熱をうけて光沢を失なう細片。		
62	〃	〃	II	碗	〃				0.25	牡丹唐草文	〃	貫入を有し、内面は光沢が失なわれる。		
63	Dc130	〃	〃	〃	〃				0.35	花文	〃	内面に細貫入があり、胎土は灰白色を呈する。外面に気孔が目立つ。		○
64	〃	〃	〃	皿	体 底		(2.9)		0.50	無文	重圏文に折枝文	砂高台で高台部無釉、高台内に砂粒が付着する。	○	○
65	D	〃	〃	碗	体				0.30	唐草文？	無文	二次加熱をうけて光沢を失ない紋様の不鮮明な小片。		
66	〃	〃	〃	〃	〃				0.40	蕉葉文、高台脇に2条線	圏文内不明	外面は明るい発色をなす。		○
67	〃	〃	〃	〃	〃				0.35	〃	圏文	No.61と同一個体。		○
68	〃	〃	〃	〃	底				0.45	無文	草花文？	見込みに砂粒が付着する小片。		○
69	〃	〃	〃	碗？	体				0.25	条線に蕉葉文	不明	内面に暗い濃淡で描かれる細片。		
70	〃	〃	〃	碗	口縁	(12.1)			0.20	2条線下不明	2条線下無文	薄手の端反り口縁で外面はやや明るい発色をなす。	○	○
71	〃	〃	〃	〃	体 底		(6.4)		0.25 0.45	牡丹唐草文 高台脇2条線	重圏文内玉取獅子文	畳付は無釉で砂粒が付着し、褐色がかる。	○	○
72	〃	〃	III	〃	口縁	(15.2)			0.25	条線下波濤文	条線下無文	区画文帯はNo.7と同一とみられる。口縁端部に角張る。		
73	Dc39	輪部	II	水注？	把手				〃	不明	—	暗い発色で無釉部分が斑点状に残る。	○	○

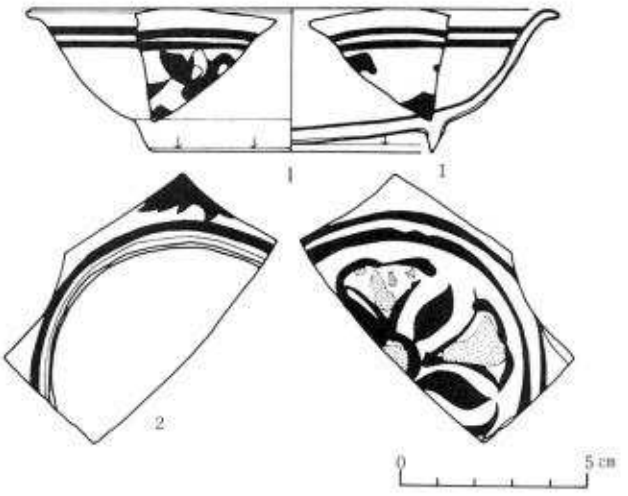
74	Dc136	4号堀東	I	皿	底				0.25	無　文	無　文	細片で不詳。		
75	Dh3	3号堀	〃	〃	体				0.30	唐草文	不　明	光沢の弱い細片。胎土分析。		
76	Dj100	〃	II	碗	〃				0.25	不　明	無　文	小片で不詳。		
77	〃	〃	〃	皿	高　台				0.35	高台脇に条線	不　明	畳付無釉の小片		
78	D	〃	〃	〃	口　縁				0.30	条線下不明	条線下無文	端反り口縁で、光沢を失なう小片。		
79	〃	〃	〃	〃	高　台				0.20	高台脇に条線	重圏文内不明	高台高0.35cmの砂高台小片。		
80	Ea127	〃	〃	碗？	体				0.35	不　明	無　文	光沢を失なう細片。No.38、39に類似する。		
81	Ed115	〃	〃	？	〃				0.25	〃	〃	細片で不詳。		
82	E	5号堀	〃	皿	〃				〃	唐草文？	重圏文	薄手の小皿とみられる細片。		
83	〃	〃	〃	碗	〃				〃	唐草唐花文	無　文	明るい発色の線描をなす小片。		○
84	Ed121	〃	〃	碗？	〃				0.40	不　明	〃	柔らかい白色釉で絵様不鮮明である。		
85	〃	〃	〃	？	〃				0.35	〃	〃	細片で不詳。		
86	E	〃	〃	碗	体 底		(3.8)		0.45 0.65	高台脇に2条、腰部に条線	〃	釉調は柔らかい白色釉で光沢が弱い。高台が低く削り出しが不整である。	○	○
87	〃	二の郭	〃	〃	口縁 体	(16.0)			0.30 0.35	条線と波濤文 下方蕉葉文	口縁に条線 下は無文	淡青色の線描に亀裂が走る。内面下方に擦痕を有する。	○	○
88	〃	3号堀	〃	皿	口　縁	(11.6)			0.35	条線下唐草文	条線下無文	光沢を失なう端反り口縁の小片。		
89	〃	〃	〃	〃	底				0.30	不　明	重圏文内不明	細片で不詳。		
90	〃	〃	〃	〃	口　縁				0.25	〃	条　線	端反り口縁の細片。		
91	〃	〃	〃	〃	〃	(12.0)			0.30	条線下不明	条線と区画帯文	内彎気味に立ちあがる口縁小片。		
92	〃	〃	〃	碗	体				0.35	不　明	無　文	細片で不詳。		
93	〃	〃	〃	皿	底				0.60	〃	不　明	[illegible]をなす底部片とみられる細片で不詳。		
94	Ed136	二の郭	P282	〃	体				0.30	唐草文	無　文	明るい発色で両面に貫入の走る小片。		
95	Ff130	〃	P258	？	〃				0.55	不　明	不　明	細片で不詳。		
96	〃	〃	〃	皿	口　縁	(12.4)			0.25	2条線下唐草文	区画帯文不明	端反り口縁の小片。		
97	Gb124	2号堀	II	碗	底 高台					高台脇2条線、高台2条線	重圏文、折枝文	見込みは鮮明な発色でもっとも良質である。		○
98	Gd21	井　戸	底　部	〃	体 底		(3.4)		0.30 0.80	菊花文、条線	圏文、中央部に花文	やや暗い発色で内外面に貫入が著しい。高台が低く整った削り出しである。	○	○
99	Gg118	三の郭	II	〃	口縁 体	(14.0)			0.25 0.30	2条線下唐草文	2条線下無文	口縁端にやや丸味を有する。地文は不鮮明である。	○	○
100	G	〃	I	皿	口縁 底	(9.5)	(5.2)	2.4	0.25 0.40	条線、唐草文 高台脇に2条線	口縁に条線、見込みに十字花文	端反り口縁にややまるみがある。高台は無釉、全体に粗雑である。	○	○
101	He118	〃	〃	碗	口　縁	(14.0)			0.35	条線に波濤文	条線下無文	口縁端にやや丸味を有する。	○	○
102	Hh124	〃	〃	碗？	〃	(12.1)			0.35	2条線下不明	2条線下無文	端反り口縁でやや褐色がかり、亀裂が走る。	○	○
103	〃	〃	〃	？	体				0.30	不　明	無　文	黒褐色がかって不鮮明である。伊万里系？		
104	〃	〃	〃	皿	〃				0.35 0.45	唐草文？	重圏文	やや明るい発色をなす小片。		

（　）は推定値を示す。

(4)　赤絵（五彩）（第101、104図　第19、24表　図版34、40）

皿の同一個体とみられる３点である。一の郭中央部よりやゝ東方に底部、その南北にあたる３、４号堀覆土に口縁部が出土する。

口縁部は端反りし、口縁端部に僅かに肥厚して丸味を有する。内外面に赤色による不整な２条線が配され、体部内外面には赤、緑の２色によって牡丹唐草文とみられる描画が認められる。体部はほゞ一定した器厚で底部に続く。底部はやゝ深く削り出され、中央部の器厚は0.35cmである。高台は高台内に鋭角をなし、外面は斜方向に削り取られて畳付が狭い。高台高は0.65cmである。高台内外面には石はぜが認められ、砂粒の溶着がみられる。畳付部分を除く施釉は柔らかい白色を呈し、高台脇に不整な条線が巡る。底部内面には重圏文に唐花文が描かれ、花弁と花芯を赤色で縁取って緑色とし、葉部は赤色によって筆描される。推定口径14.2cm、高台径7.5cmであり、器高は3.8cm前後と推定される。

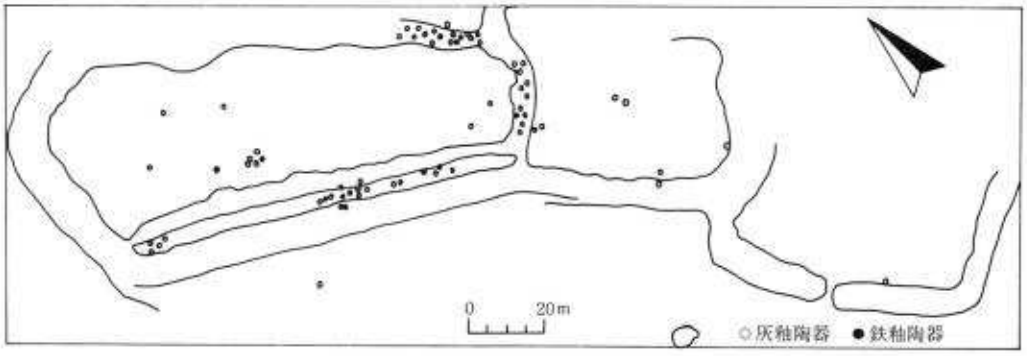


第104図　赤絵　　第24表　赤絵一覧表

No.	出土地点	遺　構	層位	器種	部位	口　径 (cm)	高台径 (cm)	器　高 (cm)	器　厚 (cm)	外面の紋様	内面の紋様	その他の特徴	実測図	写真
1	Cj113	4 号 堀	II	匙	口縁～体	(14.2)			0.30 0.25	2条線下に唐草文	2条線下は不明	端反り口縁でやや歪みがある	○	○
2	Da112	一 の 郭	〃	〃	底		(7.5)		0.35	高台脇に条線上は唐草文	重圏文に花唐草文	畳付は無釉、高台内に亀裂が走る	○	○
3	Dh3	3 号 堀	1	〃	口　縁	(14.2)			0.20 0.25	2条線下に唐草文	2条線下は不明	端反りの口縁、No.1と同一個体		○

（　）は推定値を示す。

(5)　灰釉陶器（第105、106図　第19、25、26表　図版41）



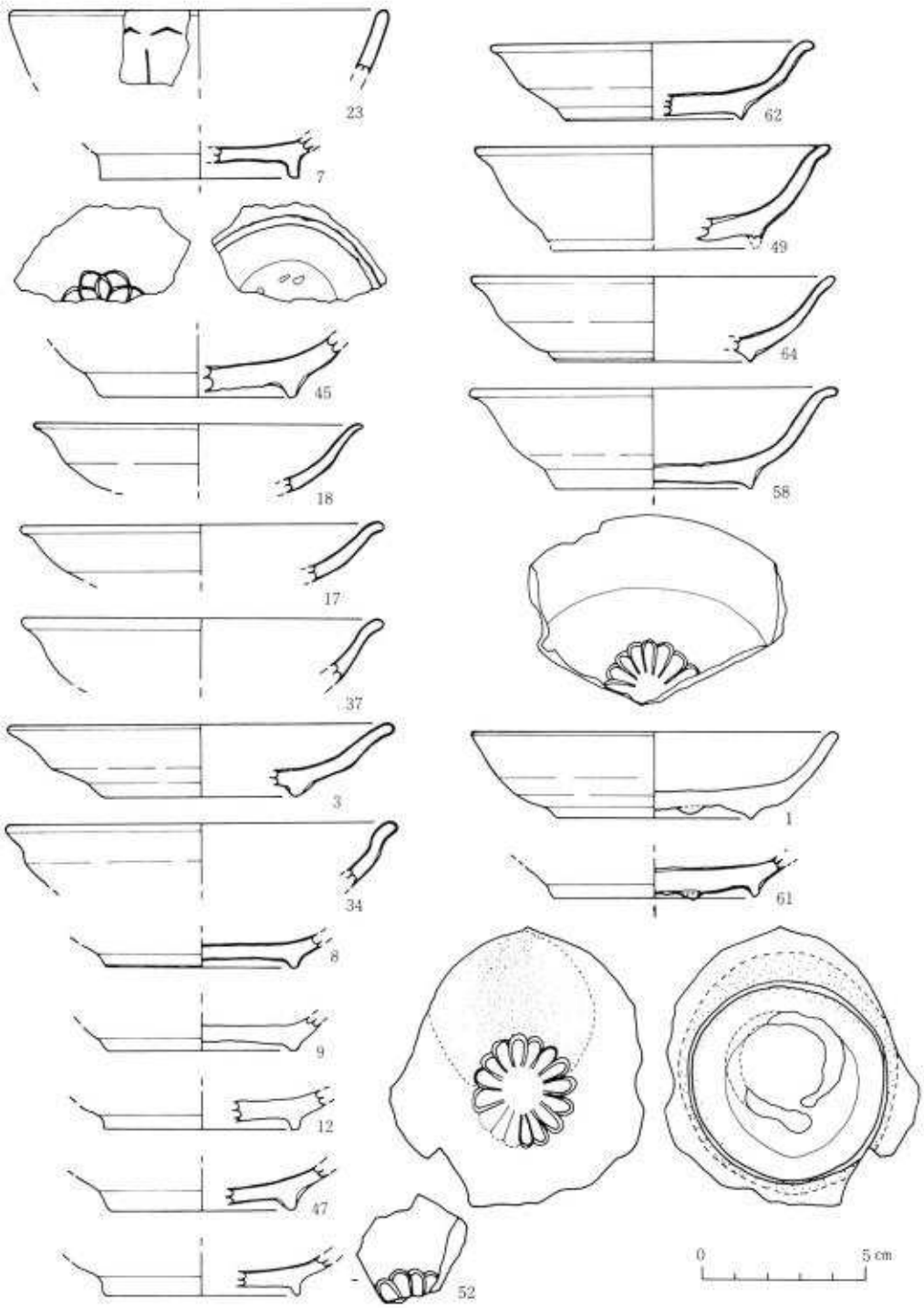
第105図　灰釉・鉄釉陶器出土分布図

碗4点、Ⅲ61点の合せて65点である。器種の明確でない細片が含まれているが、同一個体とみられる破片を除いては61点となる。その大部分は一の郭を画する3～5号堀覆土上層に含まれ、一の郭を含めて87.7%が集中し、ほゞ舶載磁器に共通する分布である。郭内の遺構では柱穴の掘り方に6点、Cb18井戸に3点、Dh109竪穴遺構に1点がある。Cb18井戸の3点が底部に出土し、埋没以前の遺物とみられるほか、共に埋土混入遺物である。

第25表　灰釉陶器出土表

遺　構	碗	Ⅲ	計	出土比
一の郭	1	12(3)	13(3)	20.0%
二の郭		5	5	7.7
三の郭		1	1	1.5
3号堀	2	15(1)	17(1)	26.2
4号堀	1	13(1)	14(1)	21.5
5号堀		13	13	20.0
その他		2	2	3.1
計	4	61(5)	65(5)	100.0

（　）は同一個体



第106図　灰釉陶器

碗４点は(23)の口縁部を除いて高台部片であり、高台の削り出しや器厚によって皿と識別されるものである。(23)は直線状に立ちあがり、口縁端部に丸味を有する。口縁部直下の外面に簡略化された蓮弁文を配するが、二次加熱をうけて滑らかさを失い、やゝ白色化して全体は明らかでない。胎土は灰色をなし、吸水性がある。推定口径は11.6cmを計る。(７)は高台の削り出しが深く、畳付は(45)と共に0.25cm幅をとって比較的整っている。全面に施釉される高台内は輪トチンの痕跡を有し、やゝ褐色が強い。内面底部は釉薬が厚く、(７)では印花文が中央部に押印される。底部の器厚0.45～0.7cm、高台高0.4～0.6cmとなり、高台径は6.2cm前後と推定される。

皿は全体の器形が推定できる５点が含まれ、他は口縁部25点、体部14点、底部及び高台部合せて17点である。口縁部は体部より内彎気味に立ちあがり、口縁部直下で外反する端反りの小皿である。口縁部の端反りには若干の強弱が認められ、口縁端部に薄くなるが、不整をなすものが含まれる。口径は10.0～12.6cmと推計され、20点の平均では11.3cmとなる。体部には外面に成形痕を有するものが大部分であり、腰部にむかって肥厚する。少数ながら器厚が一定するものが含まれ、滑らかに整形される(58)、口縁部直下になお僅かな稜を残す(52)等がある。底部は全体的に厚手となるものが多い。底部21点では器厚0.35～0.80cmとなり、ほゞ0.50～0.65cmに集中し、すべて中央部に厚い。高台は全体に低く削り出され、0.3～0.4cm前後を計り、畳付幅が狭まって不整をなす。大部分は高台内に径3.0～3.3cmの不整な輪トチンの剝離痕を有し、淡褐色がかって滑らかさがない。高台径は5.8～6.6cm、16点の平均値では6.09cmとなる。内面底部は高台脇と同様一方に偏って薬溜する。中央部に印花文を有する４点のうち３点は16弁の菊花文、他は梅花文とみられる。また、(１)のみは不整に露胎を呈し、ロクロ成形痕や篦様の削り痕が認められる。

第26表　灰　釉　陶　器　一　覧　表

No.	出土地点	遺　構	層位	器種	部位	口径 cm	高台径 cm	器高 cm	器厚 cm	特　徴	実測図	写真
1	Bd30	一の郭	P264	皿	口縁 底	(11.4)	6.1	2.7	0.30 0.40	褐色がかった淡緑色をなす。内面底部は成形痕を残し不整に施釉となる。高台内に輪トチン痕、外縁の付着がみられる。二次加熱をうける。	○	○
2	Bd15	〃	P887	〃	底		(5.9)		0.60	高台脇に薬溜し、高台内にトチンの痕跡を残す。		
3	Bg51 ～Dj100	〃	II	〃	口縁 底	(11.0)	(6.0)	2.2	0.40 0.50	端反り口縁で器高が高い。高台脇に薬溜し、内外面に貫入が多い。輪トチン痕を残す。	○	○
4	Bg48	3号竪	I	〃	口縁	(11.0)			0.35 0.55	端反り口縁で外面に成形痕が残る。口縁端を除き貫入が目立つ		
5	〃	〃	〃	〃	〃				0.40	端反り口縁の小片でやや光沢が弱い。		
6	〃	〃	〃	〃	〃				0.30 0.40	弱い端反り口縁の小片で口縁端部に褐色が強い。		
7	〃	〃	〃	碗？	〃		(6.2)		〃	高台の削り出しが深く、高台内は暗褐色を呈し、トチン痕を残す。見込みに梅花文を有する。	○	○
8	Bh6	一の郭	P1016	皿	〃		(5.9)		0.50	淡黄緑色釉で光沢を失なう褐色部分が多い。内面底の中央部に花文を有し、高台に輪トチン痕を残す。	○	○
9	Ch18	〃	井戸	〃	底		〃		〃	二次加熱によって白褐色を呈する。高台内に輪トチン痕を残す。見込み中央部に印花文を有する。	○	○
10	〃	〃	〃	〃	〃				0.60	小片でNo.９と同一個体。		
11	〃	〃	〃	〃	体				0.30	細片でNo.９と同一個体とみられる。		
12	Ch15	〃	II	〃	底		(6.0)		0.45 0.65	二次加熱によって釉薬を失なって白色となる。No.９に比して高台の削り出しが深い。	○	○
13	Cj21	3号竪	I	〃	体				0.35	細片。		
14	〃	〃	〃	〃	底				0.80	浅い削り出しの高台で高台脇の薬溜が厚い。		

15	Cij21	3号竪	I	II	体				0.45	端反り口縁とみられる小片。		
16	C	一の郭	II	〃	底		(5.8)		0.55	高台脇に煤付し，高台内にトチン痕を残す。		
17	Da18	3号竪	〃	〃	口体縁	(11.2)			0.30 0.45	端反り口縁で外面に成形痕を残す。	○	
18	〃	〃	〃	〃	〃	(10.4)			0.20 0.45	端反り口縁で口縁端にうすくなる。外面に成形痕を残し，やや粗雑である。	○	○
19	〃	〃	〃	〃	体				0.40	No.18と同一個体とみられる細片。		
20	〃	〃	〃	〃	〃				0.45	淡緑色の小片で黄入が目立つ。		
21	〃	〃	〃	〃	口縁				0.35 0.55	小片でやや黄入が少ない。		
22	〃	〃	〃	〃	体				0.55	外面に成形痕を残す細片。		
23	Db121	一の郭	P178I	碗	口縁	(11.6)			0.45	二次加熱によって褐色がかり，口縁部直下の外面に簡略化された連弁文を有する。	○	○
24	〃	〃	〃	II	底		(6.5)		0.50	浅い削り出し仕上げの高台で畳付がやや良い。高台脇に煤溜する。		
25	D	3号竪	II	〃	体				0.45	黄入の多い小片。		
26	〃	〃	I	〃	〃				0.35 0.55	外面に成形痕を有する小片。		
27	Dc39	鞍部	II	〃	口体縁	(11.0)			0.35 0.40	口縁がやや肥厚し，口縁端が斑点状に褐色がかる。		
28	Dd130	4号竪	I	碗?	高台				0.70	二次加熱をうけ，不整な断面となる。高台脇に釉溜が厚い。		
29	〃	〃	〃	II	口体縁				0.40	端反り口縁で口縁端が褐色がかる。		
30	D	〃	〃	II?	体				0.45	外面に成形痕を残す細片。		
31	〃	〃	〃	〃	〃				0.40	No.30と同一個体とみられる細片。		
32	D	〃	〃	〃	口体縁	(10.2)			0.30 0.40	端反り口縁で内面に砂粒が付着する。		
33	〃	〃	〃	〃	口縁				0.35	弱い端反り口縁端が白色化している。		
34	〃	〃	〃	〃	口体縁	(12.1)			0.35 0.50	やや強い端反り口縁である。	○	
35	〃	〃	〃	〃	口縁				0.35	端反り口縁の小片で二次加熱をうけて光沢を失なう。		
36	〃	〃	〃	〃	〃				0.30	端反り口縁の細片。		
37	〃	〃	II	〃	口体縁	(11.2)			0.30 0.50	端反り口縁で口縁端は粕と光沢がない。	○	
38	〃	〃	〃	〃	口縁				0.45	端反り口縁で口縁部の外面直下に釉薬がやや厚い。		
39	〃	〃	〃	〃	〃	(10.1)			0.20 0.35	端反り口縁で口縁端が薄く，やや褐色が強い。		
40	〃	〃	〃	〃	体底				0.40	端反り口縁の小片。胎土分析。		
41	〃	5号竪	〃	〃	口体縁				0.30 0.50	端反り口縁の小片で二次加熱によって光沢を失なう。		
42	〃	〃	III	〃	体				0.45	断面が二次加熱によって黒色化する細片。		
43	Dh109	竪穴	床	〃	口縁				0.40	やや弱い端反り口縁の小片。		
44	E	一の郭	II	〃	口体縁				0.30 0.45	端反り口縁の小片である。		
45	〃	3号竪	〃	碗?	体底		(6.2)		0.45 0.70	厚手で高台の削り出しが不整である。高台脇を内底中央部に1.1cmのやや厚い釉薬となる。	○	○
46	〃	〃	〃	II	底		(5.9)		0.50	内面底部に花文を有するが二次加熱によって光沢を失ない不明瞭である。高台内にトチン痕を有する。		
47	Ec127	5号竪	〃	〃	〃		(6.1)		0.40 0.35	高台脇に煤溜，高台内にトチン痕を有する。	○	○
48	〃	〃	〃	〃	体				0.30	細片である。		
49	Ec127 Ej130	5号竪 二の郭	II P160	〃	口底縁	(11.0)	(6.6)	3.3	0.30 0.60	二次加熱をうけて光沢を失なう。内面底部に0.3cmの厚さで釉溜する。高台内にトチン痕を残す。	○	○
50	Ed121	5号竪	II	〃	口縁				0.40	端反り口縁の小片である。		
51	Ed124	〃	〃	〃	口体縁	(12.2)			0.40 0.50	細貫入の多い端反り口縁である。		
52	〃	〃	〃	〃	底		(6.1)		0.50	浅い削り出し高台で外面は白色化し，滑めらかさを失なう内面に菊花文を有する。	○	○
53	E	〃	〃	〃	体				0.60	内面に0.15cmの釉溜がある。外面に流線状の細線が走る。		
54	〃	〃	〃	〃	口体縁	(12.5)			0.45 0.35	弱い端反り口縁でやや肥厚する。		
55	〃	〃	〃	〃	〃	(11.0)			0.35	弱い端反り口縁の小片である。		
56	〃	〃	〃	〃	底				0.65	厚さ0.15mの釉薬がある。小片である。		
57	〃	〃	〃	〃	高台				0.40	浅い削り出しの高台で高台脇に釉溜する。		
58	Ee115	二の郭	〃	〃	口底縁	(15.4)	(6.2)		0.35 0.50	端反り口縁を有し，浅い削り出し高台である。高台脇に釉溜し内面底部に菊花文を有する。	○	○
59	〃	〃	〃	〃	口体縁	(12.4)			0.30 0.45	端反り口縁で二次加熱によって滑らかさを失なう。		
60	Fa130	4号竪	〃	〃	体底		(6.3)		0.45 0.65	浅い削り出し高台で高台脇と内面底部に0.15cmの釉溜りを有する。		
61	Fe112	二の郭	〃	〃	底		6.4		0.35 0.80	浅い削り出し高台で高台内に輪トチン痕を残す。内面に菊花文を有し，高台脇と共に釉溜する。	○	○
62	Fe115	〃	〃	〃	口底縁	(10.0)	(5.5)	2.4	0.35 0.60	端反りの小型で削り出しの高台は整っている。内面底部に砂粒があり，高台内は光沢がない。	○	○
63	Ga130	〃	〃	〃	口縁	(12.6)			0.30	端反り口縁の細片である。		
64	Hh112	三の郭	〃	〃	口高台縁	(11.2)	(6.2)	2.6	0.30 0.55	端反り口縁で施釉は高台脇より高台にかけて薄く白色化する。	○	○
65	Za	不明	〃	?	体					細片で不詳		

( ) は推定値を示す

全面に及ぶ施釉は淡緑色、または淡黄緑色を呈し、著しい貫入が縦横に走る。ガラス光沢を失って淡褐色、または白褐色がかる12点は、二次加熱によるものとみられ、共に滑らかさがない。胎土は青味がかった白色の細粒であるが、小気孔を有するものが含まれ、吸水性を有する。

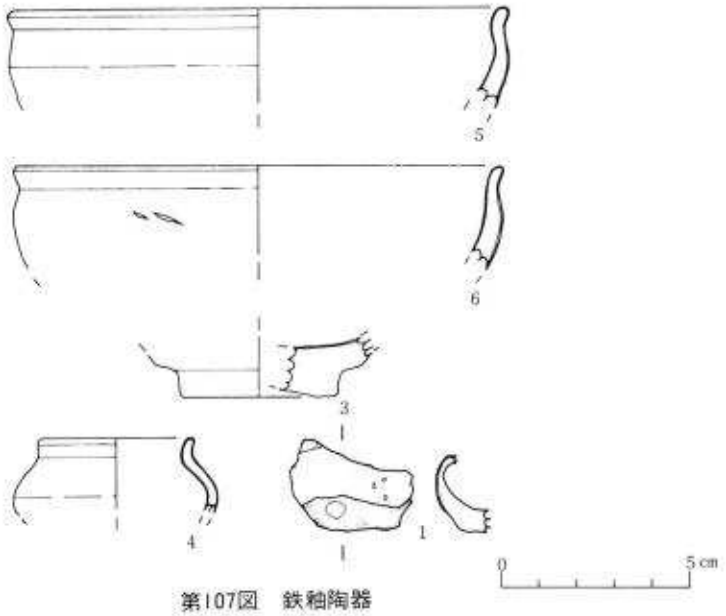
(6) **鉄釉陶器**（第105、107図　第19、27表　図版41）

茶碗５点、茶入れ１点、水滴２点である。一の郭 Bj24 井戸覆土下位層とこれに近接して出土する同一個体とみられる水滴２点のほかは共に４、５号堀覆土上層に出土するものである。

茶碗はいずれも小破片で口縁部２点、体部２点、底部１点である。口縁部は体部より弱いくびれを有して薄く引きだされ、(5)はやゝ肥厚する。口径は13.0cm前後と推計される。施釉は口縁部に褐色となり、口縁部直下より見込みにかけて光沢の弱い黒褐色を呈する。外面は体部下半より露胎をなす。高台は粗雑に削り出され、高台は浅く内ぞりされる。推定高台径は4.0cm、(3)の高台高は0.7cmである。

茶入れ(4)は口縁部小片で推定口径は4.5cmである。弱いくびれを有して立ちあがり、肥厚して丸味をもつ。胴部の張る浅い大海茶入れとみられる。口縁端部が褐色を呈し、口縁部直下ではやゝ青味がかった黒褐色をなす。胎土は茶碗と同様に柔らかい淡褐色を呈し均質である。

水鳥形の水滴(1)、(2)は羽根と体部より底部にかけての小片である。羽根は隆線状をなし、体部より重合して上部を被い、一端には水穴が認められる。体部は次第に肥厚して湾曲し、下方の露胎を経て底部に続く。水穴は底部より2.4cm上方に位置している。体部上方は光沢の弱い黒褐色釉で被われる。底部は糸切痕を残し、やゝ不整である。内面は滑らかで釉薬が斑点状に底部に広がるほか、胎土と同様の灰褐色を呈する。



第107図　鉄釉陶器

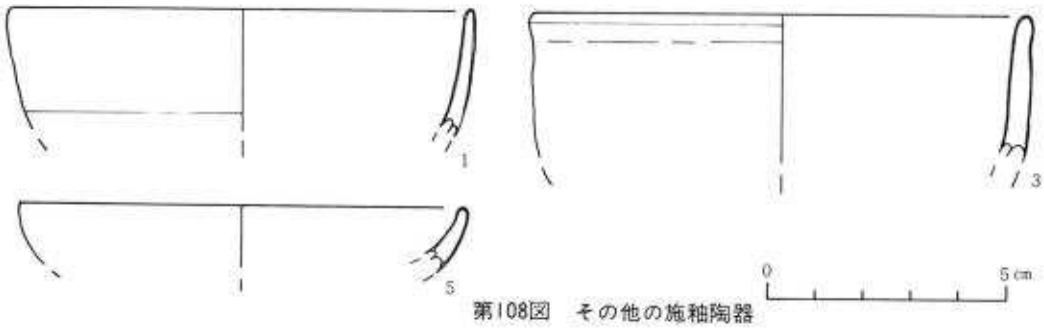
第27表　鉄　釉　陶　器　一　覧　表

No.	出土地点	遺　構	層　位	器　種	部　位	口　径 (cm)	高台径 (cm)	器　厚 (cm)	釉　調	その他の特徴	実測図	写真
1	Bj24	井　戸	下　層	水　滴	体底			0.25 0.60	黒褐色	水穴部分より体部下半に施釉され、以下は露胎となり　黒色をなす。底部にロクロ痕を残す。	○	○
2	〃	一の郭	Ⅱ	〃	体			0.40	〃	体部に羽根部分が重合する細片で水穴部分が認められる。		
3	Cb15	〃	〃	碗	高　台		(4.0)	1.20	内面底部黒褐色	外面はロクロ成形痕を有する。露胎は褐色をなし、内ぞりされる高台、胎土は淡褐色。	○	○
4	Da18	3号堀	Ⅰ	茶　入	口縁 体	(4.5)		0.30 0.20	口縁褐色 他は黒褐色	口縁部は弱いくびれを有して外反する。胎土は淡褐色をなす。	○	○
5	Db18	〃	〃	碗	〃	(13.3)		0.25 0.50	口縁褐色 他は黒褐色	弱いくびれを有してうすく引きだされる。胎土は灰白色	○	○
6	Db130	4号堀	Ⅱ	〃	〃	(13.0)		0.30 0.55	〃	小さいくびれを有する口縁で他はNo.4に類似する。	○	○
7	Dc130	〃	〃	〃	体			0.30	黒褐色	No.4に類似する小片。胎土分析。		
8	Dg3	〃	Ⅰ	〃	〃			0.60	〃	露胎を僅かに残す。胎土は淡褐色。		○

（　）は推定値を示す。

(7)　その他の陶磁器（第108～110図　第19、28、29表　図版34、42）

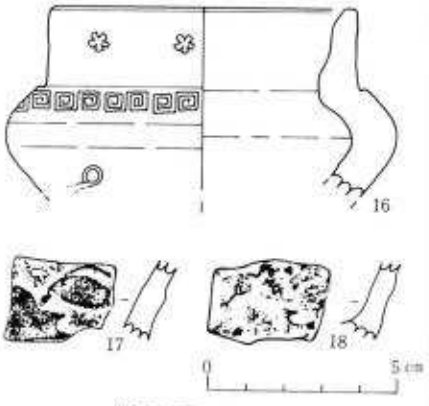
施釉陶器10点、素焼きの陶器４点がある。一～三の郭に散布する小破片で全体の器形が推定できるものはない。施釉陶器のうち染め分け碗を含む碗６点、皿１点、甕３点である。染め分け碗は口縁部が薄く挽きだされて直線状に立ちあがり、褐色または灰色がかった色調を呈し、微細な貫入が著しい。体部は下半より褐色釉となり、ロクロ成形痕を残す。口径は10.0cm前後と推計される。皿は器高の低い小皿とみられるものである。甕は３点のうち、口径30.0cm前後の口縁部片が含まれ、玉縁状をなして肥厚にするが、二次加熱をうけて明瞭でない。



第108図　その他の施釉陶器

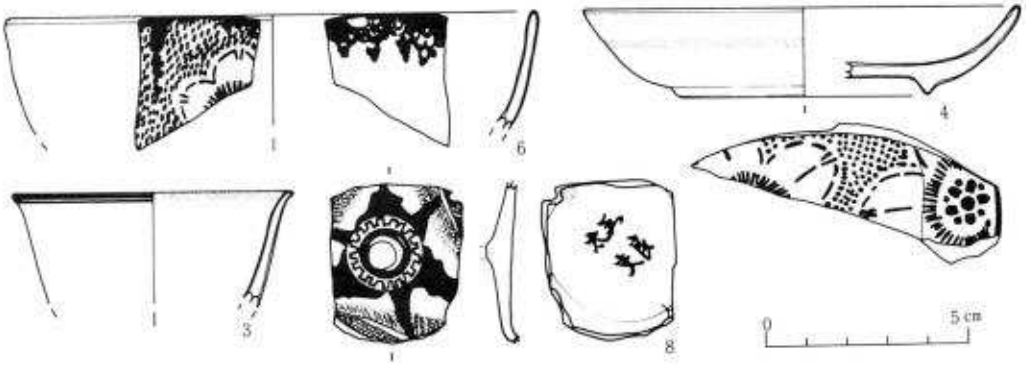
素焼きの陶器は共に香炉片とみられ、３点は同一個体片である。１点（16、土師質）は体部に最大径となり、肩部より口縁部にかけて直行して上ちあがる。口縁部直下に印花を有し、肩部に雷文が巡る。胎土は細砂粒が目立ち、褐色を呈する。口径8.0cmと推計される。他の３点は前者に比して硬質の小片で、外面に唐草とみられる浮彫りが刻される。共に一の郭及び５号堀出土である。

磁器は８点で碗、皿、向付、猪口、徳利等の破片である。光沢が強く、向付を除いては鮮明な発色をなし、す



第109図　陶　器

り絵を有する碗、皿が含まれる。裏面に五良太夫の銘を有する蓋は断面の一辺を二次的に摺り落として滑らかにするものである。



第110図　その他の磁器　第28表　その他の陶磁器一覧表

(1)　施釉陶器

No	出土地点	遺構	層位	器種	部位	口径 cm	器厚 cm	外色	外面釉調	内色	内面釉調	胎土色調	その他の特徴	実測図	写真
1	C	一の郭	I	染め分け碗	口縁	(9.8)	0.35	灰白		灰白		灰白	口縁がややうすくなって立ちあがる。細貫入が著しい。	○	○
2	〃	〃	〃	〃	〃		〃	青灰		青灰		〃	No 1に比して立ちあがりがやや強く、貫入が少ない。		
3	Df115	〃	〃	〃	〃	(10.4)	0.50	明褐		明褐		淡褐	口縁がややうすくなって立ちあがる。細貫入が多い。	○	○
4	Dd 9	3号堀	〃	碗	〃	(30.0)	0.65	口縁端部のみ青白。他は黒				灰白	口縁端部が厚く釉薬は遊離している。二次加熱によって滑らかさを失い光沢がない。		○
5	Ee45	〃	〃	皿	〃	(9.4)	0.45	灰白		灰白		〃	浅い小皿とみられる細片で施釉はNo 1に類似する。	○	○
6	Ef100	二の郭	〃	碗	体		0.95	赤褐		暗褐		灰	外面の光沢が強く、全体に粗雑である。		○
7	F	〃	II	染め分け碗	〃		0.40	黄褐		黄褐		淡褐	貫入の多い小片		
8	Fc60	輪部	I	〃	体 高台		0.30 0.55	褐		淡白		白	全体に施釉され、外面に成形痕を残す。		○
9	He118	3号堀	〃	〃	体		0.40	灰白		灰白		灰白	No 2に類似する小片である。		○
10	Hj115	三の郭	〃	碗	〃		0.85	黒褐		黒褐		灰	外面の光沢が強く、内面は梅点状を呈する。胎土は均質で硬い。		○

(2)　磁器

No	出土地点	遺構	層位	器種	部位	口径 cm	高台径 cm	器高 cm	厚 cm	紋様	その他の特徴	実測図	写真
1	C	一の郭	II	碗	口縁	(13.5)			0.20	内面に摺り絵	口縁に若干肥厚する細片。		
2	Da 6	〃	I	向付	体部				0.40	内面に花文	型押を有する白磁		
3	Dd	〃	〃	椀 口	口縁 体	(6.9)			0.35	外面に染線	口縁端ほど薄くなって端反りする。	○	○
4	D	〃	〃	皿	〃	(10.6)	(6.2)	1.9	〃	内面に摺り絵	外面は染線状に走る。	○	○
5	Dh127	5号堀	〃	碗	体				0.25	内面に染線	光沢が強く、色調によっては伊万里系とみられる。		
6	F	二の郭	〃	〃	口縁	(13.0)			0.30	摺り絵	口縁にやや不整である。外面に鮮明な発色をなす。	○	○
7	〃	〃	II	唐利	体				0.25	外面染線状	発色のよい染付細片		
8	Ga130	〃	〃	蓋					0.30	染付・五良太夫	断面に二次的に摺り出す部分がある。	○	○

(　)は推定値を示す。

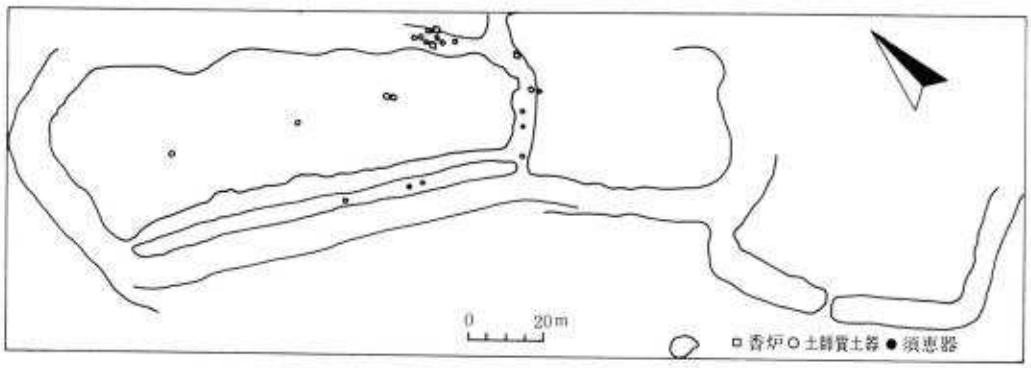
(8)　土師質土器、須恵器と土師器（第111、112図　第19、29表　図版32、34、42）

土師質土器は前述の香炉片を除いては19点である。その分布はこの一の郭及び3～5号堀に限られ、4・5号堀覆土に若干多い。いずれも坏の破片とみられ、器形の推定できるものは2点であり、他は口縁部11点、体部1点、底部5点である。

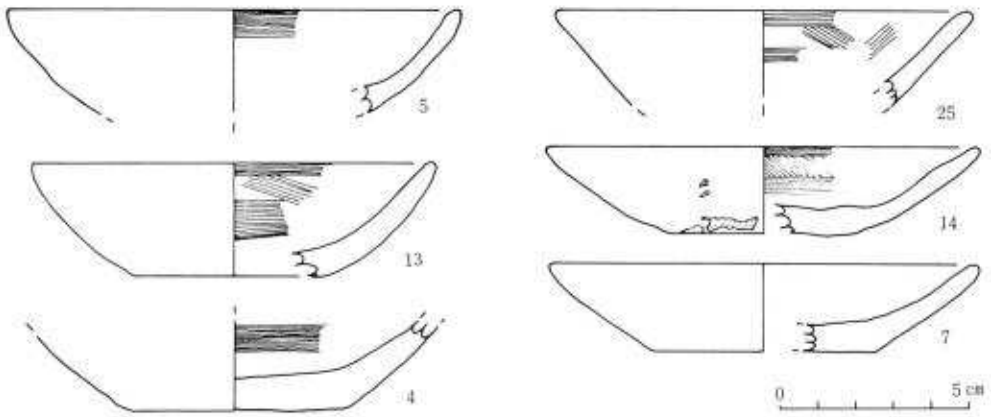
口縁部は体部より薄手となって直行、または内彎気味に立ちあがる。口縁部内面にはハケ目様の痕跡を残すものが含まれる。体部より底部にかけて次第に肥厚し、内面は滑らかに下降する。底部は平底をなし、もっとも厚手となる。推定口径は10.8～12.6cm、13点の平均値は11.3

cmである。底径は(22)が6.8cm、他は5.0～6.0cmと推定される。器高は2.3～2.4cm、器厚は底部で0.6～1.0cmを計る。

胎土は橙色をなすものが多く、灰・黒褐色を呈するものが3点である。(15)を除いて共に細粒で感触が柔らかい。外面に煤とみられる黒色の付着物を有する4点が含まれるが、油痕等の確認されるものはない。



第111図　土師質土器、須恵器出土分布図



第112図　土師質土器

須恵器2点は甕の小片とみられ、(8)には内面の青海波文が認められる。また、土師器は既述のId106 竪穴遺構に出土する5点のほか、近接する8号堀出土の細片である。

第29表　土師質土器・須恵器・土師器一覧表

(1)　土師質土器・須恵器

No	出土地点	遺構	層位	器種	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	器厚 cm	色調	備考	実測図	写真
1	B	一の郭	I	坏(皿)	口縁	(11.0)			0.4	にぶい橙			○
2	C	〃	II	〃	底		(5.0)		1.0	黒褐			
3	Da18	3号堀	〃	〃	口～体縁	(11.0)			0.4～0.5	にぶい橙	口縁部外面が黒色化する		○
4	Da112	一の郭	〃	〃	体底		(5.5)		0.4～0.8	〃		○	○
5	〃	〃	〃	〃	口～体縁	(12.0)			0.4～0.7	淡橙		○	○
6	De3	〃	〃	〃	〃	(11.5			0.4～0.5	〃	No 5に同一個体？		
7	D	3号堀	〃	〃	口～底縁	(10.8)	(6.0)	2.3	0.4～0.8	にぶい橙	外面に斑点状に黒色の付着がある。	○	○

8	D	3 号 堆	II	甕	体				1.2	灰	内面に青海波文を有する小片。		○
9	〃	4 号 堆	I	坏(皿)	体底		(5.0)		0.6 1.0	淡 橙			○
10	〃	〃	〃	〃	口 縁	(10.2)			0.4	淡 赤 橙			
11	〃	〃	〃	〃	口縁 体	(12.6)			0.3 0.4	浅 黄 橙			
12	〃	〃	〃	甕	肩				0.7	灰	肩部にやや歪みがある。		
13	〃	〃	II	坏(皿)	口縁 体	(10.5)			0.4 0.7	にぶい橙	口縁部外面に黒色の付着物がある。	○	○
14	〃	〃	〃	〃	口縁 底	(11.2)	(5.0)	2.4	0.4 0.8	〃	外面に黒色の付着物を有する。	○	○
15	〃	〃	〃	〃	体				0.4	黒 褐	砂質の粘土で滑らかさがない。		
16	De130	〃	〃	香 炉	口縁 体	(8.0)			0.5 1.0	淡 赤 橙	口縁部直下、体部に印花、刻文等を有する。	(○)	○
17	〃	〃	〃	〃	体				0.5	灰	外面に唐草文を浮彫りする。	(○)	○
18	〃	〃	〃	〃	〃				〃	〃	No.17と同一個体。	(○)	○
19	Ea133	5 号 堆	〃	〃	〃				0.6	〃	No.17と同一個体？細片		
20	Ed109	〃	I	坏(皿)	口縁 体	(11.0)			0.5 0.8	浅 黄 橙			○
21	Ed127	〃	II	〃	底		(6.0)		0.6	〃			
22	〃	〃	V	〃	〃		6.8		0.8	灰	糸切り痕が僅かに残る。		○
23	E	〃	II	〃	口 縁	(12.0)			0.4	灰 褐	口縁部がやや外反する。		○
24	〃	〃	〃	〃	〃	(12.0)			0.4	褐	細片		
25	Fb130	二 の 郭	I	〃	口縁 体	(10.8)			0.3 0.5	淡 赤 橙		○	

(2) 土師器

(No.8、12は須恵器、他は土師質土器)

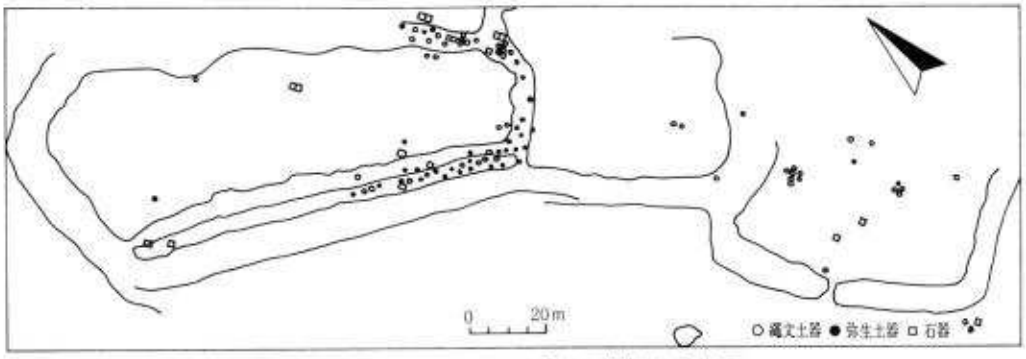
1	Hd103	8 号 堆	I	坏	口 縁	(8.0)			0.35	浅 黄 橙	内面黒色処理の細片		
2	Id106	竪穴遺構	〃	〃	体				0.45	〃	〃		
3	〃	〃	覆	〃	口 縁				0.25	〃			○
4	〃	〃	〃	〃	口縁 体			3.0~	0.30 0.55	〃	内面に黒色化する部分を有する。	○	○
5	〃	〃	〃	甕	〃	(26.0)		15.0~	0.30 0.80	〃	外面にヘラケズリ痕を有する。他に磨耗の同一個体細片がある。	○	○

( ) は推定値を示す。

(9) その他の土器（第113、114図　第19表　図版47）

縄文土器は磨耗の著しい小破片が大部分であり、合せて55点である。ほゞ全域に渡って分布し、空堀を除いては低位の三の郭に若干多い。遺構では空堀覆土のほか、Gh127 竪穴遺構に 7 点、Id106 竪穴遺構に 1 点が覆土に混入する。

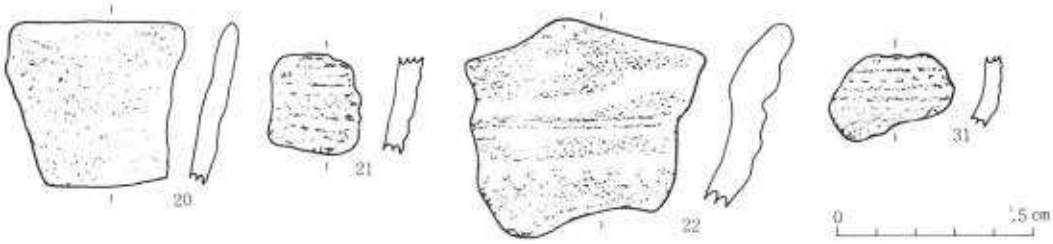
口縁部 4 点、底部 1 点のほかはすべて体部片である。口縁部片には波状の口縁部(31)があり、竹管による刺突文や沈線を有する。胎土は粗粒が目立ち、褐色を呈する。(22)は口唇部に刻みを有し、胎土、焼成共に良好である。(31)は三の郭、(22)は一の郭南東II層出土である。



第113図　土器と石器出土分布図

底部片は底径5.5cm前後と推計される摩耗の著しい破片であり、3号堀覆土下位層に出土する。そのほか体部片に繊維の認められる3点の小片が含まれる。

弥生時代に属するとみられる土器は35点があり、口縁部2点のほかはすべて体部小片である。一、三の郭及び空堀に分布し、3号堀覆土に若干多い。口縁部は平縁とみられ、共に斜位の撚糸文が施文される。そのほかは地文に沈線の横走するもの(20)、無文帯を有するもの等が含まれる。胎土は石英、粗砂を含み、赤褐色を呈するものが多い。(21)は3号堀、(20)は4号堀出土である。

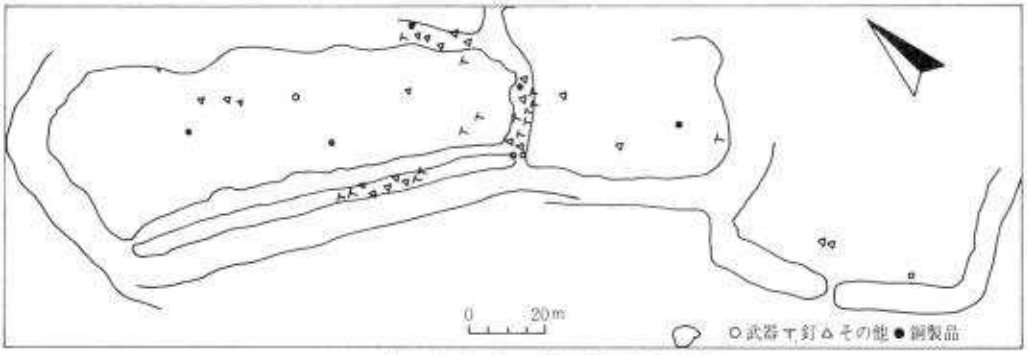


第114図　縄文・弥生土器拓影

2．金属製品

(1) 鉄製品（第115～117図　第19、30表　図版34、43）

一の郭より三の郭に及ぶ全域に出土し、特に一の郭とこれを画する3～4号堀に集中し、二、三の郭では数点にすぎない。42点のうち用途の判明するものは小刀、小柄各1点、鉄鏃2点の合せて武器4点、木工具など建築用金具では斧1点、楔状製品3点、鉄釘16点がある。その他火打鉄1点、毛抜3点、締金具1点、鍋2点等であり、特に用途による分布の特徴はみいだしえない。



第115図　鉄・銅製品出土分布図

小刀(24)は、刃部が欠損し、全体に湾曲する。刀身部は現存長10.7cm、中央部の最大身幅2.7cmを計り、切先の反りを有しない。茎は断面長方形をなし、柄頭に細く、丸味をなす。小柄(25)

は両端を破損し、銹溜が著しい。刀身部は9.7cm以上、身幅1.2cmを計り、茎はこれより幅広となり、最大1.7cmとなる。鉄鏃2点のうち(4)は刃部の長さ6.8cmの平根状をなし、身幅は最大1.9cmを計る。茎は5.3cmで先端を僅かに欠損する。断面は0.5×0.3cmの長方形をなす。(40)はこれより身、茎共に短い同形の平根とみられる。

斧(27)は2.4cmの狭刃でやや上方に反りを有する。刃側両面には下辺に平行して対称的に3条の磨除けが刻される。柄穴はやや不整ながら、刃側にのみ角をなし、幅1.5cmを計る。

(7)、(8)は頭部をつくり出す扁平な楔状をなす。先端がやや狭まり、(7)は反りがみられる。長さ6.1cm、厚さ0.8cmで断面は長方形をなす。(26)はこれより若干長く、同様の用途を有するものとみられる。(23)は頭部が斜方向に切られて明らかでない。

釘とみられる16点のうち、短形の釘7点が含まれ、頭部の形状によって皆折形の釘5点、切釘1点が判明する。前者は頭部が扁平となり、L字状に折り曲げられ、長さは(33)の3.0cm(0.99寸)、(9)の5.0cm (1.65寸) を計り、大小が混在する。また、銹溜で頭部の形状が不明ながら(29)では長さ5.7cm(1.88寸)、最大頭部幅では(15)によって径1.2cmの方形をなす。先尖部にかけては共に断面が方形をなすとみられる。切釘(32)は頭部がやゝ薄くなって鋭角に切断され、断面は長方形をなす。現存長3.6cmである。犬釘(1)は長さ8.9cm(2.94寸)を計り、鉄釘中最大である。頭部は扁平をなし、径0.9cmの方形をなす。先尖部にかけては次第に細くなり、先端が叉状をなして分岐する。そのほか、(14)がこれに類似している。

(18)、(37)は一端を僅かに欠いているが、現存長はそれぞれ10.4、11.5cmで類似し、中央部より対称的に先尖する断面方形の両釘様をなす。中央部の径0.9～1.1cmを計る。(37)が一端でやや先細りとなる点では装着する可能性も考えられる。

火打鉄(17)はやや小形の板状をなす。把手は細く引き延ばして山形をなし、一端に接合している。

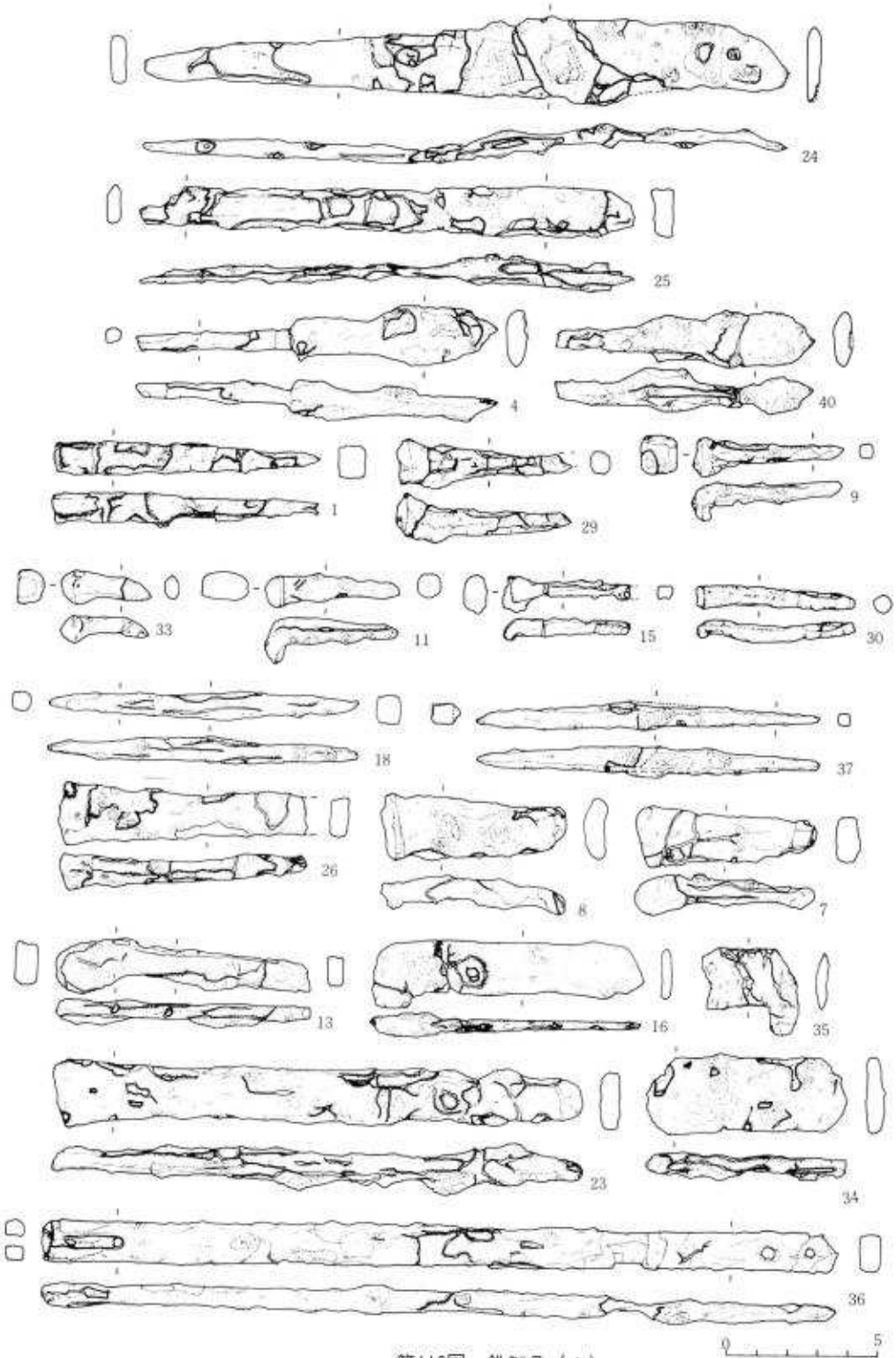
毛抜3点は共に折損する断片である。抓部の幅は1.2～1.4cmを計る。断面は薄板の長方形をなす。(2)、(3)は銹化によって厚手となる。

締金具(10)は鉄板を折り曲げて両端を重合させ、不整な環状をなす。内径は2.2×1.8cmで楕円状を呈する。

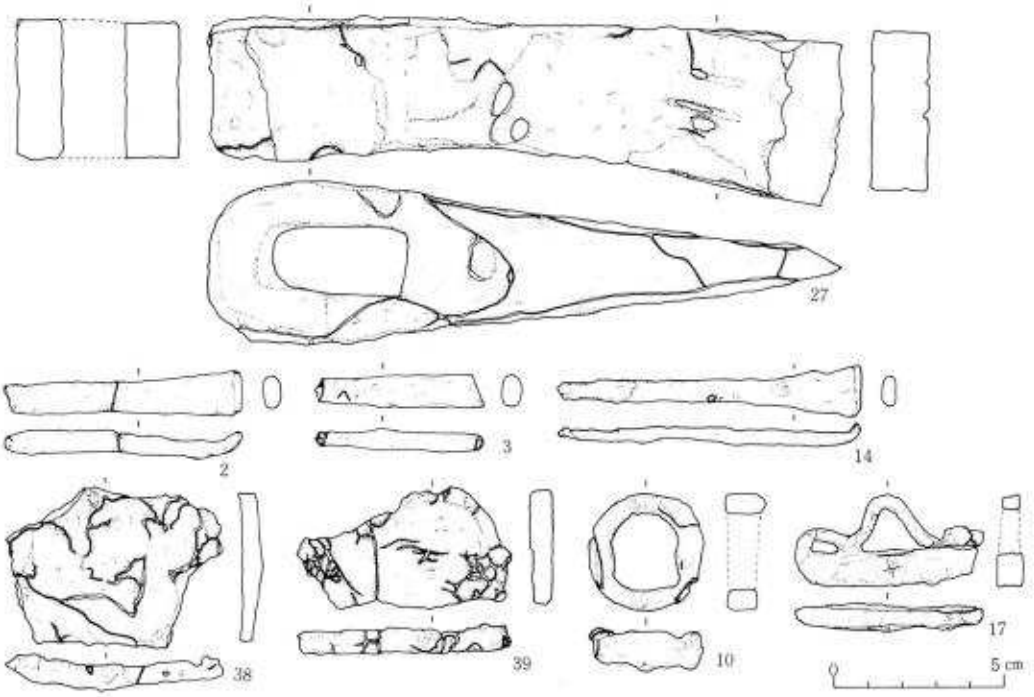
鍋、釜の断片とみられる(38)、(39)は共に不規則な亀裂を有する。0.7cmの厚板をなす鋳造鉄である。板状の(12)もこれに類するものと推定される。

その他用途不明の鉄製品には両端に対をなす紐通し穴を有する(36)、火箸状の(6)、(28)、薄板の(16)、(35)等が含まれる。

鉄滓とみられる鉱滓はやゝ褐色がかった海綿状を呈し、径2.0cm以下の破片5点である。共に10g以下の小滓であり、一の郭及び三の郭南東のII層に出土する。



第116図　鉄製品（1）



第117図　鉄製品(2)　第30表　鉄製品一覧表

No.	出土地点	遺構	層位	名称	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考	実測図	写真
1	Bg6	一の郭	P946	釘	8.9	1.1	0.9	25.4	先尖部がやや反って叉状をなす完形。	○	○
2	Bj3	〃	II	毛抜	7.0	1.3	0.6	8.7	基部幅1.2cmを計り、上方を欠く。	○	○
3	〃	〃	〃	〃	5.0	1.0	0.6	5.2	両端を欠損する。No.1と同一個体？	○	○
4	C	〃	〃	鏃	12.1	2.0	0.7	28.7	茎の先端を欠く平根。	○	○
5	Da18	3号竪	〃	釘？	6.8	0.9	0.8	8.3	両端を欠き亀裂が入る。断面は円形をなす。		
6	〃	〃	〃	火箸？	1.3	0.7	0.7	3.8	一端を欠き、先尖部が湾曲する。		
7	Dbc18～15	〃	〃	楔？	6.1	2.0	0.8	16.7	扁平な頭部をなし、先端に収まる。	○	○
8	〃	〃	〃	〃	〃	2.3	〃	17.8	No.7に類似し、先尖状となる。	○	○
9	〃	〃	〃	釘	5.0	1.3	0.6	5.6	笹折形の完形。	○	○
10	〃	〃	〃	鍛金具	3.4	3.4	1.1	16.4	内径2.2×1.8cmでやや不整をなす。	○	○
11	D	〃	〃	釘	4.5	1.9	0.8	5.3	笹折形をなし、先尖部を欠く。	○	○
12	〃	〃	〃	鍬？	7.6	3.8	1.0	47.0	錆膨の強い板状の断片。		
13	〃	〃	〃	不明	8.6	2.0	0.7	15.8	一端が丸味を有する板状の断片。	○	
14	〃	一の郭	〃	毛抜	9.0	1.5	0.4	6.0	基部幅1.4cm。	○	○
15	Dad127～130	4号竪	〃	釘	4.4	0.6	1.2	4.0	笹折形で先尖部を欠く。	○	○
16	〃	〃	I	不明	9.1	2.3	0.4	16.2	把手状の薄板で屈曲部で両端を欠く。	○	○
17	〃	〃	II	火打鉄	5.6	2.7	0.8	16.0	完形。山形の把手をなし、一端に接合する。	○	○
18	〃	〃	〃	両釘	10.4	0.9	0.8	14.6	両尖をなし、一端を僅かに折損する。	○	○
19	Dg127	一の郭	〃	釘	3.5	0.7	0.7	3.5	頭部と先端を欠く。		
20	Dh109	〃	〃	〃	2.8	1.0	〃	2.4	中央部で折損し、先尖部が湾曲している。		
21	Dj115	〃	〃	〃	3.5	2.6	0.5	1.3	中央部より折損、先端部にかけて湾曲する。		
22	D	4号竪	I	不明	4.6	3.8	1.1	29.8	板状をなす断片で錆化が著しい。		
23	Eb127	5号竪	II	〃	17.6	2.3	0.7	85.0	板状をなし、一端はやや狭まって匙状をなす。	○	○
24	Ed109	〃	〃	小刀	21.5	2.9	0.5	58.9	棟を欠損し、刃部の歪みが大きい。	○	○

25	Ed109	5号竪	II	小 柄	16.6	1.7	0.7	35.3	両端を欠き、銹蝕が著しい	○	○
26	〃	〃	〃	不 明	8.3	2.2	〃	45.2	板状をなし、先端を欠く。No23に類似する	○	○
27	Ed112	竪 穴	〃	斧	18.7	4.8	4.8	107.0	2.4cmの鉄刃、3条の鍔隙を有する完形。	○	○
28	〃	5号竪	〃	火箸？	9.1	0.4	0.3	7.6	先尖部が扁平となり、他は断面長方形、折損。		
29	〃	〃	〃	釘	5.7	1.5	1.4	11.7	皆折形で先端部を欠き、銹蝕が強い。	○	○
30	〃	〃	〃	〃	5.2	0.7	0.6	5.2	皆折形で先端部を欠く。	○	
31	〃	〃	〃	〃	3.6	0.8	0.6	2.5	銹化が進行して頭部不明、先端部をかく。		
32	E	〃	〃	〃	3.6	0.9	0.8	4.3	断面は長方形とみられる。		
33	〃	〃	〃	〃	3.0	0.9	0.5	3.0	やや湾曲する完形。銹蝕が大きい。	○	○
34	〃	〃	〃	不 明	6.7	2.8	0.6	22.7	板状をなす。外縁の一部を欠く。	○	○
35	Ff127	二の郭	P258	〃	3.0	1.8	0.2	5.0	薄板の断片で一方は鉤形をなして狭まる。	○	○
36	Fc121	竪 穴	II	〃	26.8	1.5	0.8	99.2	板状をなし、両端に貫穴を有する。完形？	○	○
37	Fj133	二の郭	〃	釘？	11.5	1.1	0.9	17.0	両尖となるが一方が細く、先端を欠く。	○	○
38	Hb118	三の郭	1	鏃	6.4	4.8	0.7	38.8	厚板状をなす。銹化が進んで崩壊する。	○	
39	Hc118	〃	〃	鏃？	6.3	3.6	0.7	34.2	厚板の断片。	○	
40	Hj118	〃	〃	鏃	8.7	1.9	0.7	25.0	茎の一部を欠く。銹蝕が著しい。	○	○
41	Za	不 明		釘？	5.5	0.5	0.5	8.6	両端を欠き、断面方形をなす。		
42	〃	〃		〃	5.8	2.1	1.9	48.2	頭部が円形をなし、や・細くなって折損する。		

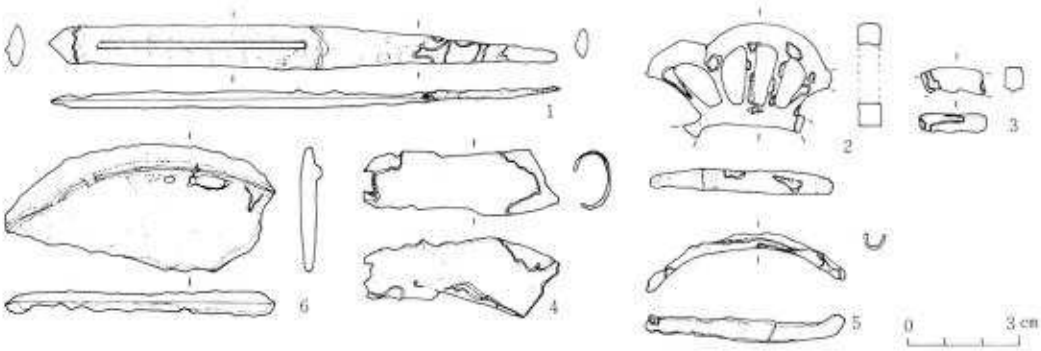
(2) **銅製品**（第115、118図　第19、31表　図版43）

一、二の郭に出土する6点である。2点は柱穴中に出土するが、共に埋土に含まれるものである。用途の推定されるものは笄1点、鐔2点、蓋1点である。

笄(1)は耳掻部分が不明であるが、胴が長く7.6cmを計り、竿が短い。胴には眉形及び木瓜形の切り込みがあり、紋は中央部5.5cmに渡る。断面は二等辺三角形を呈する。竿は6.0cmで穂先にかけて薄板状となる。地板より穂先にかけて緑青が付着するほか、黒色を呈する。

(2)、(3)は透し鐔の破片で同一個体片とみられる。紋様透しで丸味をなし、茎孔は2.6cmまで計測される。

蓋(6)は小断片であるが、径10.0cm以上の円形とみられ、外縁より0.7cm前後に高さ0.4cmの身受が付される。平蓋とみられる表面は滑らかで文字様の鋳出を有する。



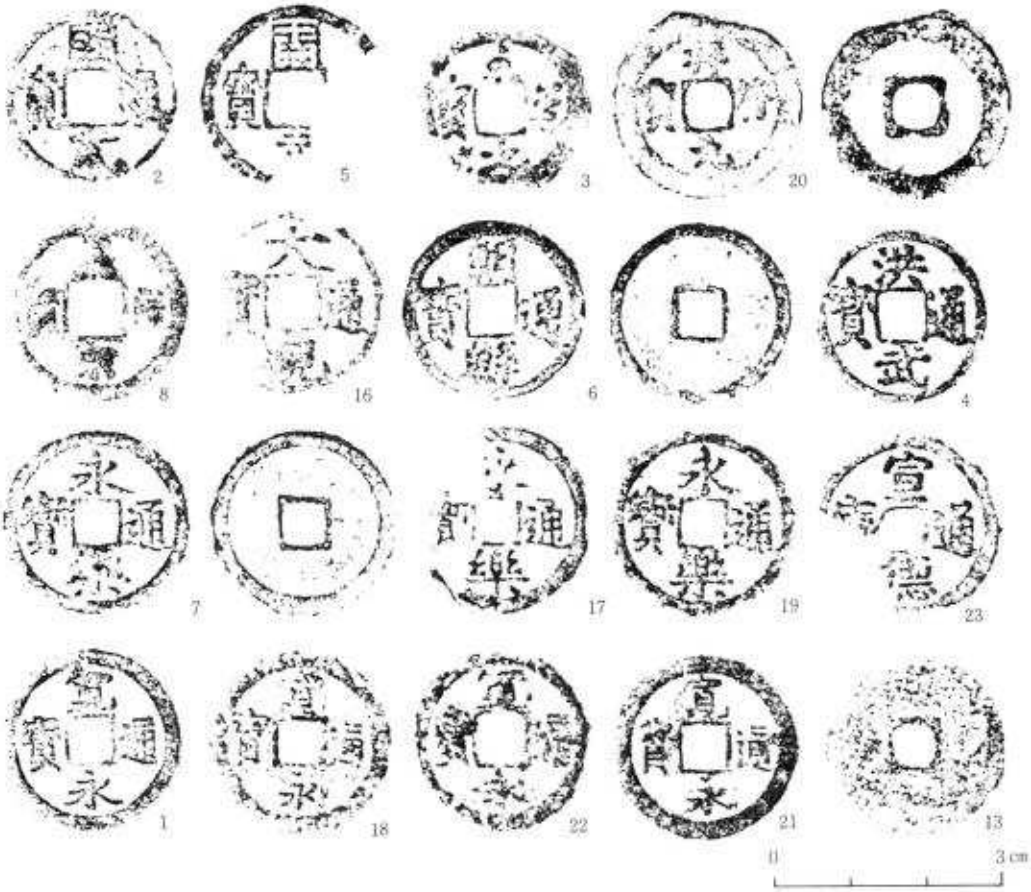
第118図　銅　製　品

第31表　銅　製　品　一　覧　表

No.	出土地点	遺　構	層　位	名　称	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備　考	実測 図	写真
1	Bf15	一の郭	P710	笄	13.8	1.2	0.5	19.4	胴が長く、竿が短い。	○	○
2	Ch6	〃	II	簪	5.0	3.1	0.6	20.4	透かし彫りの破片。	○	○
3	Da18	3号堀	〃	〃	1.8	0.8	0.4	2.8	No.2と同一個体の細片。	○	○
4	Db130	4号堀	〃	不　明	5.3	1.8	0.05	8.2	湾曲する薄板の断片	○	○
5	Eb127	5号堀	〃	〃	5.4	1.6	〃	2.3	両端を欠く、湾曲する薄板。	○	○
6	Ff130	二の郭	P152	鏡	7.3	3.4	0.6	22.3	表面に紋様を有し、二次加熱をうける断片。	○	○

(3)　古銭（第119図　第19、32表　図版34、44）

渡来銭9種13点、寛永通寶4点、不明銭6点の合せて23点である。一の郭より三の郭にかけてはそれぞれ5、4、3点が出土し、4・5号堀覆土中にはそれぞれ7、4点が含まれる。郭出土の古銭は表採を含むI、II層中に広範囲に分布する。郭内の遺構では二の郭中央部の柱穴埋土上層に寛永通寶1点が出土するのみである。また、空堀出土の古銭は陶磁器やその他の遺物出土層に共通し、4号堀II層では渡来銭に限られている。共に二次加熱によって融着し、または歪んで腐蝕するものや欠損するものがあり、比較的渡来銭に多い。



第119図　古銭拓影

渡来銭13点は初銭年によって唐銭の開元通寶2点、北宋銭には至道元寶、祥符元寶、皇宋通寶、大観通寶の4種各1点、明銭は洪武通寶、永楽通寶、宣徳通寶の3種6点で永楽銭4点が含まれる。そのほか朝鮮通寶1点がある。

寛永通寶は所謂古寛永4点、新寛永1点である。不明銭6点には鉄銭2点が含まれ、他の4点は渡来銭と推定されるものである。

第32表　古　銭　一　覧　表

No.	出土地点	遺　構	層　位	銭　名	初銭年	外径 mm	外内 縁径 mm	内外 郭径 mm	内内 郭径 mm	外厚 縁さ mm	重さ g	備　考	拓影	写真
1	Be6	一の郭	II	寛永通寶	江戸 1636	24.15	6.55	19.65	5.65	1.05	2,680		○	○
2	Bg46	〃	I	開元通寶	唐 621	23.05	7.85	21.10	7.15	0.83	1,950		○	○
3	Ch6	〃	II	至道元寶	北宋 995	24.20	7.55	17.20	6.25	1.03	1,420	外縁欠損。	○	○
4	〃	〃	〃	洪武通寶	明 1368	23.10	7.15	20.20	6.15	1.25	2,980		○	○
5	C	〃	I	開元通寶	唐 621		7.70		6.70	1.15	1,150	二次加熱、半欠。	○	○
6	Da130	4号堀	II	朝鮮通寶	李朝 1423	24.00	6.85	20.08	5.88	1.35	2,400		○	○
7	〃	〃	〃	永楽通寶	明 1403	24.88	6.53	20.28	5.48	1.43	3,100		○	○
8	Db130	〃	〃	皇宋通寶	北宋 1039	24.70	8.55	20.30	7.25	1.15	3,200		○	○
9–17	De133	〃	〃	永楽通寶ほか3	明 1403						5,690	癒着し歪み腐蝕する。		○
13	Dj133	5号堀	〃	不　明		24.15	7.15	20.30	5.35	1.10	2,550	歪みがある鉄銭。	○	○
14	Eb133	〃	〃	〃		21.75			7.90	0.90	1,230	鉄銭。		○
15	〃	〃	〃	〃						1.20	420	細片。		○
16	Ec124	〃	I	大観通寶	北宋 1107	24.20	7.35	22.10	6.25	1.23	1,680	外縁欠損。	○	○
17	Ef112	二の郭	II	永楽通寶	明 1403	24.60	6.30	20.40	5.35	1.26	1,380	腐蝕し、半欠。	○	○
18	Ej136	〃	P179	寛永通寶	江戸 1636	24.65	7.75	20.00	5.75	1.23	2,260		○	○
19	Fg130	〃	I	永楽通寶	明 1403	24.60	6.65	21.20	5.70	1.10	3,080		○	○
20	Fj130	〃	〃	祥符元寶	北宋 1008	25.20	6.98	18.30	5.98	1.00	1,950		○	○
21	He118	三の郭	〃	寛永通寶	江戸 1636	24.55	6.55	19.75	6.15	1.08	3,100		○	○
22	Hf115	〃	〃	〃	〃	24.20	7.70	〃	6.40	1.18	2,550	外縁欠損。	○	○
23	Jb124	〃	〃	宣徳通寶	明 1426	24.10	5.70	20.40	5.10	0.97	2,020	二次加熱で歪み、欠損する。	○	○

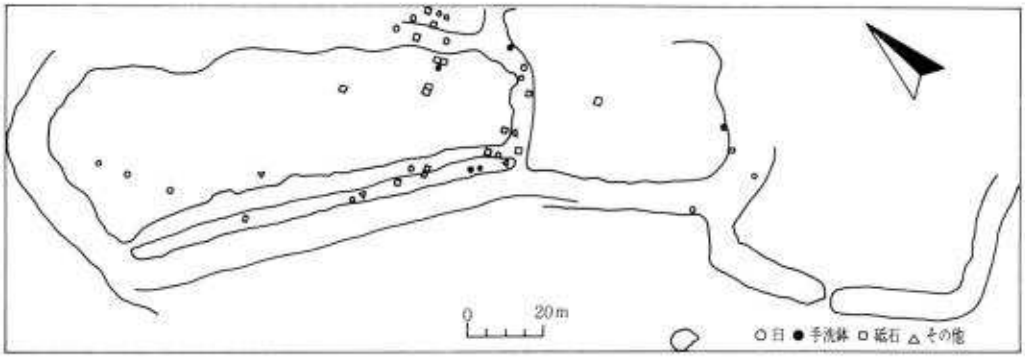
（計測点は「日本古代の銭貨」奈文研1977による）

3．石製品と石器

(1) 石製品（第120～123図　第19、33表　図版35、44、45）

砥石17点、石臼16点、手洗鉢3点、その他7点の合せて43点である。共に一の郭より二の郭にかけて分布し、特に一の郭を画する3～5号堀に密である。二の郭では中央部に砥石1点のほか、南東辺の2号堀に混入する。遺構出土の石製品は柱穴やDe124焼土遺構出土の砥石を含めて覆土中に出土するものであり、空堀ではすべて覆土上層に含まれる。

砥石は板状の(7)、扁平な自然石とみられる(8)を除いてすべて断片である。長辺18.3cmを最大にやゝ大き目の砥石は11点である。6使用面を最多として不整なものが多く、全体を推定できるものは(13)1点である。使用面は滑らかで(4)、(5)、(14)～(16)の5点には細線状の砥痕を有する。石材は安山岩、石質凝灰岩各1点であり、他の9点は斜長石流紋岩である。灰白色、または淡褐色をなし、7点は黒色化して二次火熱をうけているとみられる。(4)では加



第120図　石製品出土分布図

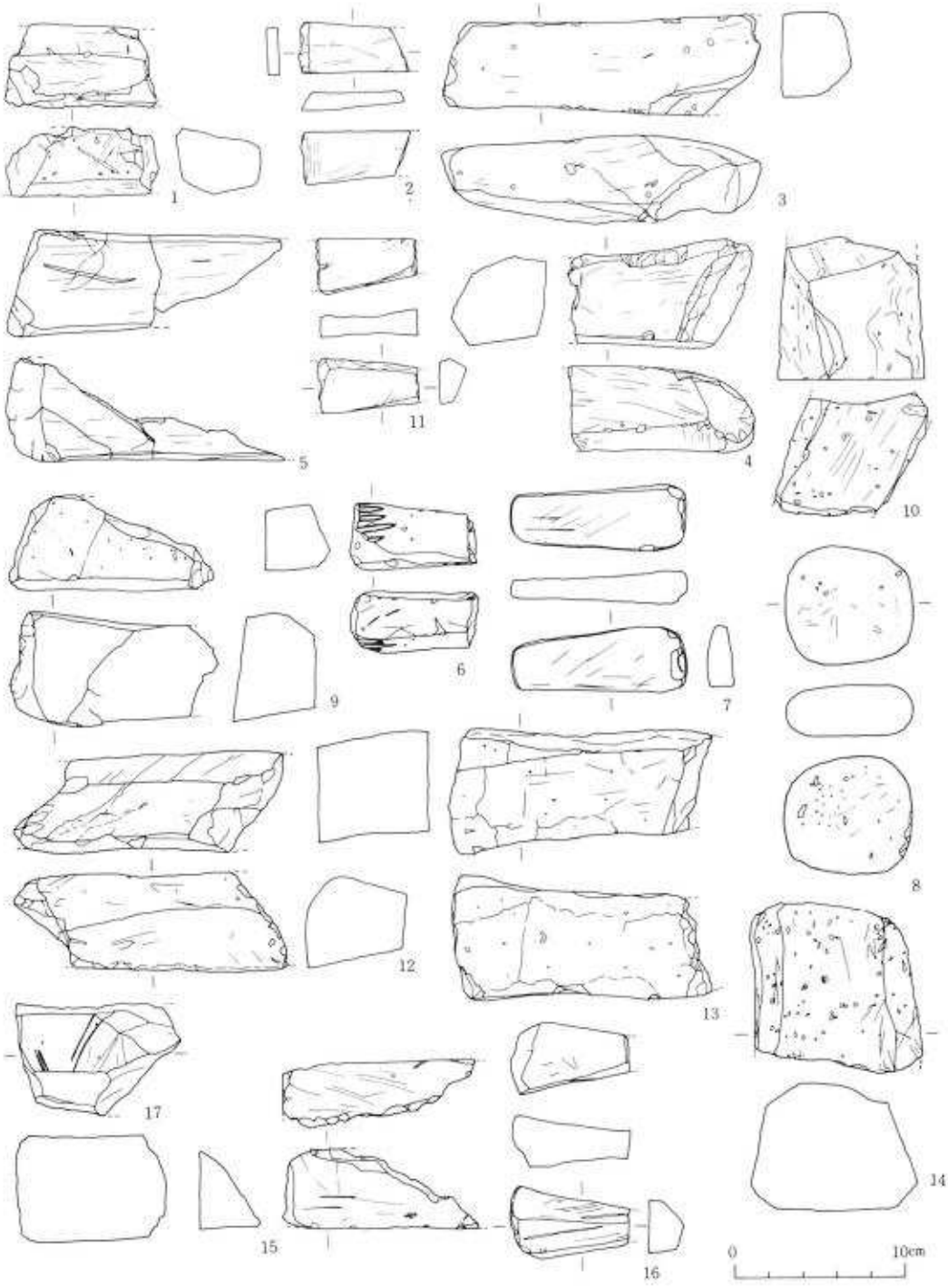
熱以後に使用される痕跡が認められる。

小形の砥石は6点であり、うち5点は(7)が長方形をなして若干大きく、(2)、(7)が板状をなす。完形の(7)は両端が丸味を有して整形され、使用面には長辺に平行、または斜方向の細線状の砥痕が一面に広がる。他の1点は扁平な磨石状をなし、同様の使用痕が不規則方向に走る。石材は石質凝灰岩3点、斜長石流紋岩3点である。流紋岩の(5)、(6)は黒色に変じて二次火熱をうけていると類推される。特に形状による石材の相違は認められない。

石臼16点は小片が多く、全体を推定できるものは溝の不明瞭な下臼1点のみである。副溝の配置によっては茶臼5点と穀磨臼3点に分けられ、他は断片で不明である。茶上臼はすべて輝石安岩製で不揃いながら丸溝が7条まで認められる。供給口、物配り、芯受、挽手孔は共に不整に穿孔される。下臼は受け皿部分を欠くが、摺込面における径は26～27cmと推計され、高さは8.1～12.6cmを計る。

穀磨臼は条溝幅、副溝間隔が共に広く、更に不整な配置を有する。上臼は(8)によって径31.0cm、高さ6.0cm以上を計る。下臼は(15)によって摺込面で径20.2cm、受け皿外縁では径40.7cmと推計される。高さ9.8～10.2cmである。石材は安山岩質角礫岩が2点含まれ、外面は著しく磨耗している。その他断片では高さ15.8cmの石英安山岩があり、加工の痕跡を有する1点が含まれる。

手洗鉢には器形の推定される2点が含まれる。(1)は扁平な底部を有し、口縁部にかけて直線状に立ちあがる。全体に厚手で不整をなす。底部外面に十字状の削痕や条線が認められ、体部には黒色の煤とみられる付着が一面に広がる。口径30.7cm、底径18.2cmと推定され、高さ12.8cm、深さ7.8cmである。(10)は底部より口縁部にかけてやゝ膨らみを有し、底部の器厚が著しく薄くなる。(1)に比して器高が若干低く、底部が不整な円形を呈するほか殆ど同様の計測値が得られる。他の1点は底径がやゝ小さく、内面が滑らかである。(1)と同様に黒色の付着物がみられ、二次火熱をうけるものと推測される。



第121図　石製品（1）砥石

第33表　石　製　品　一　覧　表

(1) 砥　石

No	出土地点	遺構	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	使用面	石材	備考	実測図	写真
1	Bg30	一の郭	II	6.0	4.1	4.9	230.5	1	斜長石流紋岩	二次加熱をうけて黒色化する断片。	○	○
2	Cb	3号堀	〃	6.4	3.1	1.0	22.5	4	石質凝灰岩	板状となる断片。	○	○
3	Cg106	一の郭	〃	18.3	5.0	4.2	690.0	5	斜長石流紋岩	一端を欠く	○	○
4	Db130	4号堀	〃	10.6	6.1	5.1	440.0	3	〃	二次加熱以後の使用痕を有する折損。	○	○
5	Db136 Ed127	4・5号溝	III	14.6	5.8	6.4	410.0	3	〃	黒色化し、折損する	○	○
6	De9	3号堀	〃	7.4	4.0	3.8	144.5	4	〃	1面に鋭利な砥痕を有する。	○	○
7	De118	〃	〃	10.4	3.8	1.9	84.8	1	石質凝灰岩	板状の小形完形品。	○	○
8	〃	〃	〃	7.5	6.9	3.0	190.5	2	〃	扁平な自然石で線状の砥痕を有する。	○	○
9	De124	焼土遺構	I	12.0	6.5	5.0	420.0	4	〃	二次加熱をうけて黒色化する。両端折損。	○	○
10	〃	一の郭	II	6.9	7.2	8.7	560.0	2	〃	二次加熱をうけて変色する断片。	○	○
11	Dh109	竪穴	床	5.9	3.3	1.6	38.6	5	〃	両端を欠損し、線状の砥痕を有する。	○	○
12	D	3号堀	II	14.5	5.9	5.8	680.0	2	〃	二次加熱をうけて黒色化する。両端折損。	○	○
13	〃	〃	〃	14.7	6.9	7.2	1,365.0	1	安山岩	二次加熱をうけて折損。黒色化する。	○	○
14	Eb112	一の郭	〃	9.4	9.7	7.4	900.0	6	斜長石流紋岩	両端を折損する。	○	○
15	Eb106	3号堀	〃	9.6	6.5	6.1	500.0	2	〃	両端を折損する断片。	○	○
16	Ed109	5号堀	〃	11.6	4.6	3.6	151.0	2	〃	使用面に細線状の砥痕を有する断片。	○	○
17	Eh130	2号堀	〃	7.0	4.0	2.8	81.5	5	〃	2面に条線の砥痕を有する。折損。	○	○

(2) 石　臼

No	出土地点	遺構	層位	種別	部位	内径/外径 cm	高さ cm	条溝単位	石材	備考	実測図	写真
1	Ai33	一の郭	P108	茶	上	21.0～	6.2～	7～	輝石安山岩	不整な条溝をなす。	○	○
2	Bc33	〃	P240	〃	下	(15.0)	9.5～	4～	〃	受け皿部分を欠く。	○	○
3	C	〃	II	〃	〃	(26.0) 38.0～	8.9	6～	〃	受け皿部分を欠き、底部に不整な凹みを有する。	○	○
4	Cj130	4号堀	I	茶?	上	(27.0)	12.6		〃	供給口及び物配りを残す。	○	○
5	Da133	〃	〃	穀	下		9.8	2～	〃	幅0.7㎝前後の条溝が部分的に残存する断片。		○
6	Db18	3号堀	II		〃	(18.0) 38.0～	9.3		〃	条溝不明。	○	○
7	Dd136	4号堀	I						〃	断片で不詳。		
8	〃	4号堀東	〃	穀	上	31.0	6.0	4～	安山岩質角礫岩	供給口、ものうけ、挽手孔を有する。風化して上面を欠く。	○	○
9	D	4号堀	〃		〃	(27.0)	5.7～		輝石安山岩	No.4に類似する外縁の断片		
10	Dg3	De6 竪穴	II			-			〃	細片で不詳。		
11	Eb130	5号堀	〃						石英安山岩	断片。		
12	Eb127	〃	〃		上	(25.0)	4.5～		輝石安山岩	上・下を欠く不整な断片。		○
13	Ec106	3号堀	〃				15.8～		石英安山岩	凹み部分を有する半製品?。		
14	Fj115	2号堀	〃	茶?	下	27.0～	8.1		輝石安山岩	受け皿を欠く断片。		
15	Ga130	二の郭	III	穀	〃	20.2 (40.7)	10.2	2～	安山岩質角礫岩	条溝は不整で明確でない。	○	○
16	Gd127	2号堀	II		〃	(20.0) 31.0～	11.6		輝石安山岩	芯棒孔を上下より穿つ。受け皿を欠く。	○	○

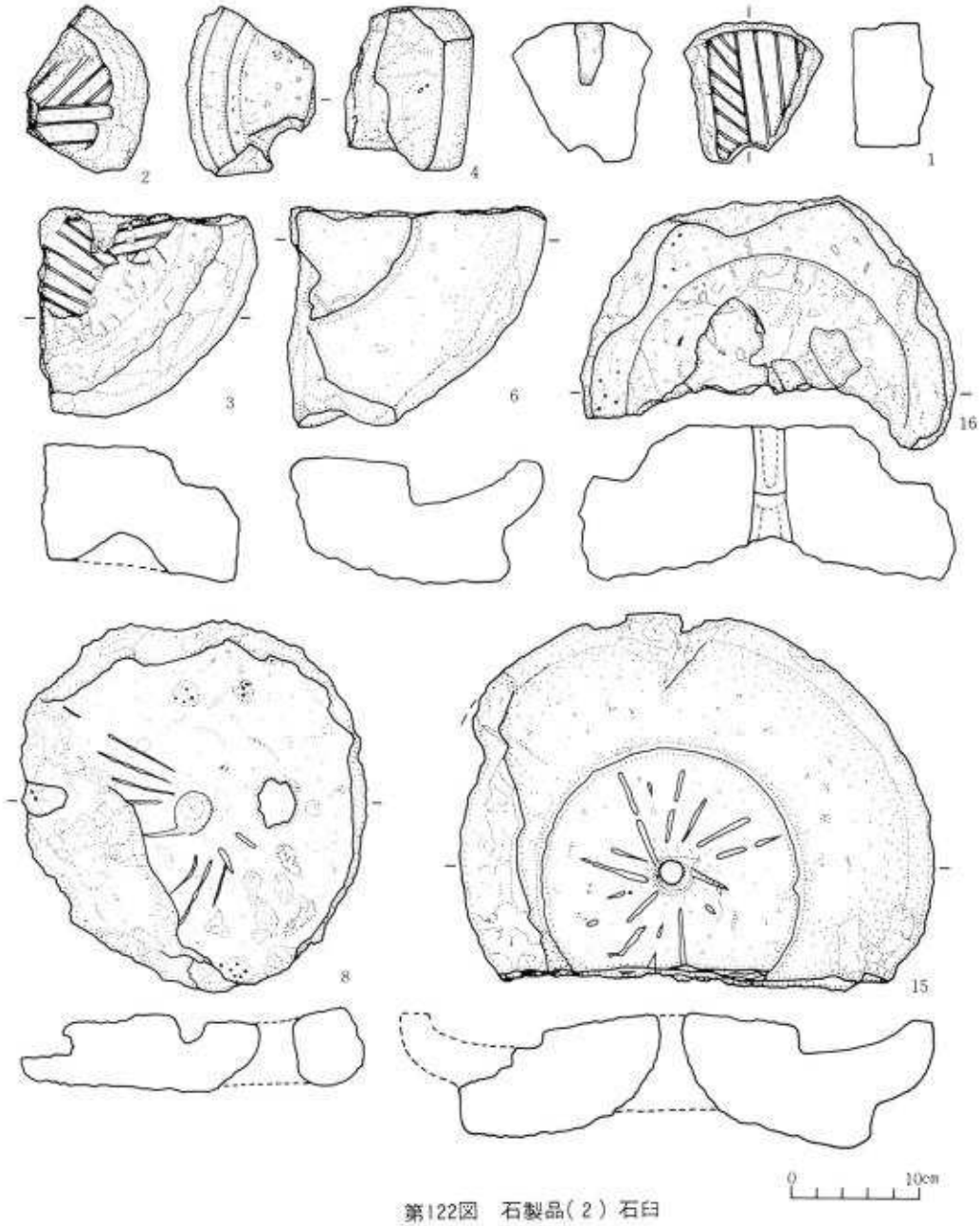
(　)は推定値を示す。

(3) 手洗鉢，その他

No	出土地点	遺構	層位	部位	内径/外径 cm	底径 cm	器高 cm	器厚 cm	石材	備考	実測図	写真
1	Cd18	一の郭	II	完形	12.0 18.9		7.3	5.5	輝石安山岩	浅い皿状をなす。	○	○
2	Cf109 De121	〃	〃	口縁 底	(28.0) (30.7)	(18.2)	12.8	2.0 5.0	〃	二次加熱をうけ、外面に黒色化する。	○	○
3	Dc15	3号堀	〃		17.2～		16.2～×15.2～		〃	[illegible]形をなし、外面は黒色化する。[illegible]		
4	Dg133	4号堀	〃	完形	6.7 9.0		3.2	2.1	凝灰質砂岩	浅い皿状をなす。	○	○
5	Eac100	3号堀	〃	体 底		(14.0)		6.6 4.8	石英安山岩	外面が黒色化する。		○
6	〃	〃	〃	口縁 底	16.7 30.0		13.6	7.2 7.0	〃	外縁は不整、底部を整形する。	○	○
7	Ea133	5号堀	〃	口縁 体	(33.0)			7.4	石英安山岩質凝灰岩	浅い皿状とみられ、No.4に類似する。		
8	Ec112	〃	〃		9.7 18.0		7.1	4.6	石英安山岩質角礫凝灰岩	浅い皿状をなし、1/2を欠損	○	○
9	Ed106	〃	III	完形	15.1× 9.8		3.6	3.4	石質凝灰岩	中央部に両面より不整に穿孔する。	○	○
10	Fj139	二の郭	II	口縁 底	(28.0) (30.8)	(18.2) (21.0)	10.8	2.4 2.7	安山岩角礫岩	やや不整で歪みがある。	○	○

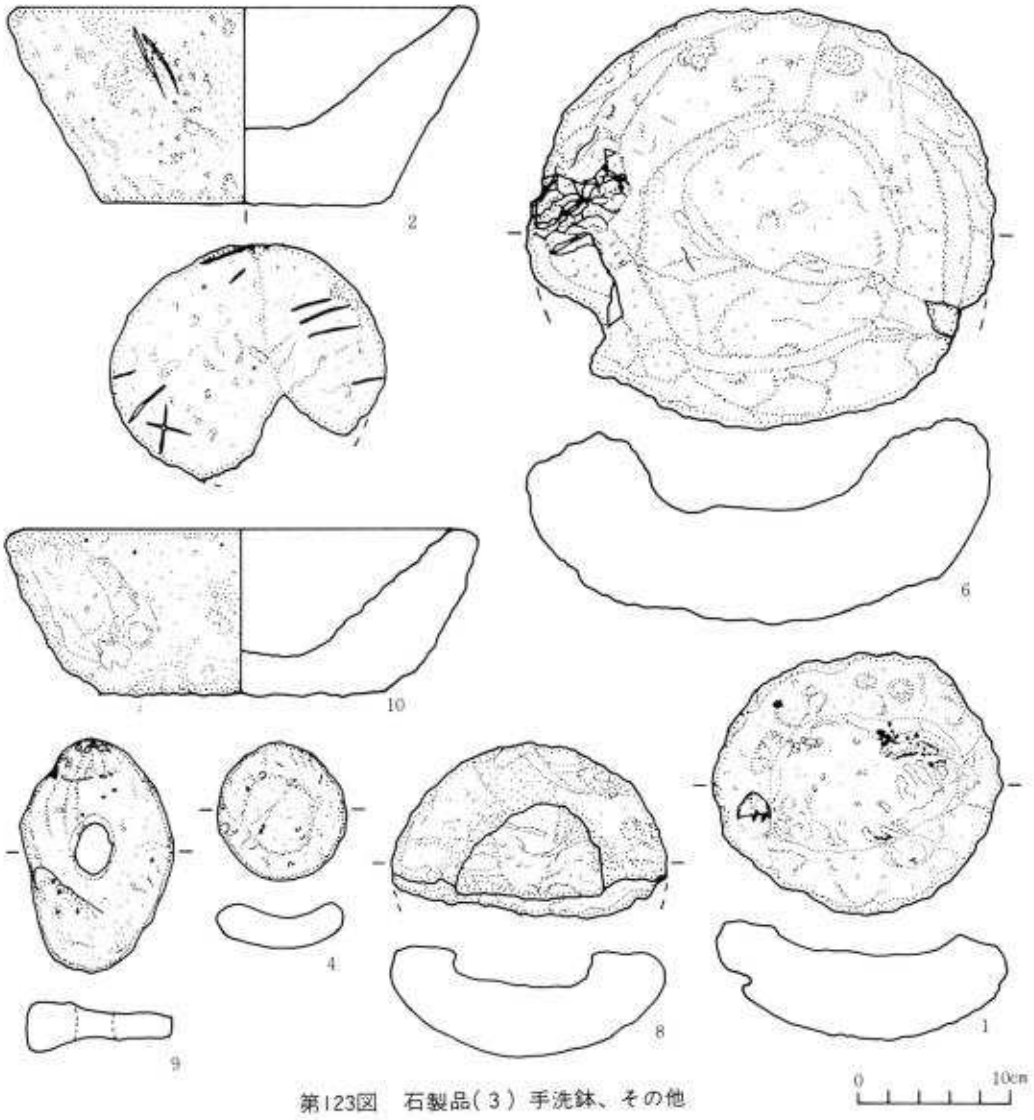
(2), (5), (6)は手洗鉢　(　)は推定値を示す。

その他の石製品には、皿状の(1)、(4)、(7)、(8)の4点、不整な楕円状の自然石に穿孔する(9)が含まれる。浅い皿状をなす4点はもっとも小さい自然石の(4)を除いて外面を丸底状に加工し、内面に不整な凹みを有する。内面底部は特に磨滅は認められず、手洗鉢に準じる



第122図　石製品(2) 石臼

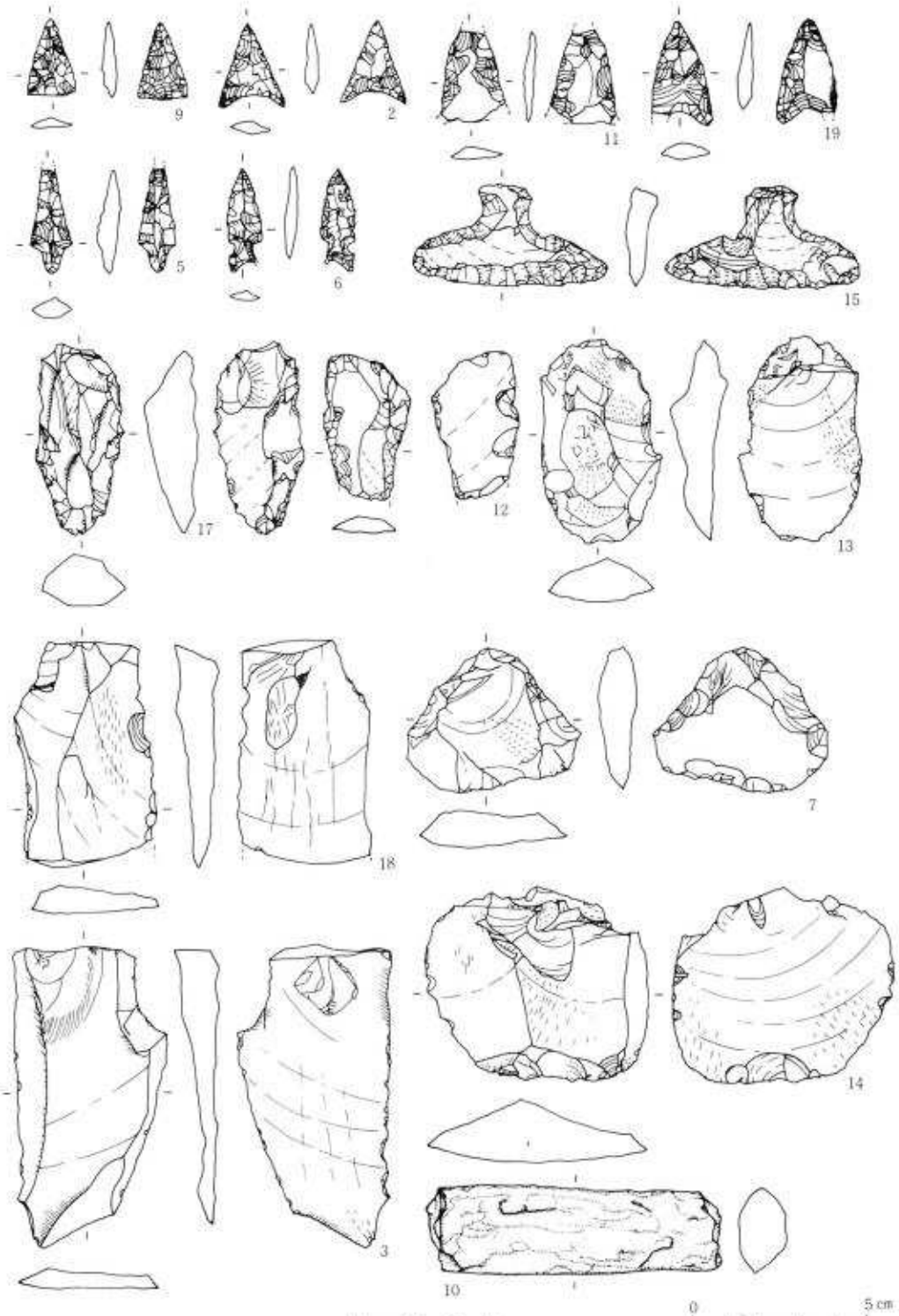
用途か明確でない。外縁径6.2～12.0cm、凹み部分では径9.0～18.9cmを計り、最大は径33.0cmの(7)で円形、または楕円形をなす。石材は安山岩、または安山岩質凝灰岩である。(9)の穿孔石は表裏2面より不整に穿孔するが、そのほかの加工の痕跡は認められない。球形の4半分を残す石製品(3)共用途は不明である。



第123図　石製品(3)手洗鉢、その他

(2) **石器**（第124図　第19、34表　図版47）

石核及び石核に調整剝離を加えた刃部を形成する石器は不定形なものを含めて17点と石剣状の断片1点である。剝片石器は石鏃6点、石匙1点、掻器、または削器7点、石篦状石器3点である。ほゞ全域に渡って分布し、4号堀にやゝ集中している。しかし、遺構出土の遺物はいずれも覆土中に混入して遺構に共伴するものは認められない。



第124図　石　器

石鏃6点は入念な調整剝離によって鋭い尖頭部を形成し、断面は二等辺三角形を呈する。基部の形態によっては平坦をなす(9)、(11)の2点、基部の中央が抉られて凹状を呈し、尖頭部側縁が若干張る(16)、側縁が平坦をなす(2)の2点、基部が凸状をなして縦長となる(5)1点、基部両側を抉り、更に基部中央部が凹状をなす(6)1点となる。石材はすべて硬質の頁岩である。

石匙は抓部とこれに直交する刃部が幅広となって横型をなし、両面より調整される。その他、周縁に調整剝離される石篦状石器3点、片面または両面に部分的に調整剝離される縦長、あるいは楕円状をなす7点があり、刃部の形成角度の小さい(3)、(18)の2点を含む掻器、または削器とするものである。また、石剣状の小片(10)は滑らかさを失って磨は明瞭でない。石材は硬質頁岩、泥質凝灰岩であり、形態による変化は認められない。

第34表　石　器　一　覧　表

No	出土地点	遺　構	層　位	種　別	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石　材	備　考	実測図	写真
1	Bg46	2号堀	II	掻　器	3.6	2.0	0.7	5.3	硬質頁岩	片面に二次加工を認める断片。		○
2	B	〃	〃	石　鏃	2.0	1.9	0.4	0.9	珪質頁岩	完形	○	
3	Cd109	土　壙	I	掻　器	8.1	4.1	0.4	26.5	泥質凝灰岩	使用痕を有する。	○	○
4	〃	〃	〃	〃	4.3	4.4	0.5	12.3	硬質頁岩	〃		○
5	Dd133	4号堀	II	石　鏃	3.0	1.2	0.7	1.7	〃	両端を欠く	○	○
6	〃	〃	〃	〃	2.7	1.0	0.4	0.9	〃	アメリカ式石鏃1端を欠く。	○	○
7	D	〃	I	掻　器	4.1	5.0	1.1	20.4	〃	両面加工。	○	○
8	〃	〃	II	〃	3.2	2.1	0.5	7.3	〃			
9	〃	3号堀	I	石　鏃	2.2	1.4	〃	0.9	粘板岩		○	○
10	〃	〃	II	石剣状	8.4	2.5	1.4	69.5	硬質頁岩	両端を欠く。	○	○
11	De3	一の郭	〃	石　鏃	2.6	1.8	0.4	1.9	流紋岩質凝灰岩	〃	○	○
12	Dh130	4号堀	I	石匙状	4.0	2.4	0.7	6.6	〃	片面加工。	○	○
13	Dh139	〃	〃	〃	5.8	3.5	1.2	25.2	泥質凝灰岩	〃	○	○
14	Di139	〃	〃	掻　器	5.4	6.3	1.8	50.4	硬質頁岩	両面加工。	○	○
15	Hb118	三の郭	II	石　匙	2.9	5.6	0.9	9.0	〃	横型石匙。	○	○
16	He124	〃	〃	石　鏃	2.5	1.7	0.5	1.8	〃	両端を欠く。	○	○
17	Id106	竪　穴	〃	石匙状	5.3	2.5	1.4	16.3	〃		○	○
18	Zz	不　明	〃	掻　器	6.4	3.7	1.2	23.9	〃	片面加工で先端を欠く。		○

（その他10点の剝片が出土する。）

4．動物遺体（第19表　図版34）

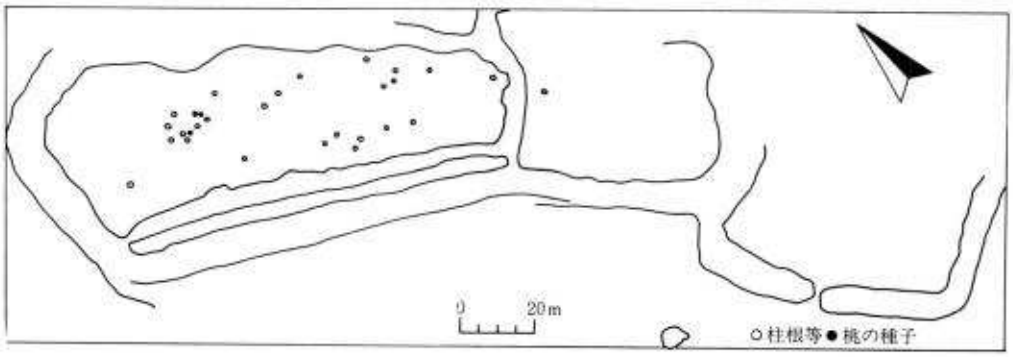
3号堀中央部の覆土II層に出土する馬歯骨等51点である。Da18にほゞ纏って分布するが、特に墓壙等は認められない。風化して細片となるものを除き、一括して鑑定を依頼しており、付章に後掲している。

5．植物遺体

(1)　木材等（第125図　第19、35表　図版24、34、35、46）

腐蝕する木片を含めて33点の木材、柱根である。炭化穀類を除く種子には桃2点がある。二の郭柱穴に小片1点が含まれるほかはすべて一の郭に分布し、Aj15溝以東に限られる。Cb18井戸に丸太状の1点があり、他は柱穴に確認されるものである。

形状の推定されるものは共に断面が円形をなし、円柱と認められる。もっとも遺存のよい最



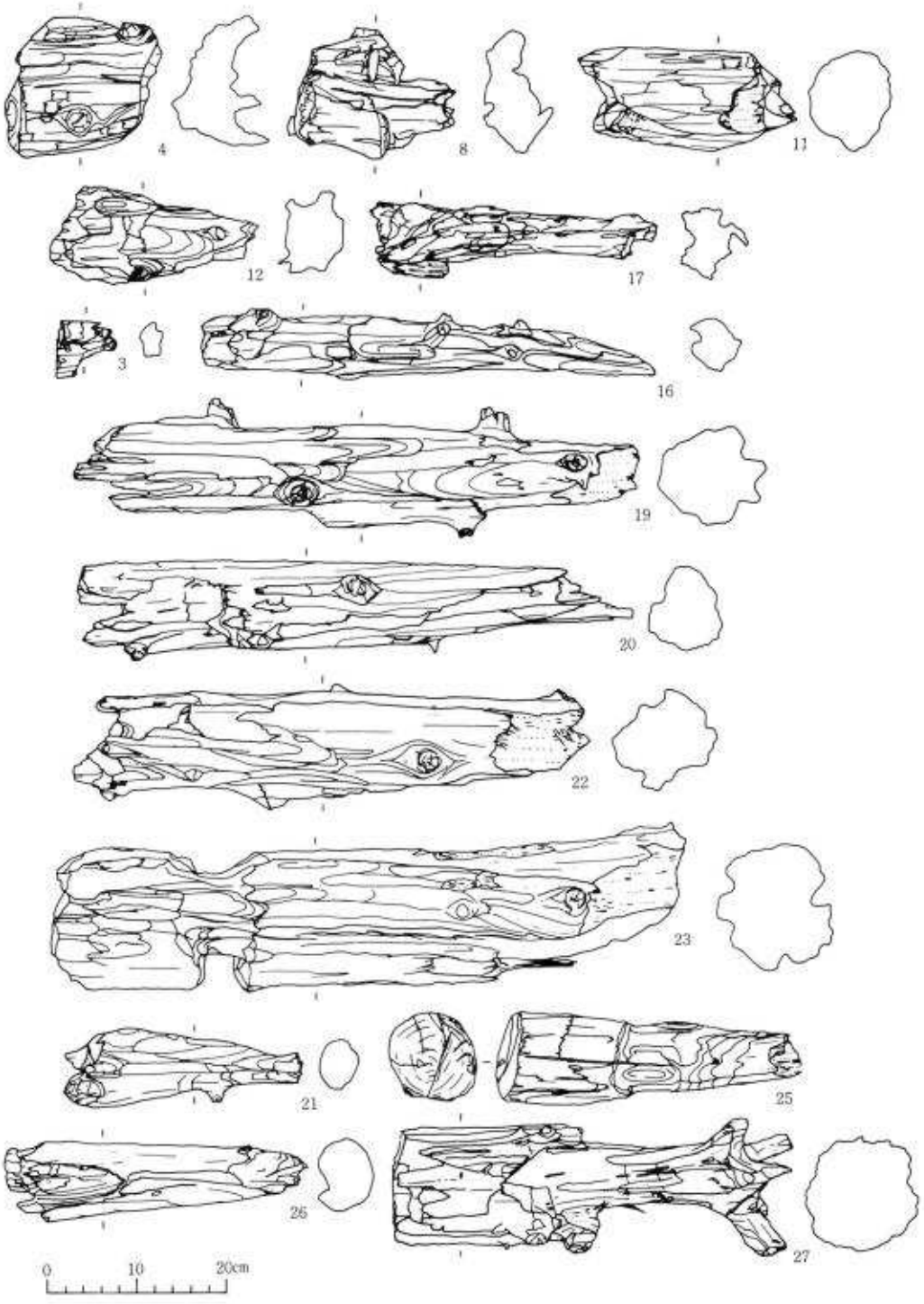
第125図　柱根・木材・種子等出土分布図　第35表　同一覧表

No.	出土地点	遺構	長さ cm	最大径 cm	樹種	備考	実測図	写真
1	Bc 36	一の郭 P175	5.7	2.5× 1.2	桧？	他小片8点。		
2	Be 18	〃 P175	8.2	5.1× 3.3	栗			
3	〃	〃 P763	6.7	6.4× 2.4	桧	木口を残す。	○	○
4	Be 15	〃 P781	15.5	14.9×10.0	栗	木口一部残存。	○	○
5	Bf 21	〃 P719	2.1	1.5× 0.4	桃	半欠の種子。		
6	〃	〃 P720	4.0	—	？	小片。		
7	〃	〃 P737	15.8	5.5× 2.6	桧	D．P．E保存処理済。		
8	Bf 18	〃 P712	18.7	14.4× 5.7	〃		○	○
9	Bf 15	〃 P790	11.7	6.4× 3.0	〃	木口一部残存。		
10	〃	〃 P791			桃	種子採集段階で紛失。		
11	Bg 15	〃 P796	19.8	11.2× 9.5	栗		○	○
12	Bg 9	〃 P1103	22.1	10.2× 6.4	桧		○	○
13	Cc 100	〃 P1326	4.3	1.4× 1.3	？			
14	Cb 18	Cb 18井戸3層	24.6	6.8× 5.3	栗	丸太状両端腐蝕。		○
15	Ca 3	一の郭 P1338	53.1	7.2× 7.0	桧			○
16	Cd 106	〃 P1490	51.2	6.4× 3.3	〃	木口を一部残す。	○	○
17	Ch 6	〃 P2386	31.1	(8.2)4.0×3.1	杉？		○	○
18	Ci 3	〃 P2366	14.9	2.3× 1.8	桧	一端に斜方向の切断面を有する。		
19	Ci 118	〃 P1606	63.3	11.9×11.4	〃	A．E法による保存処理済。	○	○
20	Da 6	〃 P2329	62.8	9.8× 8.3	〃	〃	○	○
21	Da 3	〃 P2271	26.3	8.8× 6.4	〃		○	○
22	Da 112	〃 P1718	58.8	11.9×10.3	〃		○	○
23	〃	〃 P1676	70.0	15.9×12.8	〃	木口の一部残存，A．E法による保存処理済。	○	○
24	Da 115	〃 P1719	34.1	6.3× 4.1	栗			
25	Dc 103	〃 P2186	34.4	10.3× 8.7	桧	木口に5方向の刃痕を有す。	○	○
26	De 106	〃 P2178	34.0	9.0× 7.2	〃		○	○
27	De 121	〃 P1903	44.8	13.2×12.8	〃	木口の一部残存。	○	○
28	Dj 124	Dj 121門 P11	(15.0)		？	調査中に紛失。		
29	Ed 127	二の郭 P27	6.4	2.3× 2.2	桧？			

その他一の郭P742，923，962，968，988，1365，1711に腐蝕小片が出土する。

大現存長は(23)によって70.0cm、木口径15.9×12.8cmを計る。木口の加工は7点に推定され、(25)では5方向からの刃痕が重複して中心部に達している。部材とみられる(18)は斜方向に切断される平滑な面を有する。また、(25)は木口上方11cmより7cm前後の幅を有して浅くはつられ、(23)では木口より8cm前後上方に3～5.0cm幅を有して1.5～2.0cm前後を削りとるものが含まれる。樹種は桧がもっとも多く、栗5点、杉とみられる1点がある。

そのほか、Gb 21井戸出土の木材があるが、諸事情によって採集されず詳細は明らかでない。



第126図　柱根等木材

(2) **炭化材**（第19表　図版23）

一の郭及び3号堀に出土する炭化材、De 6 竪穴遺構出土の板材、丸太材を合せて7点がある。一の郭では大規模な建物の北西に散乱する細片があり、樫、楢材が判明する。また、4号堀西端に近い覆土上層には長さ1.20m以上、径10cm前後の杉の丸太材が含まれる。

De 6 竪穴遺構においては楢の板材が並列するほか、細い小枝状の小片には樫の炭化材が含まれている。

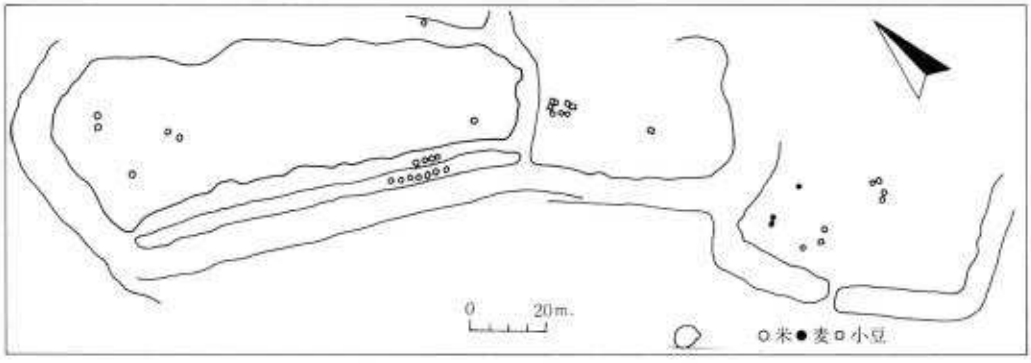
以上の炭化材のうち、3点についてはC14測定を依頼しており、その結果は付章に掲載する。

(3) **穀類**（第127図　第19、36表　図版34）

炭化する米、大麦、小麦、小豆、緑豆、稗、蕎麦の7種があり、炭化米が最も広範囲に散布している。一の郭では西方の柱穴掘り方中に含まれ、東方では De 6 及び Dh109竪穴遺構及び3・4号堀に検出される。特に De 6 竪穴遺構とこれに近接する3号堀覆土中に集中し、Dh109竪穴遺構と共に炭化物や草灰を伴い、塊状の焼米として採集される。二、三の郭では西方及び中央部の柱穴掘り方埋土上層中に含まれ、偏在する傾向が認められ、小麦は三の郭に限られる。

大麦は三の郭 Gg118 竪穴状遺構に多量の混入するほか、一の郭北西及び二の郭西方の柱穴群、三の郭西よりの柱穴覆土に少量含まれ、二、三の郭の小豆と同様に出土するものである。

以上の種子はすべて鑑定及び分析を依頼しており、付章として掲載している。



第127図　炭化穀類出土分布図　第36表　同一覧表

No.	出土地点	遺構	層位	種別	備考	No.	出土地点	遺構	層位	種別	備考
R-1	Ah27	一の郭	P59	米、大麦、蕎麦		R-15	Ef124	二の郭	P53	蕎麦	
2	Ah24	〃	P34	米	焼け脆れあり	16	〃	〃	P55	米	
3	Be36	〃	P175	〃		17	〃	〃	P58	緑豆？	
4	Be18	〃	P752	〃	焼け太りあり	18	Eg124	〃	P60	蕎麦？	
5	Bf18	〃	P745	〃	〃	19	〃	〃	P65	米、蕎麦、小豆	
6	Db130	4号堀	Ⅵ	〃	灰層に混在	20	Fd127	〃	P207	米、麦、小豆	
7	De-sl2-3	3号堀	〃	米、稗	焼け太りあり	21	Gg118	竪穴	溝	大麦	
8	De 6	竪穴	床	米、稗(？)	床、炭化物に混入	22	Gh127	三の郭	P32	〃	
9	Dh109	〃	〃	〃	灰に混入する	23	Gj115	〃	P80	米	
10	Ee124	二の郭	P47	米、緑豆？		24	Ha118	〃	P81	米、蕎麦	
11	Ef121	〃	P49	緑豆？		25	Hd136	〃	P143	米、小麦	
12	Ef124	〃	P48	米、緑豆？		26	He130	〃	P159	米	
13	〃	〃	P50	麦、小豆		27	He133	〃	P160	米、小麦	
14	〃	〃	P51	〃		28	He136	〃	P142	〃	

第8章　まとめ

1．塁壕と郭（第128図　第37表）

調査区域における空堀は1～8号堀の8条が確認され、完掘された空堀は3・4・6・7号堀の4条である。他の4条は西辺の1号堀が西方郭へ続き、2・5号堀は二の郭東辺へ、更に8号堀は東方郭へ延びていずれも未調査区域に達している。共に北辺の急崖を除いて東西に続く尾根状の高位地形を切って開削され、南北方向では彎曲して郭を画し、他の二辺ではほゞ直線状をなして接続、または近接して配される。

一の郭を限る1～5号堀は急斜面となる北辺と相俟って三方に開削される。西辺は1、2号堀が部分的に平行し、これより「西の坂の沢」に限られる。1号堀は西方の郭に比して極めて小規模であるが、土塁の揚土によって2号堀に併行する開削とみられ、西辺の防備を強化する配置とみることができる。また、2号堀に沿って構築される土塁によっては2号堀の改修が想定され、空堀の堆積層に特徴的な変化が認められない点で2号堀開削以前の旧堀の存在も考えられる。一の郭南・東二辺にあたる2号堀の東西及び3～5号堀のうち、現状で判明する2号堀を除く3条は中・上位層、または上位層が埋没途上で一挙に埋め戻されている点で共通する。覆土及び後述する遺物の出土状況によって郭内の切土に伴い、造成による埋没と解される。その間の経過については不明な点が多いが、流出口を有しない3号堀では西方に炭化材、東方では帯郭の穀物貯蔵用倉庫の焼失に伴う穀類、草木灰の流入があり、これより以前には築堤の補修も推測される。また、5号堀では焼失によるものとみられる炭化物や焼土の形成があり、特に上位層に密に混入する点で対応する埋没とみなされる。その開削は共に初期の郭形成段階に位置付けられる。

二の郭ではほゞ平行する2・6号堀の2条である。2号堀は一の郭の延長堀であるが、6号堀は埋没する空堀であり、5号堀南辺に留意するならばこれに対応する配置とみなされる。3～6号堀は一の郭及び二の郭を限る空堀であり、現状で確認される2号堀とこれに続く三の郭の7・8号堀に対比されるものである。

空堀の規模や形状は地形により若干の相違が認められるものの、全体に湾曲部分に大規模となる。例外的に1号堀が著しく小さいほかは郭面による堀幅は5.40～11.00m、深さ2.33～5.62mである。法面勾配は上方で緩やかとなるが、下方では3～6号堀の30.8～71.5°、2・7・8号堀では33.8～70.5°で山・谷側共に変化が大きく、特に新・旧堀の共通性はみいだし得ない。僅かに湾曲する南北方向に強い勾配を呈する傾向が認められる。底部はいずれも地形に沿って南北二方、または南東へ傾斜し、旧堀の3・6号堀の東西方向で底部幅が拡大して箱薬研状を呈するが、他は共にV字状をなす薬研堀である。

土塁は現状で認められる1・2・7・8号堀に認められるほか、3号堀では2号堀間の削り

出し築堤部分に残存する。いずれも空堀開削に伴う揚土によっており、特に搗き固めた形跡や他の防禦施設は認められない。2号堀西辺のみは暗褐色土の間層が挟在しており、改修によって更に盛土されている可能性があげられる。また、3号堀南東部ではもっとも低位であり、流出後の盛土修復も考えられる。そのほか、旧堀に伴う土塁は空堀に沿って高位地形が残存しており、同様に揚土による形成が推定される。

塁壕に付設される遺構には三の郭南東の溝2条があり、満水時の排水溝とみなされる。南東隅はもっとも低位にあり、土塁流出に伴って開削されていることが推定される。

第37表　空　堀　計　測　表

空　堀	長　さ	堀幅(郭面・土塁面)	底部幅	深さ(郭面・土塁面)	法面(山側・谷側)	遺　物	土塁
1号堀	(78.6)m	m ~1.20	0.40m	m ~0.70	49.0~50.0°		有
2号堀	(264.0)	m 5.60~11.00　3.40~5.20	0.25~0.45	m 3.92~5.62　1.06~4.73	35.5~71.0°　40.5~62.0°	石製品、石製品	有
3号堀	102.4	3.20~4.40	0.20~1.80	1.56~1.98	37.0~53.0　30.8~60.0	陶磁器、鉄類鉄・石製品	
4号堀	30.5	5.95~8.80　1.85~4.20	0.20~0.95	3.01~4.87　0.79~2.50	45.2~56.0　45.2~53.3	陶磁器、鉄類鉄・石製品	
5号堀	(42.3)	5.40~7.00　2.85~4.20	0.20~0.55	3.40~4.75　1.56~2.75	51.4~71.5　44.5~70.0	陶磁器、鉄類鉄・石製品	
6号堀	(79.0)	~3.80	~1.30	~1.50	36.8~50.2　45.0~59.2		
7号堀	40.9	5.90~9.50	0.45~0.60	2.33~3.45　2.24~3.08	40.5~43.7　51.3~62.0	磁　器	有
8号堀	(63.9)	6.50~7.25	0.25~0.48	3.14~3.70　2.08~1.31	42.5~63.4　33.8~70.5		有

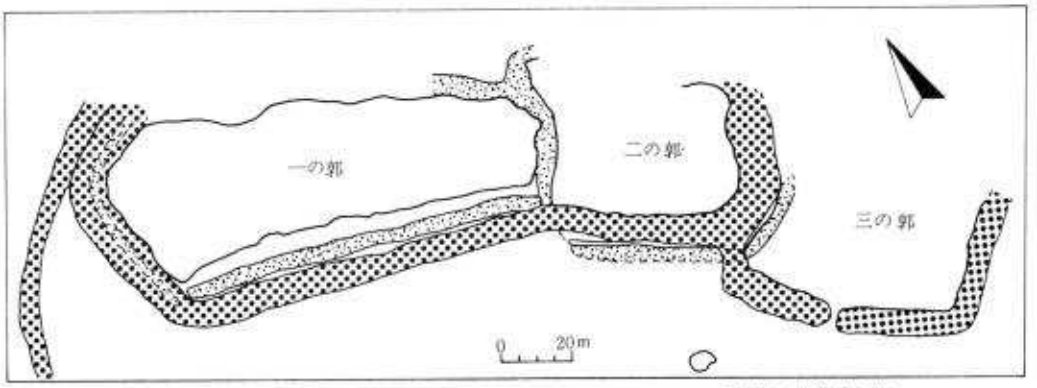
(　)は調査区域分。

新旧関係の判明する塁壕は重複する6号堀→7号堀であり、他は埋没状況によってのみ推定される。現状で認められる1・2・7・8号堀を最終段階に位置付けるならば、埋没する3～6号堀は共にこれに先行する開削とみなされ、新・旧2期の繩張りが推定される。旧堀は一の郭及び二の郭を画して対応する配置となり、特に南辺の直線堀では共通する形状を呈する。また、3～5号堀では殆ど同様の埋没過程を経るものである。しかし、一の郭西辺に対応する空堀は確認されず、1号堀を比定するには北辺防備の点で不自然であり、2号堀によって失なわれる空堀を想定することができよう。しかし、2号堀西辺土塁の揚土が一の郭突端部に2分されることと符合するものの明確な根拠はみいだし得ない。

旧堀をほゞ踏襲する空堀は一、二の郭を巻いて開削され、更に三の郭を加えた7・8号堀が配される。2・8号堀が更に東方へ延長されている点では東方郭の拡張が推定され、西方郭に

続く1号堀も同様に類推されるものである。

塁壕による縄張りの変遷については東西二方の塁壕を加えて更に検討を要するが、初期においては一、二の郭の2郭によって構成され、北辺の急崖を除いて塁壕に限られるものと推定される。拡張段階では旧堀はすべて廃され、ほゞこれを踏襲する旧2郭に三の郭を加えた構成であり、更に周到に計画された同様の塁壕に限られる。これによって東・西方の郭は拡張される郭とみなされ、改修段階に至って形成されていることが予想されるものである。



第128図　塁壕変遷推定図

2．郭の遺構

(1) 郭の形成と遺構

一の郭を除く2郭は北辺が共に斜面となって未調査区域に続き、その限界は明確でないが、いずれも尾根状に延びる東西方向の高位地形に沿って形成される。旧地形を南北辺に残存する旧表土によって推定するならば、3郭共に東西方向に高位地形となるほか、ほゞこれに準ずるものとみなされる。特に一、二の郭は南北方向に比して更に緩やかな南東斜面であり、三の郭境にやゝ勾配が強い。三の郭では隣接する大瀬川B遺跡に続く鞍部をなし、中央部以東は対称的な西斜面とみなされる。二の郭南隅と7号堀北端の土塁を結ぶ勾配を求めるならば8.4°、8号堀より大瀬川B遺跡へは4.0°勾配である。一の郭南辺より2号堀土塁にかけては13.5～16.0°勾配となり、南北斜面に比して東西方向は著しく緩やかとなる。

3郭の構成は北西にあたる一の郭がもっとも高位で最大となり、順次連郭状に並列する。一、二の郭は殆ど同一方向に続き、初期の空堀に対応する面積比は2：1である。三の郭は長軸方向をこれより西偏にとり、中軸線の西端で20mほど南に偏って形成される。二の郭に比して若干東西方向に長いもののほゞ同一面積であり、最終段階における空堀によって画される一、二の郭と三の郭は3：1の面積比となる。

郭の造成は高位地形に沿って主として東西方向の切土とこれに伴う南北方向への盛土によっ

て整地される。一、二の郭では東西1.0～3.2°勾配をなし、三の郭の3.2～3.7°勾配に比して若干弱く、最終段階の整地面が重複して新旧の相違は判明しない。一の郭では3～5号堀の埋め戻しと共に郭面の切土造成が推定され、ほゞ西辺を除く三方への移動と帯郭の拡幅が進められるものとみられる。二の郭の西辺は2号堀の開削によって不明となるが、土塁を含めて遺物の混入は認められない。この点では郭北西端の僅かな土塁状の盛土は初期の切土に伴うものとも解される。二の郭では初期の5号堀を埋め戻し、これに伴う切土のほか、南北方向への整地が類推される。しかし、一の郭の盛土層に比してやゝ薄層であり、主として北辺への移動が予想される。また、3段の切土面が共に初期の削平地である可能性もあげられ、3削平地の中央部以東は共に東西18mと推計される。三の郭においては同様に中央部の切土及び南北二辺への盛土であり、西隅では7号堀開削に伴う掲土によって整地面を形成し、郭面の整地に前後する工程と解される。

遺構は門と付属遺構4、溝及び溝状遺構14、柱穴群と掘立柱建物及び柱列76、竪穴遺構及び竪穴状遺構14、焼土及び焼土遺構14、井戸及び土壙8、砂溜遺構2、溝状土壙9である。このうち竪穴遺構に含めた住居址1棟と溝状土壙が築城以前の遺構とみられるが、時期の確定できない遺構が含まれる。ここでは記述の都合上、郭形成段階の遺構に含めて一括している。

(2) **門と関連遺構**（第38表）

一の郭東辺の重複する2遺構、一の郭及び三の郭南辺の2遺構である。前者の(2)、(3)は一の郭東端にあたり、唯一の開口部である。削り出しの登り道と南北両端に続く木柵を擁する城戸である。殆ど同一構造の前後する単門であり、間口は建て替えによって8尺より7尺に縮小するが、打ち込みの木柵は長く縁辺に沿って続いている。冠木門、または棟門と推定される。

一の郭南辺の(1)は2号堀の湾曲部分より踏段が敷設され、3号堀の埋没した帯郭に構築される。二対の柱穴によって棟門、または薬医門が類推され、更に脇戸をもつ可能性もあげられる。間口は東辺の(3)と同様8尺とみられる。三の郭の(4)では土橋に続く石敷を伴い、打ち込みの木柵が連なる木戸門とみなされる。間口は(2)のそれの倍数となり、著しく広く冠木を有するかは明確でない。

城館址における同様の虎口は柳田館遺跡のIIIの郭に求められ、冠木門、または棟門は建て替えによって間口の縮小する傾向が認められる。[注(1)12] 5例のうち重複のない(5)を(1)～(4)のいずれかに伴うものとみると、間口は2.10(6.931)～3.03m(10.000尺)であり、10尺、8.5尺、または8尺、7尺の順となる。一の郭南・東のそれに比定するならば、柳田館遺跡の後二者の段階に

第38表　門遺構一覧表

No.	遺構名	間口	中軸線方向	付属遺構
1	Da24	2.47m (8.135)尺	N17. 0° E	踏段
2	Dj121－I	2.07 (6.832)	E23. 6° S	木柵・溝
3	Dj121－II	2.42 (7.987)	E23. 0° S	木柵
4	Hc109	4.14 (13.663)	N45. 4° E	石敷・杭列

近似する。薬医門には繋Ⅲ遺跡に2例があり、B－12門の門柱間は3.72m(12.278尺)である。[注(1)7]

4遺構の前後関係については、重複によって(3)→(2)が確認される。(1)、(4)はそれぞれ2号堀湾曲部、7・8号堀間の土橋に対応する配置であり、既述の空堀の移行に従うならば共に改修段階に伴うものと解される。同様に(2)、(3)遺構は旧堀と一体をなし、初期における虎口にあたるものとみられ、二の郭境には木橋が想定される。二の郭北辺へ達する東方の経路はこれに対応するものであり、拡張段階に至って登り道は南辺に開設されると考えられる。

(3) 溝及び溝状遺構

8号堀に続く2条の排水溝を除き、一の郭8条、二の郭4条、三の郭2条の合せて14条である。一の郭のAj15溝のほかは共に部分的に検出されるものであり、遺物を伴わず時期や性格については明らかでない。

一の郭の8条のうち西方の5条については、最大の南北溝が郭の西辺方向に走り、これに直交する2条は郭の南辺に平行する関係にある。また、他の2条についても連続、または同一方向に走行する点で同時、または相前後して開削されるものと推定される。特に画一性は認められないが、いずれも柱穴群に重複し、南北溝方向に近似する掘立柱建物を求めるならば、溝以西に3棟、東方では6mをおいて主要建物群の西面が平行している。東西溝では北2～4mに建物南面、または柱列が平行する配置である。この点では建物配置と一体をなすものとみられ、地割に伴う区画溝が推定され、小規模な東西溝では雨落ちを兼ねる区割溝等が類推される。

二、三の郭では共に近接する遺構に何らかの関連を有する溝とみられるが、明確でない。

(4) 柱穴群と掘立柱建物

1．柱穴とその分布

柱穴は竪穴遺構に伴うものを除いて大小すべて合せて3594に達する。一の郭より順に減少し、その割合は71.2、20.0、8.8%となる。二の郭では乱杭状の小ピット群があり、これを除いては全体の14.7%、二・三の郭を合せて24.1%である。

柱穴の掘り方は上部の削平によるほか、建物の規模や位置によって異なるが、径0.20～0.40m、深さ0.10～0.30mの円形をなすものがもっとも多く、一の郭に比して二、三の郭に小さく浅い傾向にある。少数ながら方形状を呈するものが含まれ、共に断面は円筒状をなすものが大部分である。柱痕は径0.08～0.25mのいずれも円形をなし、径0.12～0.18mに集中している。柱痕の判明するものは二、三の郭ほど少なく、一の郭を含めた全体の柱穴数に対する比率は14.1%である。共に郭に配置される建物に対応するものと把握される。

柱穴の分布については各郭の全域に及んでいる。二、三の郭では全体に疎になり、特に二の郭下段削平地や三の郭の南東部に少ないほか、著しい特徴はみいだし得ない。一の郭では、中央部を境にして東西に2分される。中央部より西辺にかけてはほゞ全域に分布しているが、更

に南北溝以西とこれより６ｍ前後をおいた東方に区分され、後者にもっとも密となる。中央部より東辺にかけては南・北二辺に沿って集中し、その間の中央部は空白となって通路となることが推定される。このことはもっとも集中して重複する区域と対称をなし、建物配置における一貫した計画性を示すものと解される。

２．建物規模と配置（第39、40表）

柱穴群によって推定される掘立柱建物は主要な柱列を含めて一の郭47、二の郭８、三の郭11の計66棟となり、二の郭の柱列を含めては76棟となる。しかし、建物とする柱穴数は門及び付属遺構に伴うものを含めても全体の21.9％にあたり、規則性をみいだし得ない柱列や小規模建物を考慮するならば、建物数は更に増加するものとみなされる。

３郭中の建物は大別して主要建物と小規模な建物に分けられる。主屋とみられる大規模な建物は一の郭に限られ、梁行方向５間、桁行方向７間を最大に(14)～(16)、(19)、(25)の５棟が推定される。建物面積は91.40～138.00㎡であり、27.70～41.82坪と推計される。これに準ずる柱配置を有する建物には(５)、(17)、(20)、(23)建物等があげられ、また、２棟とした(24)、(27)の２棟を同一棟とみなすならば前述の５棟と同様の面積であり、主要建物の一部、また併存する建物が想定される。いずれも中央部より北・西方に位置し、最大７棟が重複して他の３棟がこれに近接する配置をなす。各建物は平行、または直交する建物方向を有し、主要な建物は建て替えによっても大きく移動していないものと解される。

これより小規模な建物は梁行方向２間、桁行方向５間を最大にして混在し、一の郭では主要建物と殆ど近似する建物方向をなして分布する。主要建物の周辺では特に西方に多く、建物面積15.74～40.88㎡の11棟が重複し、他の三方では合せて７棟である。中央部以東では空白地帯をなす通路の北に７棟、郭の南辺に沿っては10棟まで推定され、最大規模は梁行方向２間、桁行方向４間、建物面積では40.24㎡である。共に小規模建物は更に重複するものとみられ、また、推定される建物はその一部である可能性もあるが、中央部以東の南辺に沿う建物群に比較

第39表　建物別 梁行・桁行比率一覧表

No.	桁　比　率	一　の　郭	二の郭	三の郭	計
1	1.00～1.08	(13) (25) (27) (42) (45)		(8) (9)	7棟
2	1.10～1.19	(4) (5) (11) (14) (23) (24) (45)		(7)	8
3	1.22～1.28	(6) (18) (20) (22) (35) (36)		(4)	7
4	1.33～1.37	(46)	(5) (6)	(10)	4
5	1.43～1.49	(2) (3) (39) (38)	(3) (4)		6
6	1.50～1.59	(15) (16) (21) (25) (40) (41)			6
7	1.62～1.69	(19) (32) (34) (43)	(7) (8)	(6)	7
8	1.72～1.75	(1) (2) (39)		(5)	4
9	1.88～1.91	(8) (17) (46)			3
10	2.01～2.35	(7) (31)			2

第40表 掘立柱建物計測一覧表

(1) 一の節

No.	建物名	規模	梁行	桁行	面積	梁行柱間寸法 ~1.0	~1.5	~2.0	~2.5	~3.0	~3.5	~4.0	~4.5~	桁行柱間寸法 ~1.0	~1.5	~2.0	~2.5	~3.0	~3.5	~4.0~	棟方向	柱穴 大きさ	深さ	底面比高	柱底径	梁行	桁行	面積	梁行柱間寸法 ~4	~5	~6	~7	~8	~9	10~	桁行柱間寸法 ~4	~5	~6	~7	~8	~9	~10	10~
1	Ah30	1×3間	3.59m	6.28m	22.55㎡							3.59	m				2.11			m	E25.4°S	27~42cm	24~45cm	30cm	cm	11.832尺	20.726尺	6.83坪							11.832				6.958				尺
2	Ai33-I	2×3	4.69	6.77	31.75		1.45				3.21						2.25				N 7.8°E	21~45	17~48	28		15.470	22.327	9.62		4.796					10.583					7.437				
3	Ai33-II	1×3	4.56	6.73	30.69								4.56				2.24				E10.2°S	22~45	24~44	39		15.050	22.195	9.30							15.050					7.393				
4	Aj21-I	1×3	5.84	7.00	40.88								5.84				2.06	2.84			N20.4°E	29~38	25~55	54	15	19.257	23.086	12.39							19.257				6.782			9.373	
5	Aj21-II	5×4	7.11	8.00	56.88		1.11	1.63		2.60				0.92		1.91			3.27		N13.8°E	34~58	7~53	76		23.454	26.403	17.24	3.647		5.380			8.564		3.036			6.304				10.776
6	Ba36	2×3	4.90	6.26	30.67					2.60							2.11				N18.0°E	30~43	24~37	26	12	16.155	20.671	9.30						8.598					6.953				
7	Ba30-I	1×4	4.98	10.01	49.85								4.98					2.51			N19.7°E	32~45	30~70	51		16.436	33.036	15.11							16.370					8.272				
8	Ba30-II	1×5	4.22	7.92	33.42								4.22		1.18		2.24				N17.7°E	21~49	10~50	48		13.919	26.139	10.13							13.919	3.894				7.404				
9	Bc42	3		7.88														2.62			E21.8°S	25~41	8~23	30			26.007													8.647				
10	Be33-I	2×2~	4.78	4.53	21.65				2.39								2.26				N16.0°E	31~46	23~38	25	12~15	15.765	14.950	6.56					7.899							7.464				
11	Be33-II	1×2	3.67	4.29	15.74							3.67					2.14				N 5.3°E	29~60	18~45	12	12	12.123	14.142	4.77							12.123					7.054				
12	Bc27	1×3	4.38	7.67	33.59								4.38					2.55			N 7.5°E	25~47	12~37	23	11~12	14.439	25.314	10.18							14.439						8.427			
13	Bd30	1×2	4.14	4.17	17.26								4.14				2.08				N 7.8°E	31~59	33~67	35	12	13.674	13.746	5.23							13.674				6.873				
14	Bd15-I	5×5	9.55	10.54	100.66		1.40		2.02	2.54			5.06		1.31		2.08	2.54		3.22 4.08	E21.5°S	31~56	23~60	52	12~21	31.505	34.799	30.50		4.609		6.656		8.375	13.515		4.307		6.867				13.168
15	Bd15-II		9.38	14.31	114.28		1.30	1.73 1.93		2.51		3.74	4.35		1.37		2.26		3.35	4.24	N24.7°E	20~63	6~75	67	12~21	30.968	47.239	34.63		4.295	5.743	6.271		8.295	12.343		4.528			7.444				11.985
16	Bd15-III	5×7	9.42	14.65	138.00		1.39	1.83	2.22				4.29		1.35		2.49			4.41	N20.8°E	25~28	18~40	80	9~15	31.078	48.358	41.82		4.587		6.040	7.335		14.158		4.465				8.209			14.543
17	Bd15-IV	3×4	5.11	9.62	49.16		1.29	1.91							1.32				3.40		E22.5°S	26~54	21~70	54	9~18	16.865	30.553	14.90		4.264		6.293					4.378							11.229
18	Bd12	2×2	4.17	5.34	22.27				2.10				4.15		1.32		2.06				E21.2°S	34~49	12~40	43	15~18	13.754	17.613	6.75				6.939			13.696		4.356		6.790				
19	Be15	(4)×7	8.93	15.05	102.00		1.35	1.88				3.86	5.68		1.24		2.31		3.22	4.68	N23.8°E	21~61	16~71	68	12~21	29.465	49.662	30.91		4.441		6.219			12.739		4.092			7.618				12.234 12.446
20	Bf18	4×4	6.55	8.00	52.40		1.42	1.76	2.08							1.54	2.48	2.97			N20.6°E	25~51	27~43	50	12~15	21.601	26.403	15.88		4.680	5.800	6.865						5.083			8.191	9.802	
21	Bf9	1×3	4.27	6.79	28.99								4.27				2.24				E20.8°S	27~50	18~50	38	12~15	14.076	22.409	8.79							14.076					7.376				
22	Bg30	3×3	4.86	6.15	36.29	0.96		1.95									2.05			4.15	E20.2°S	23~41	7~51	56	15~18	16.040	20.308	11.00	3.168			6.419							6.756				13.696
23	Bg24	3×5	5.60	6.48	36.29		1.40	1.88				3.67			1.27		2.11				E21.8°S	25~52	20~60	43	15~18	18.491	21.370	11.00		4.620		6.211			12.096		4.191		6.769				
24	Bg6	3×4	7.49	8.41	62.99			1.75		2.60	3.07						2.10			4.37	N20.8°E	27~50	20~50	36	15~23	24.711	27.764	19.09			5.759			8.568	10.145				6.940				14.422
25	Bh9	4×5	7.56	12.09	91.40		1.12	1.74	2.34		3.12						2.23		3.38	4.34	E21.9°S	26~59	14~70	63	15~23	24.950	39.909	27.70	3.695		5.743		7.734		10.297					7.363				11.138
26	Bi12	2×2	4.06	4.31	17.50				2.01								2.16			4.31	N28.4°E	22~47	22~50	35	15	13.421	14.224	5.30				6.642								7.129				14.224
27	Bj12	2×3	5.74	6.17	35.42					2.55	3.16				1.34		2.44				N20.6°E	20~46	15~52	53	15~21	16.936	20.374	10.73						8.408	10.421		4.433				8.064			
28	Bj103	2×2~	4.74	4.36	20.67				2.14				4.75				2.18				(E28.0°S)	26~42	20~70	78		15.644	14.389	6.26					7.046		15.677					7.195				
29	Ca24	2×2~	4.76	4.54	21.61				2.44				4.72				2.27				E23.9°S	24~35	23~70	69		15.710	14.934	6.55						8.036	15.561					7.500				
30	Ca103	1×3	4.99	7.43	37.08								4.99				2.39				E26.0°S	28~49	23~67	45	23	16.469	24.234	11.24							16.469					7.871				
31	Ce106	2×4	4.08	9.57	39.05				2.03								2.34				N27.6°E	25~44	19~43	46	18	13.452	31.584	11.83				6.713								7.709				
32	Cf103	1×4	4.98	8.08	40.24								4.98				2.02			3.95	N26.5°E	27~40	9~22	53	12~13	16.436	26.667	12.19							16.436				6.678				13.036
33	Cg6	1×2~	6.01	2.32	13.94								6.01					2.66			E32.8°S	30~66	18~58	74		19.835	17.541	4.23							19.670					8.762			
34	Cg112	1×3	4.26	6.92	29.48								4.26				2.35				N31.4°E	35~49	27~54	52		14.051	22.822	8.93							14.051					7.760				
35	Ch6	1×3	5.24	6.67	34.95								5.24				2.19				E33.5°S	20~50	28~75	57	17	17.302	22.013	10.59							17.303					7.228				
36	Ch115	2×3	5.47	6.99	38.24				2.33								2.71			5.40	N38.6°E	31~61	52~86	65	21~22	18.061	23.053	11.59					7.673									8.944			17.822
37	Ci6	(1)×2~	5.12	4.44	22.73								5.12				2.22				E34.2°S	31~58	26~58	30	18	16.909	14.653	6.89							16.909					7.310				
38	Ci115	1×3	4.56	6.80	31.01								4.56				2.24				E35.9°S	31~43	20~54	30	18	15.059	22.426	9.40							15.059					7.398				
39	Cj3	1×3	4.88	8.55	41.72								4.88				2.48		3.06		E32.6°S	32~46	32~60	66	15	16.081	28.201	12.64							16.081						8.185		10.083
40	Cj109	2×2	3.87	5.79	22.41			1.93										2.89			E32.9°S	28~70	29~68	42	21	12.783	19.109	6.79		"		6.370										9.538	
41	Da109	1×3	4.33	6.79	29.40								4.33				2.26				E25.3°S	25~42	20~54	55	13	14.290	22.392	8.91							14.290					7.464				
42	Da103	(1)×2	4.07	4.17	16.97								4.07				2.08				E28.6°S	22~48	24~50	43		13.443	13.746	5.14							13.443				6.848					
43	Db115	1×3	4.54	7.48	33.96								4.54				2.22	2.62 2.76			E29.6°S	29~63	16~56	47	15	14.967	24.670	12.83							14.967					7.327	8.300	9.109	
44	De103	1×2~	5.19	5.04	26.16								5.19				2.49				E33.8°S	27~50	27~40	54		17.140	16.634	7.93							17.140						8.226			
45	De106	1×2	4.29	4.74	20.33								4.29				2.37				E33.3°S	24~38	23~55	47		14.147	15.644	6.16							14.147					7.822				
46	Dg109	1×3	3.43	6.56	22.50						3.43						2.20				E31.5°S	29~44	28~46	47		11.312	21.633	6.82							11.312					7.272				
47	Dh112	2×3	5.54	7.37	40.83								5.54				2.46				E35.0°S	29~45	23~72	61	18	18.284	24.323	12.37							18.284						8.124			

(2) 二の節

1	Ed124	×3		5.42													1.80				N42.8°E	24~39	15~40	23			17.888										5.952						
2	Ed127-I	×3		6.74														2.24			N26.8°E	19~33	15~36	24			21.244													7.382				
3	Ed127-II	1×3	4.64	6.67	30.95								4.64					2.24			N30.3°E	33~46	6~56	35	15	15.314	21.997	9.38							15.314					7.393				
4	Ef124	1×2	2.71	3.94	10.68					2.71							1.52	2.43		3.19	E15.2°S	20~38	15~24	12		8.927	12.954	3.24						8.927				5.017			8.020		12.904	
5	Ej127	(2)×3	5.58	7.63	42.58		1.36												2.55		N13.5°E	23~50	17~76	49	15	18.416	25.182	12.90		4.472											8.416				
6	Ej136	1×2	2.84	3.87	10.99					2.84							1.57	2.43			E17.0°S	29~55	21~49	31	15	9.356	12.772	3.33							9.356				5.182			8.020			
7	Fb136	2×4	3.85	6.39	24.60		1.50		2.29								1.59				N24.0°E	15~51	17~47	44		12.717	21.089	7.46		4.944			7.551							5.231					
8	Fe130	(1)×3	3.95	6.40	25.28							3.95					1.63				N24.4°E	18~46	13~53	24		11.859	21.122	7.66							11.859				5.380					

(3) 三の節　（その他の柱列を除く）

1	Gg118	1×3	2.50	6.00	15.00				2.50								1.98				N54.5°E	18~35	6~43	61		8.251	19.801	4.55						8.251						6.546				
2	Gi112	4		9.98															3.33		E42.7°S	26~37	28~48	42			32.937																	10.991
3	Gh124	2×4	7.07	9.08	64.20				2.50				4.76					2.27			N24.5°E	27~39	15~68	78		23.333	29.967	19.45						8.251	15.721					7.475				
4	Gi127	(1)×2	2.01	5.12	10.29				2.01								1.94		3.20		N29.6°E	16~41	14~70	57		6.634	16.898	3.12				6.634							6.403				10.561
5	Gj124	1×2	3.18	5.48	17.43						3.18							2.74	3.18		N26.6°E	21~33	23~40	24		10.495	18.086	5.28							10.495							9.026	
6	Hc133-I	1×3	4.63	7.79	36.07								4.63					2.58			N28.6°E	15~51	20~73	77		15.281	25.693	10.93							15.281						8.594			
7	Hc133-II	2×3	5.39	5.92	31.91								5.39				1.97				N30.5°E	10~44	23~79	54	18	17.797	19.538	9.67							17.797				6.491					
8	Hc133-III	2×1	4.85	4.94	23.96				2.41											4.94	N35.0°E	28~51	22~60	53	15	16.007	16.304	7.26					7.962									8.152			
9	Hc133-IV	1×2	4.23	4.57	19.33					2.97			4.23				2.28				N29.6°E	20~33	13~51	60		13.960	15.083	5.86							13.960					7.525				
10	Hh127	(2)×2	5.94	7.91	46.99															3.95	E42.0°S	21~31	16~40	29		19.604	26.106	14.24							9.802									12.970
11	Hh139	1×3	1.01	6.22	6.28		1.01										2.06				E46.7°E	21~44	15~51	57		3.342	20.528	1.90	3.333											6.799				

的小規模な建物が多く含まれる。

二の郭では中央部に面積40㎡前後の建物が推定されるものの明確でない。これより小規模な建物は中央部より北偏して東西に各2棟があり、うち最小規模となる10.68～10.99㎡の各1棟が重複、または近接して認められる。

三の郭では中央部に4棟が重複し、その東西に柱列が確認される。特に中央部以西に主要建物に準ずる規模の建物が想定されるが、いずれも特定し得ない。中央部の(6)～(8)建物4棟は面積19.33～36.07㎡と推計され、規模に相違を有しながらほゞ同位置に重複する。殆ど移動の認められない点では一の郭と同様一貫して初期の占地を踏襲するものであり、比較的短期間における建て替えも推測される。

3．建物方向（第41表）

推定される建物には梁・桁行方向の判明しない建物が含まれるが、棟方向の近接する建物が比較的多い。東西・南北棟とも40°以下を5°前後で区分するならば下表の9群に分けられる。東西棟はE10.2～46.7°Sまでの31棟、南北棟はN5.3～54.5°Eの35棟であり、相互に直交する関係を有して著しく相違する建物方向は認められない。郭別では一の郭が5.3～38.6°までの(1)～(7)群に渡り、東西棟が20°以上の(4)～(6)群に集中しているのに対し、南北棟では25°以下にもっとも多い。二、三の郭においては柱列が含まれるものの、東西棟に比して南北棟が多く、三の郭にあっては20°以上の(4)～(9)群が分散している。

第41表　棟方向別建物一覧表

No.	棟方向	一の郭	二の郭	三の郭	棟方向	一の郭	二の郭	三の郭	計
1					N 5.3～7.8° E	(2) (11) (12) (13)			4棟
2	E 10.2° S	(3)			13.5～13.8	(5)	(5)		3
3	15.2～17.0		(4) (6)		16.0～19.7	(6) (7) (8) (10)			6
4	20.2～23.9	(9) (14) (17) (18) (21) (22) (23) (25) (29)			20.4～24.8	(4) (15) (16) (19) (20) (24) (26) (27)	(7) (8)	(3)	20
5	25.3～29.6	(1) (28) (30) (41) (42) (43)			26.0～29.6	(31) (32)	(2)	(4) (5) (6) (9)	13
6	31.5～34.2	(33) (35) (37) (39) (40) (44) (45) (46)			30.3～31.4	(34)	(3)	(7)	11
7	35.0～35.9	(36) (47)			35.0～38.6	(38)		(8)	4
8	42.0～46.7			(2) (10) (11)	42.8		(1)		4
9					54.5			(1)	1

建物配置に伴う棟方向の変化は特に一の郭に顕著である。主要な建物及びこれに準ずる10棟についてみるならばやゝ北西に位置する(5)建物を除いてすべて(4)群に含まれる。この主要建物の周辺及び重複する建物19棟ではもっとも北西の(1)建物が(5)群に含まれるほか、他の18棟は(1)～(4)群にある。特に西方ではN5.3～19.7°Eを計って(3)群までの南北棟が大部分を占める。他の三方では5棟が主要建物と同様の(4)群となり、郭中央部に近い東方の2棟が(5)群となって2分される。

中央部以東の建物では中央部に近い南北棟4棟が(5)～(6)群であり、東方の建物ほど棟方向が東偏している。東西棟とみられる13棟はすべて(5)～(7)群にあり、特にE31.5～34.2°Sの(6)群に集中し、主要建物の20.2～24.8°に比して9.4～11.3°の相違が認められる。従って一の郭では中央部以西が(1)～(5)群の混在する南北棟が比較的多く分布し、これより東方においては(5)～(7)群の建物方向を有し、圧倒的に東西棟が増加しているといえる。

建物規模による棟方向では重複する主要建物4棟の場合、東西棟と南北棟の変化は認められるものの、共に平行、または直交する関係を有し、基本的には一貫して前進建物を踏襲しているものとみなされる。これに近接する大部分の小規模建物は主要な建物及びこれに準ずる建物と殆ど同様の棟方向を有し、共に付属の建物が推定される。主要建物とみられる(14)建物には(18)建物が平行し、もっとも北西に位置して(2)群に含まれる(5)建物にはこれに近似する(2)、(11)、(13)建物等の小規模建物が対応することが想定される。

郭における立地と棟方向の関連では中央部以西で大部分が郭の南辺に平行、または直交する建物方向が認められ、(1)、(2)群となる建物では郭の西辺に沿って棟方向をとる傾向が認められる。同様にこれより東方に位置する建物では郭西方の南辺延長線に平行、または直交する(5)群の建物と東方の南辺に沿う(6)、(7)群の建物に2分されるものである。この点では3大別されるものであるが、相互の対応関係は必ずしも明確ではない。

二の郭では(2)、(3)群の(4)～(6)建物が中央及び下段削平地の切土方向に平行、または直交する棟方向を有し、対応する建物が想定され、一の郭の(1)、(2)群の建物との関連も類推される。また、三の郭では南辺の門に平行、または直交する柱列のほかは(4)～(7)群の建物であり、郭の中央部北辺に沿っているものと解される。二の郭建物との関連では(4)～(6)群に含まれる4棟に対応する建物であることが考えられる。

総じて建物方向は郭の形成や建物配置によって制約され、これらの制約は全体の縄張りに起因するものとみなされる。主要建物とその付属建物とみられる小規模建物では平行、またはほゞ直交する関係にあることが推定される。

4．柱間寸法（第129～131図　第42～45表）

推定される建物の柱間寸法は全体に整然とした柱配置を有せず、実測値は極めて振れが大きく棟方向と同様に厳密な画一性は求め得ない。実測値の平均によって算出される換尺値をもとに分類するならば10尺未満では梁・桁行方向共3尺の柱間まで次表によって7群となる。対応する柱列を含むため明確ではないが、狭い柱間に限っては(1)群を有する建物が6棟、(2)群が12棟となる。(3)群は(2)群に共通する建物を除いて6棟となり、(24)、(27)建物を同一棟とみるならば5棟となる。また、比較的規模の大きい建物では同一棟においても梁・桁行方向が必ずしも統一される柱間をもたず、同一方向においても複数の柱間寸法によって構成される。

第42表　建物別柱間寸法一覧表

No.	梁行柱間寸法	一の郭	二の郭	三の郭	桁行柱間寸法	一の郭	二の郭	三の郭	建物数
1	3.168～3.696尺	(5) (22) (25)		(10)？	3.036～3.894尺	(5) (8)			6棟
2	4.246～4.944	(2) (14) (15) (16) (17) (19) (20) (23)	(5) (7)		4.092～4.528	(14) (15) (16) (17) (18) (19) (23) (27)			12
3	5.380～5.800	(5) (15) (20) (24) (25)			5.017～5.952	(20)	(1) (4) (6) (7) (8)		10
4	6.040～6.939	(14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (22) (23) (26) (31) (40)		(4)	6.304～6.958	(1) (4) (5) (6) (13) (14) (18) (22) (23) (24) (32) (42)		(1) (7)	23
5	7.046～7.899	(10) (16) (25) (28) (36)	(7)	(8)	7.054～7.822	(2) (3) (8) (10) (11) (15) (19) (21) (25) (26) (28) (29) (30) (31) (34) (35) (37) (38) (41) (43) (45) (46)	(2) (3)	(3) (9)	30
6	8.036～8.589 8.927	(5) (6) (14) (15) (24) (27) (29)	(4)	(1) (3)	8.064～8.944	(7) (9) (12) (16) (20) (27) (33) (36) (39) (43) (44) (47)	(4) (5) (6)	(6) (8)	25
7	9.802			(10)	9.026～9.802	(4) (20) (40) (43)		(5)	6

一の郭における主要な建物及びこれに準ずる建物10棟についてみるならば(1)～(7)群に及んでいる。最小柱間は(1)群の3.65～3.70尺、または(2)群の4.25～4.69尺のいずれかに含まれるもののこれより広い柱間では(3)～(7)群まで分散し、各建物によって相違している。主要建物の梁・桁行を合せては(5)建物が(1)、(3)、(4)の3群の組合せとなり、以下同様に(14)建物は(2)、(4)、(6)の3群、(15)建物は(2)～(6)の5群、(16)建物は(2)、(4)～(6)群の4群、(19)建物は(2)、(4)、(5)の3群、(25)建物では(1)、(3)、(5)の3群の構成である。梁行に対して桁行の柱間寸法は同数、またはこれより少ない柱間寸法の組合せとなる。また、最小の柱間は共通するが、梁行に対して桁行で広くなる(5)、(16)建物が含まれ、これに準ずる建物を加えるならば更にその傾向が強いといえる。(23)建物1棟のみは共通して(2)、(4)群となるが、平均値では5寸ほど桁行に広い。また、10尺以上の柱間を加えて細分するならばさらに各建物による相違が認められるものである。

(14)の Bd15－Ⅰ建物ではこれを東西棟とみると次表によって柱間寸法は梁行4群、桁行5群の組合せとなる。①、②群までの狭い柱間と梁行③群及び桁行④群で共通し、これより広い柱間では桁行の③、⑤群が加えられる。もっとも梁行の③、④群は②群の整数倍であり、桁行の④群は②群の、⑤群は③群のそれぞれ倍数であり、基本となる柱間は①～③の3群による構成である。この3群には特に共通性はみい出し得ず、実測値平均にもっとも近似する換尺値を求めるならば①～③群は順に4.50尺、6.5、または6.75尺、8.50尺となり、更に梁・桁行の総長にもっとも近い計数値によって②群は6.75尺とみなされる。従って梁行では①4.50尺、②6.75尺、③13.50尺、④20.25尺があり、西面の柱間は北より4.50＋6.75＋6.75＋6.75＋6.75尺5間、31.5尺となる。また、桁行では①4.50尺、②6.75尺、③8.50尺、④13.50尺、⑤17.00尺となり、南面の柱間は西より4.50＋8.50＋8.50＋6.75＋6.75尺の5間35.00尺である。実測値平均に対す

第43表　Bd15－Ⅰ建物柱間一覧表

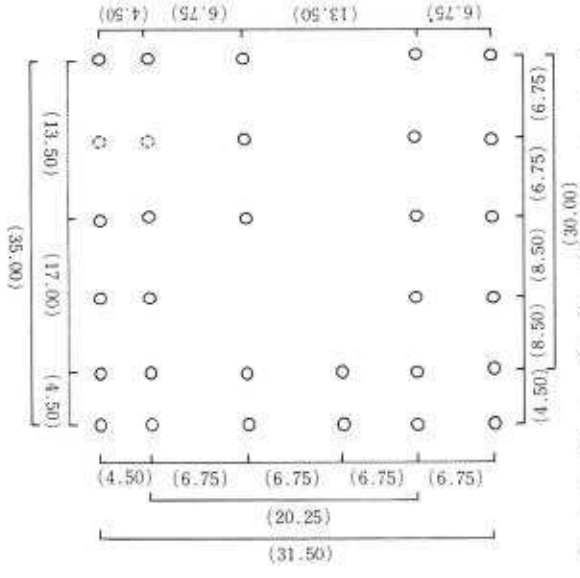
梁行

No.	実測値	間数	柱間平均	算出規準	造営柱間	柱間平均値－造営柱間
1	1.18～1.47m	5	1.33m（4.403）尺	1.36 m	1.36m（4.50）尺	0.03m（0.099）尺
2	1.97～2.20	14	2.08 （6.861）	2.05	2.05 （6.75）	0.03 （0.099）
3	3.96～4.04	3	3.98 （13.168）	2.05×2	4.10 （13.50）	0.12 （0.396）
4	6.08	1	6.08 （20.066）	2.05×3	6.15 （20.25）	0.07 （0.231）

桁行

1	1.36～1.46	6	1.40 （4.609）	1.36	1.36 （4.50）	0.04 （0.132）
2	1.97～2.08	6	2.02 （6.655）	2.05	2.05 （6.75）	0.03 （0.099）
3	2.38～2.64	8	2.54 （8.375）	2.58	2.58 （8.50）	0.05 （0.165）
4	4.01～4.18	2	4.10 （13.515）	2.05×2	4.10 （13.50	0.00
5	5.06	1	5.06 （16.700）	2.58×2	5.16 （17.00）	0.10 （0.330）

る誤差は各柱間で0.10～0.33尺、総間では梁・桁行それぞれ0.01、0.20尺であり、0.87%以下となる。これによって梁・桁行総長に共通する造営規準を仮定するならば7尺1間とした場合、誤差がもっとも極小となり、梁行4.5間、桁行5間に相当するものである。

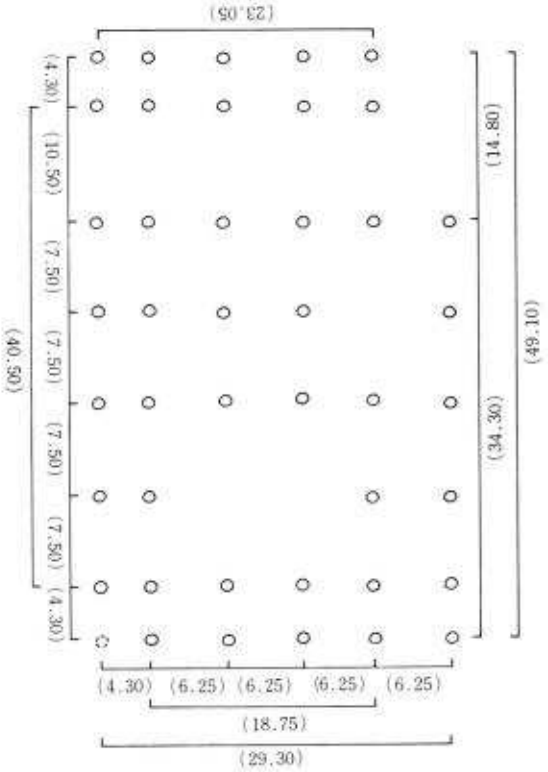


第129図　Bd15－Ⅰ建物推定模式図

(19)の Be15建物は北2間で若干不整となって明確でない点もあるが、同様に換算するならば梁行4群、桁行4群の柱間寸法で構成される。共通する柱間は最小柱間の①群のみであり、梁行では②群及びその整数倍、桁行では②、③、④群のうち、④群が②群の倍数にあたる。梁行の②群、桁行②、③群を基本間とするものと推定される。これによって求められる換尺算出規準は梁行①群が4.20～4.30尺、②6.25尺、③12.50尺、④18.75尺、桁行では②7.50尺、③10.50尺、④15.00尺となる。共通する①群を総長の最小誤差によって4.30尺とするならば、梁行の柱間は西より4.30＋6.25＋6.25＋6.25＋6.25尺、5間29.3尺となり、桁行では南より4.30＋7.50＋7.50＋7.50＋7.50＋10.50＋4.30尺7間の49.1尺となる。実測値平均に対する誤差は各柱間で0.29尺以下であるが、柱筋による平均値に対しては特に梁行に誤差が大きく、0.25尺の出入りをもって調整していることも予想される。梁・桁行の総間ではそれぞれ0.17尺、0.56尺で0.56、1.13%となる。造営間尺は7尺1間とするならば梁行4間、桁行7間となり、6.25尺1間とみる場合の梁行4.67間、桁行8間に比して誤差が大きい。同様規模となる(15)、(16建物が1間6.25尺と推定される点では後者の6.25尺を基準間としている可能性が強いといえる。

第44表　Be15建物柱間一覧表

No	実測値	間数	柱間平均	算出規準	造営柱間	柱間平均値－造営柱間
梁行						
1	1.21～1.44m	7	1.35m（4.441）尺	1.89×$\frac{2}{3}$m	1.26m（4.16）尺	0.09m（0.297）尺
2	1.58～2.31	25	1.88（6.219）	1.89	1.89（6.25）	0.01（0.033）
3	3.86	1	3.86（12.739）	1.89×2	3.75（12.50）	0.07（0.231）
4	5.68	1	5.68（18.745）	1.89×3	5.68（18.75）	0.00
桁行						
1	1.09～1.34	10	1.24（4.092）	1.89×$\frac{2}{3}$	1.26（4.16）	0.02（0.066）
2	2.12～2.53	18	2.31（7.618）	2.27	2.27（7.50）	0.04（0.132）
3	3.02～3.40	5	3.22（10.634）	2.12×1.5	3.18（10.50）	0.04（0.132）
4	4.46～4.73	3	4.60（15.203）	2.27×2	4.54（15.00）	0.06（0.198）



第130図　Be15建物推定模式図

(24) Bg6及び(27) Bj12建物は柱筋の相異によって2棟とするものであるが、平行する西面や対応する整然とした柱配置によっては主要建物に準ずる同一棟とみることができる。(24)建物では梁行3群、桁行1群の構成であり、梁行の②群と桁行①群を基本とするものとみなされる。梁行の①、③群はその3分の2、2分の3によって算出され、梁行では①5.67尺、②8.50尺、③10.50尺、桁行は①7.00尺となる。従って梁行3間は西より10.50＋8.50＋5.67尺の24.67尺であり、桁行4間は7.00尺等間の28.00尺となる。実測値平均に対する誤差は各柱間で0.29尺以下、総間では0.24尺、0.87%で桁行に大きい。造営規準は梁行で1間6.25尺として4間に相当し、桁行では7.00尺で誤差は最小となり、共通する換尺値は求め得ない。

(27)建物では同様に梁・桁行共各2群による組合せである。梁行は(24)建物の①、②群に一致し、桁行①群は梁行①群の2分の1であり、(24)建物に共通する2群のほかに桁行の1群が基本となる柱間である。これによって梁行の①8.50尺、②10.50尺、桁行の①4.26尺、②8.00尺が求められ、梁行は西より8.50＋10.50尺の2間19.00尺で(24)建物のそれに対応する。桁行では①群の間数が少なく明確でないが、南より4.26＋8.00＋8.00尺3間20.26尺となる。実測値平均に対しては総間を含めて0.30尺、0.99%以下の誤差となる。1間を6.25尺と仮定するならば梁行3間、桁行3.33間に相当する。

第45表　Bg6、Bj12建物柱間一覧表

Bg6 建物梁行

No	実測値	間数	柱間平均	算出規準	造営柱間	柱間平均値－造営柱間
1	1.70～1.78m	4	1.75m（5.759）尺	2.58×$\frac{2}{3}$m	1.72m（5.67）尺	0.03m（0.099）尺
2	2.47～2.65	5	2.60（18.574）	2.58	2.58（8.50）	0.02（0.066）
3	3.04～3.15	5	3.09（10.211）	2.12×1.5	3.18（10.50）	0.09（0.297）

Bg6 桁行

1	1.95～2.26	16	2.09（6.898）	2.12	2.12（7.00）	0.03（0.099）

Bj12 建物梁行

1	2.51～2.58	4	2.55（8.408）	2.58	2.58（8.50）	0.03（0.099）
2	3.12～3.18	4	3.16（10.421）	2.12×1.5	3.18（10.50）	0.02（0.066）

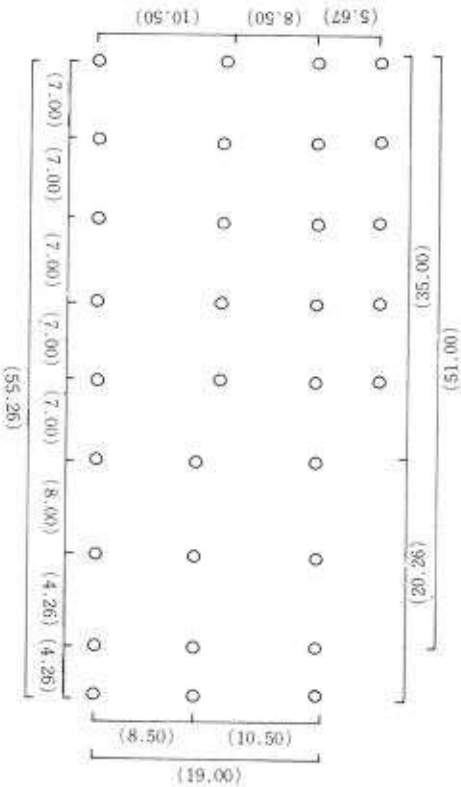
Bj12 桁行

1	1.26～1.42	3	1.34（4.433）	2.58×$\frac{1}{2}$	1.29（4.26）	0.05（0.165）
2	2.38～2.43	6	2.44（8.064）	2.42	2.42（8.00）	0.02（0.066）

(24)、(27)建物間は(24)建物の桁行柱間に等間となり、これを加えて1棟とするならば柱間は梁行3群、桁行3群の構成となる。桁行の柱間は南より4.26+8.0+8.0+7.0+7.0+7.0+7.0+7.0尺の8間55.26尺となる。梁・桁行方向に共通する規準間を求めるならば1間6.25尺で8間と3分の2となり、桁行総間に対する誤差は0.59尺、0.99%である。

このように実測値によって算出される主要建物の柱間は最小柱間の①、②群では3.60尺、4.20～4.30尺、4.50尺等が含まれ、これより広い柱間では5.67尺、6.25尺、6.75尺、7.00尺、7.50尺、8.00尺等があり、画一的な計測値は得られず、誤差を斟酌しても規則性は求め得ない。

城館址の建物については一乗谷朝倉氏遺跡に報告[注(2)]があり、Sb10建物では東西1間が6.25尺、5.0尺、9.37尺、南北は7.0尺とみられ、鹿島館遺跡における[注(1)21]KA1～5建物では庇間が4.55尺を最小として3群の柱間が認められる。この点では主要建物が画一的な柱間寸法を有せず、数種類の柱間寸法によって構成されていると解される。更に柱筋によって若干の伸縮が認められるものの梁・桁行に共通する造営間尺が介在している可能性があげられる。特に1間を6.25尺とする柱間寸法が算出される点では（6.5尺×2間－0.5尺）÷2間＝6.25尺となって1間を6.5尺、柱径5寸とみた場合の2間に一致し、同様に7尺では（7.0尺×2間－0.5尺）÷2＝6.75尺として求められ、



第131図　Bg6・Bj12建物推定模式図

主要建物では1間を6.5尺、7.0尺等を基準柱間寸法としていることも考えられる。

一方、小規模建物では最小柱間となる(1)、(2)群が(2)、(8)、(18)、(22)建物4棟に認められる。共に主要建物の周辺にあり、特に(18)建物では(14)建物と同様の柱間によって構成されるなど主要建物に付属する建物が推定される。これより広い柱間では6.25尺、または6.30尺、7.00尺、7.50尺、8.00尺等ほゞ共通する換尺値が得られる。全体に小規模建物では不揃いな柱配置をなし、間数が少なく共通する換尺値が得られないが、主要建物に準ずる柱間を有するものと推定される。

二の郭では(7)建物がほゞ(4)～(6)の3群によって構成され、主要建物にほゞ類似する柱間寸法である。また、(4)、(6)建物2棟では①5.00尺、②8.00尺の共通する柱間となり、桁行方向は一の郭(24)建物のそれに共通している。また、三の郭では柱列が多く明確でないが、重複する(6)～(9)建物では①6.50尺、②7.50尺、③8.00尺等の柱間を含み、(11)建物を除いて(4)群以上の柱間となり、(1)、(2)群の柱間寸法は求め得ない。8.00尺以上の柱間は一の郭の(7)、(39)建物2棟に近似するものの対応する関係は共に明確でない。

5．柱配置と構造[注(3)]（第39表）

重複する建物が多く整然とした柱配置の特定できる建物は極めて限られ、確認できない柱穴も予想されるが、矩形となる柱配置を有する建物と方形に近い配置をなすものに分けられる。仮定される梁行、桁行実測値の総長によってみるならばその比率は前表によって梁行1に対して桁行が1.00～2.35に及び、大凡1.00～1.28と1.43～1.69の比率に集中する傾向と認められる。一の郭における主要な建物では(2)、(3)群に4棟が含まれ、その比率は1.10～1.16となって殆ど一定している。(6)群以上に含まれる5棟では1.53～1.69の4棟と1.88のやゝ大きい(17)建物1棟であり、特に(15)、(16)建物の2棟が近似している。また、(24)、(27)建物ではそれぞれ1.16、1.07の比率であり、1棟とみる場合は2.21となって(10)群に含まれる。しかし、主要建物がいずれも内部に柱配置を擁する多柱の建物である点で共通する建物である。小規模建物では更に分散する傾向があり、特に建物配置や棟方向による特徴は把握し得ない。二、三の郭では若干比率が小さく、二の郭では1.36～1.66、三の郭では1.02～1.72である。

柱数については多柱となる主要な建物で共通するものを含めて最大42となり、坪当り0.81～1.34である。(23)建物のみ1.72と推計される。梁・桁行方向の柱数によって得られる尺当りの割合では主要建物5棟で梁行0.19～0.20、桁行0.15～0.17となってそれぞれ共通する近似値となり、柱間に対応するものである。これに準ずる5棟では(24)、(27)建物を1棟としてみるならば梁行は0.22～0.25、桁行では0.16～0.18の3棟、0.28が2棟となる。

小規模建物では対応する2柱列による構成が大部分であり、内部柱穴を有するものや総柱配置となる建物が若干含まれる。坪当り柱数では0.62～2.01まで算出され、特に0.71～1.18に多

くほゞ70%に及ぶ。しかし、間柱の不明な建物が多く、全体ではこれより上回るものと推測される。主要な建物の周辺では比較的これに近似する東西棟が多いが、殆ど建物配置による変化は認められない。特に密度の高い1.50以上の柱数を有する建物では一の郭の(23)、(26)の2棟、二の郭の(4)、(6)、(7)の3棟があり、同様に荷重を負う建物も想定される。また、三の郭では重複する4棟が0.73～1.02となり、ほゞ一の郭に共通するものである。

柱配置によって推定される建物は共に直屋、あるいはこれに準ずる建物とみられ、主要建物とこれに付属する小規模な建物が想定される。主要な建物には5棟、これに準ずるものを加えて10棟前後と想定され、共に内部の柱間より狭小な柱間を外回りに有する点で共通している。その最小柱間を庇とみるならば1～3面庇の建物となり、更に(14)～(16)、(19)建物の4棟では東面に内部の柱間と等間、またはこれより広い柱間となる1間があり、これを加えるならば4面庇の建物となる。この主要4棟の建物における身舎の梁行は18.26～18.43尺、20.29～20.66尺を計り、共に3間である。基本となる間尺によってはそれぞれ18.75尺、20.25尺であり、1間を6.25尺、または6.75尺の相違に対応するものと解される。これに類似するものでは(23)建物の20.45尺、これより狭小となる(5)建物では16.25尺、最大は(17)建物を南北棟とする場合の22.09尺である。共に3間の梁行である。また、(24)、(27)建物では18.00尺2間となり、他と相違する構造といえる。従って主要な建物は例外的な柱配置をなす建物を除いて身舎の梁行は3間を基本とするものとみなされ、最大4面庇を有する建物といえる。もっとも典形的な柱配置は(14)建物における梁行3間、桁行4間に求められ、(15)、(16)、(19)建物では更に北1間を付加するものである。庇は3～4面の全長、または北・東ではその一部に取付く構造となる。

柱配置による間取りは桁行方向で2分、または3分されることが予想され、南側では梁行3間、桁行2間の座敷とみられる六間が主要建物に共通している。その南・西2面では土庇、あるいは縁が推定され、東面しては内部柱穴と同様の庇柱穴となって広縁、または前室も想定される。また、(19)建物では南面中央部の2柱穴によっては玄関も想定され、これによっては更に東面の出入口が類推される。そのほか遺物によっては主屋の後方に厨房が推定されるが、いずれも明確な間仕切りは把握し得ない。

主要建物の類例には柳田館遺跡のEg100建物[注(1)12]、鹿島館遺跡のKA－3建物[注(1)21]があり、共に共通する基本形を有する建物とみなされる。柱数の密度や柱配置によって板敷を有する建物とみなされ、柱間寸法によっては畳敷も推察されるものである。いずれも板、または茅葺き屋根の寄棟造が想定される。

小規模建物ではその大部分が対応する2柱列によって構成され、梁行2間となる建物を含めて切妻造とみなされる。柱数の密度や柱配置によっては櫓や仏堂等も推測されるが、家臣の建

物や納屋、厩屋等の諸施設を含めて柱配置による識別は明確でない。二の郭を含む建物では総柱となる柱配置をなす建物が含まれ、納屋、倉庫等の貯蔵施設が含まれているものとみられる。いずれも主屋と機能を異にする板葺きや茅葺き等の施設が想定されるが、今後の類例を加えて検討されるべき点である。

6．主屋と付属建物

主屋とその付属屋とみられる建物の重複は最大9棟に及ぶ。特に中央部以西のほゞ中心部に位置する主屋は5棟が重複し、更に同様の柱配置とみられる2棟を加えるならば7棟となる。また、この東西にあたる規模の大きい建物各1棟を合せるならば、主屋は9度に及ぶ建て替えが行われていることが想定される。共に構築の前後関係が判明する建物は確認できず、その具体的な移行の過程を把握し得ないが、最大規模の南北棟が重複する段階と東西に移動する時期が推定される。前者には規模の相違や別棟を擁する構成もあげられ、比較的整然とした柱配置がみられる点ではもっとも隆盛をなす時期の構築が予想される。東方に近接する(25)の東西棟は前者と共通する点も多く、近接する段階に位置付けられ、2棟とした(24)、(27)の南北棟は柱配置を異にして主屋のいずれかに伴う可能性があげられる。そのようにみるならば表・裏の関係にあって会所等の東別棟として機能分化する段階が推察される。また、やゝ北西に位置する(5)の1棟は棟方向や柱間寸法の相違によって前者と相異するものであり、検出状況によってはもっとも初期の構築である可能性が強い。これを縄張りに伴う変遷とみなすならば初期の郭形成期に該当し、これより若干東方へ移行することとなるが、拡張段階に比して同系統の主屋が確認できず、問題点が残る。

主屋に対応する小規模建物は周辺のほか、中央部以東に配置されるものではあるが、各主屋に伴う建物を抽出できるまでには至っていない。主要建物によって中央部以東を含む付属屋を割り出すならば主屋1棟当りの付属屋は4.11～5.57棟となり、確認されてない建物を考慮するならばこれを若干上回る棟数とみられるものである。これによっては主要建物の周辺に2～3棟と中央部以東に2～3棟の配置が推定される。北西の(5)を主屋とみると3棟の同一方向をなす小規模建物があり、中央部以西に他と若干方位を異にする2棟前後の建物が予想される。重複する主屋においても規模の相違や棟数の増減があるものの基本的には同様の対応関係となすものとみなされる。換言するならば、主郭の中央部よりやゝ西方に東面、または南面する主屋が置かれ、付属建物がこれをとり囲む形で屋敷地が設定される。更にこの前方には、通路を沿って諸施設が配置される構造であるといえる。また、主屋の占地は一の郭が全体の中枢部にあたるとみられる点で城主の居住する主殿に相当する建物と推定されるものである。

二、三の郭では主屋となる建物は判然としていないが、柱列によって一の郭における中規模程度の建物も類推され、この点では一の郭のそれを縮小する形の対応関係が考えられる。二の

郭では倉庫等が含まれる可能性があり、近接する建物との対応が推測される。また、三の郭においては中央部の4棟とこれより北側の柱列が対応するとみられるものである。特に三の郭では方向を異にして相前後する2段階が設定されるが、二、三の郭における建物との対応関係は明確でない。更に三の郭における建物が拡張期に伴うとみなす場合、これに共通する建物が改修以後の構築となり、現段階では一の郭の重複する主屋があたるものとみられる。しかし二の郭を含めて尚検討を要する点であり、また、関連する他の遺構についても同様である。

(5) **竪穴遺構**（第46表）

竪穴状遺構や柱穴によって推定されるものを含めて14棟の竪穴遺構が判明する。共に一の郭中央部以東の地山、あるいは旧堀を切って掘り込まれ、大部分は矩形、または方形状を呈するが、不整な台形状をなす2棟が含まれる。最大は(5)De6—Ⅰ遺構の東西8.76mである。更に張り出しを有するものには(5)、(9)、(10)、(13)の4遺構があり、壁際に掘り込みを有する(8)、(12)遺構が認められ、共に付設する出入口とみなされる。壁高は(10)Ed112遺構で0.82mを計るほか、いずれも0.42m以下となってその多くが切土をうけるものとみられる。壁際には周溝を有する(5)、(11)、(12)(13)の4遺構があり、共に柱穴間に浅く認められ、特に規模や形状に共通性はみいだし得ない。

柱穴は(12)、(14)の2遺構を除いて4隅、更に壁際に間柱を有するものが含まれる。しかし、柱穴群に重複して特定できない柱穴が多く、柱配置は必ずしも明確でない。次表による建物の規模は大部分梁行方向が1間であり、(5)、(9)、(11)の3遺構で2間とみられ、(11)遺構では3.77m（12.442尺）を計って最大である。桁行方向では1～3間であり、柱間寸法は2.15（7.096）～5.57m（18.382尺）で特に規則性は認められない。(5)遺構のみは7.85m（25.089尺）5間で例外的に大きく、面積は22.84㎡（6.92坪）と推計される。

梁・桁行の比率を求めると①1.00～1.09となる(8)、(9)、(13)の3棟、②1.42～1.48の(1)、(7)、(11)の3棟に分けられる。(7)、(11)の竪穴規模における比率に対しては1.31～1.36となり、同様に1.27～1.29となる(3)、(4)の2棟が近似値を示し、これに含まれるものとみなされる。更にこれより比率の大きい遺構では③1.70の(10)、2.70の(5)遺構があり、それぞれ竪穴規模による比率によっては2、3倍となるものと類推される。①は方形状を呈するものであり、(9)、(13)の2遺構は殆ど同規模である。②は2：3の比率であり、(1)、(7)の2遺構に共通性が認められる。

柱間寸法は不整をなすものが多く含まれるものの、その平均値によってみるならば、最小柱間は①1.08（3.564）～1.29m（4.241尺）、②1.42（4.695）～1.44m（4.741尺）、③1.74（5.754）～1.87m（6.161尺）に3分される。これより広い柱間はそれぞれ①～③の整数倍である。各建物における組合せは①最小柱間とその整数倍による(8)、(13)の2棟、以下同様に①＋②＝

第46表　竪穴遺構一覧表

No.	名称	竪穴規模 東西	竪穴規模 南北	壁高	建物規模	面積	柱間平均			建物方向	遺物その他	備考
1	Ca100	m	m 3.80	m 0.10	間 1・1	m 尺 m 尺 1.99(6.568) 2.83(9.323)	㎡ 坪 5.63(1.71)	m 尺 1.99(6.568)	m 尺 2.83(9.323)	m 尺	N26.7°W		柱穴群に重複
2	Ca103-I	3.40		0.11	1・2	1.74(5.754) 4.05(13.366)	7.05(2.14)	1.74(5.754)	2.25(7.426)		E27.2°S		〃
3	Ca103-II	3.16		0.10	1・1	2.21(7.294) 2.87(9.455)	6.34(1.92)		2.21(7.294)	2.87(9.455)	E27.4°S		〃
4	Ce103	4.16	3.18	0.33	(1)・2	2.89(9.538) 3.69(12.178)	10.66(3.23)	1.42(4.695)		3.69(12.178)	E24.6°S	灰	東西の間柱不明
5	De6-I	8.76	2.90	0.42	2・5	2.91(9.604) 7.85(25.908)	22.84(6.92)	1.44(4.741)	1.76(5.809)		E36.5°S	米、稗(?) 板、丸太材	張り出しつき
6	De6-II							1.43(4.719)	1.77(5.842)		E35.2°S		De6-I内の柱穴による
7	Dh106	3.14	2.28	0.20	1・1	2.00(6.601) 2.87(9.455)	5.74(1.74)		2.00(6.601)	2.87(9.455)	E38.0°S		Dh109に重複
8	Dh109	2.52	2.48	0.15	1・2	2.13(7.030) 2.15(7.096)	4.58(1.39)	1.08(3.564)	2.15(7.079)		E35.8°S	灰釉皿、砥、石、米、灰、炭化物	出入口状の掘り込みあり
9	Dj112	3.48	(3.23)	0.15	(2)・2	2.59(8.531) 2.83(9.340)	7.33(2.22)	1.16(3.820)	1.82(6.007)		E29.0°S	炭化物	張り出しつき 柱間不整
10	Ed112	3.10	6.55	0.82	1・3	3.22(10.619)5.55(18.300)	17.87(5.42)	0.83(2.740) 1.46(4.818)	1.87(6.161)	3.22(10.619)	N53.4°E		張り出しつき
11	Fb121	4.40	6.00	0.15	(2)・3	3.77(12.442)5.57(18.382)	21.00(6.36)	1.86(6.122)		3.77(12.442)	E25.0°S	鉄製品	
12	Gg118	(2.50)	(3.30)	0.13								溝に大麦	柱穴不明、出入口状掘り込みあり
13	Gh127	2.95	2.30	0.30	1・(2)	2.53(8.333) 2.63(8.663)	6.65(2.02)	1.29(4.241)	2.58(8.498)		N49.0°E	灰、炭化物	張り出しつき
14	Id106	2.10	2.20	0.14								土師器	柱穴不明 竪穴住居址

(1)、(3)、(7)の3棟、①+③=(2)、(9)の2棟、②+③=(4)、(5)、(6)、(10)の4棟、③とその倍数によるものは(11)の1棟と5群に分けられる。

建物方向では柱穴の不明な遺構を含めて①E24.6～29.0°Sを計る(2)、(3)、(4)、(9)、(11)の5棟、②E35.2～38.0°Sとなる(5)、(6)、(7)、(8)の4棟、③N49.0～53.4°Eの(10)、(13)の2棟、④N26.7°Wの(1)1棟となる。しかし、建物規模や柱間寸法に対応する関連では僅かに柱間寸法の③及びその整数倍の組合せとなる(2)、(4)、(9)、(11)の4棟、同様に②の柱間寸法を有する(5)、(6)、(7)の3棟にそれぞれ共通するほか特に有為性はみいだし得ない。共に他遺構との関連を含めた立地や建物の機能等によって制約されるものと解される。

柱穴の掘り方は小規模なものは比較的浅く、矩形をなす規模の大きい(9)、(11)遺構に大きく深い。特に(11)Fb121遺構では径、深さ共に最大となり、底面の比高は殆ど一定している。柱痕は判明するものが少ないが、堀立柱建物と同様、またはこれより大きい円柱と類推される。

床面は殆ど平坦をなし、踏み固められたとみられるものが多い。中央部に掘り込みを有するものは(11)、(13)の2遺構、灰や炭化物・焼土を形成するものは(8)、(9)、(13)の3遺構があり、(4)、(5)の2遺構では廃絶段階の灰や炭化材が堆積する。その他竈をもつ(14)遺構がある。

遺物を伴出するものは(5)、(8)、(12)の3遺構に穀類がある。(5)には更に灰釉皿片、砥石片が含まれ、(8)では檜の板材、欅の丸太材が認められる。(14)遺構には土師器が伴う。

重複による新旧関係の判明するものは(1)(2)→(3)、(6)→(5)、(7)→(8)であり、更に空堀の埋没状況によって(5)→(10)が類推される。建物規模や柱間寸法との関係では規模の大きいものから比較的小規模な建物へ、最小柱間寸法①より②の組合せを有する建物への移行が認められ、この点では(10)、(11)の2遺構は新しい段階の遺構とみなされる。

建物の性格や機能については(5)遺構が板材を擁する穀物貯蔵用の倉庫とみられ、(6)遺構はその前進建物と解される。共に初期の段階に位置付けられる。遺存状況によっては北辺の土留めを兼ねた厚さ1寸、幅3寸前後の腰板を並列させ、西辺を出入口とするものと推定される。(10)遺構は初期の空堀を切る拡張期の遺構であるが、規模や立地によって(5)遺構と同種の建物が類推される。そのほか、(8)遺構では遺物等によって居住用の建物とみることもできるが、穀類を伴う点では(12)遺構と含めて貯蔵用施設の可能性があげられる。(14)遺構は平安時代の竪穴住居跡である。

(14)遺構のほかは、遺物の伴出するものが少なく、郭形成以前の遺構が含まれる可能性があるが、前述する共通性によっては大部分掘立柱建物と同時期の建物遺構と解される。

郭に検出される竪穴遺構の類例には一戸城、つなぎⅢ遺跡[注(1)5]、柳田館[注(1)7]、古館[注(1)12]、丸子館[注(1)18]、岩崎城[注(1)22]等があり、住居、倉庫、納屋、家畜小屋等の施設が推定されている。[注(1)23]その性格については掘立柱建物に伴う付属施設とみとめられる柳田館の例があり、郭内における占地や他施設と

の関連についても更に検討を要する問題と考えられる。

(6) 焼土遺構

焼土、炭化物を形成する遺構は竪穴遺構に伴うものを除いて一の郭5、二の郭3、三の郭6の合せて14遺構である。このうち一の郭の2遺構と三の郭の4遺構に掘り込みが認められる。いずれも上部が失なわれているとみられ、性格の推定できるものは少ない。

一の郭の2遺構は南北方向に長軸を有する竈状を呈する。最大規模は長さ2.73m、幅0.75mを計り、円形に近い燃焼部とこれに続く焚口から舟底状に掘り込まれ、煙道は共に刳り貫かれる。焚口は2基で南北に相対し、南辺に近い1基は煙道方向が若干湾曲している。遺物はいずれも認められず、その性格や使用については明確でないが、柳田館[注(1)12]、鹿島館[注(1)21]、北館遺跡[注(4)]等の竈状遺構に類似し、建物構築段階における使用が推定されるものである。

三の郭の4遺構は他の掘り込みの判明しない2焼土を含めて東西15m、南北5mの範囲にほゞ限られる分布を示している。しかし、その性格を推測できる資料は得られず、その時期も判明していない。僅かに三の郭出土する微量の鉱滓があり、あるいは関連する遺構であろうか。

焼土遺構に近接する遺構では柱穴群のほか、一の郭南辺よりの1基には砂溜遺構が認められる。砂溜は二の郭のそれと同様の川砂であるが、直接的に関連する遺構とみなす根拠はみいだし得ず、上部施設等についても判然としていない。

(7) 井戸と土壙

用水溜を含む土壙は一の郭に6、二の郭に1、鞍部1の合せて8基である。そのうち、井戸と判断されるものは現状で認められる2基を合せて4基である。二の郭の1基についてもその可能性があげられる。いずれも円形を呈する地山井筒であり、郭内のそれは極めて浅く、小規模である。埋没する3基では径0.74～1.48m、深さ0.50～0.58mである。しかし、いずれも湧水が強く、特に一の郭では水脈が走って渇水の可能性が低いとみられる。上部施設では一の郭に並列する2基に主要な建物が近接し、特に東側井戸では(27)建物に平行する覆屋が想定され、栗材の出土によって板井や上部構造を伴うことも考えられる。

鞍部の井戸は箇を有してもっとも規模が大きい。3郭を含めて補給可能なほど湧水量が豊富であり、三の郭に井戸が認められていない点では、これを水源としているものとみなされ、少なくとも郭の拡張期には開削されているものと推定される。

その他の土壙は一の郭東方にフラスコ状の土壙があり、小規模な1基は登り道に伴う切土をうけてこれに先行する土壙とみなされる。しかし、いずれも時期や性格については不明である。

(8) 砂溜遺構とその他の遺構

川砂を擁する柱穴状の小土壙は一の郭南辺および二の郭西辺の２基である。二の郭では旧堀埋没以後の整地面に認められ、改修以後に位置付けられるものである。しかし、その用途については判明せず、焼土遺構に近接するものの直接的な関連はみいだし得ない。類例をまって検討される遺構である。

その他の遺構では溝状土壙があり、一の郭に３、三の郭に６遺構がある。一の郭では特に上層の切土にあって浅くなるが、一の郭の１基がやゝ長いほかは2.80～3.30mの直線状を呈し、幅0.28～0.29m、最深1.22mを計る。共に底部幅が狭小となり、断面はＶ字状をなす。いずれも遺物は認められず、時期は明確でないが、郭形成以前の遺構とみなされ、大瀬川Ｂ遺跡を中心とする縄文時代に伴う可能性が強い。

注（１）　岩手県内の中・近世城館発掘調査一覧表
（２）　一乗谷朝倉氏遺跡Ⅰ、Ⅱ　足羽町教育委員会（1969、1971）
（３）　構造については東北大学教授佐藤巧氏御教示による（1979、1980）
（４）　東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ　岩手県教育委員会（1980）

岩手県内の中・近世城館発掘調査一覧表

56．3．31現在

No.	城館遺跡	所在地	規模(東西・南北)	調査面積	調査期間	調査理由	検出遺構	出土遺物	報告書等
1	金田一城（上館）	二戸市金田一字舘	100×250m	3,000㎡	53.10.1 ～53.10.5	墓地造成	空堀	古銭ほか	二戸市教育委員会調査未報告
2	佐々木館（沢内B）	二戸市米沢字家の上	250×250	600	53.5.8 ～53.6.26	バイパス道建設	空堀、柵列、竪穴住居	陶器、鉄製品	二戸市沢内B遺跡（54.3） 日本城郭大系2（55.7）
3	石切所館？（上里）	二戸市石切所字上里沢	150× 70	10,000	54.4.8 ～54.10.8	〃	空堀、竪穴住居、溝		岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（55.3） 日本城郭大系2（55.7）
4	蒼前館（大洞）	二戸市石切所字晴山	50× 50	4,000	54.4.9 ～54.6.20	〃	空堀		岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（55.3）
5	一戸城	二戸郡一戸町字北館	300×600	7,460	54.6.3 ～54.12.14 55.3.13 ～55.3.31	バイパス道建設	堀、掘立柱建物、竪穴状遺構 墓壙	陶磁器、鉄製品、石製品、木製品、古銭	日本城郭大系2（55.7） 東北地方北部の中世城郭発表資料（56.1）
6	上の山舘	二戸郡安代町上の山		1,500	55.9.24 ～55.11.15	東北自動車道建設	空堀、掘立柱建物、竪穴住居	陶磁器、人骨	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（56.3）
7	湯の館（つなぎ館）	盛岡市繋字清水端36	100×150	8,000	52.4.18 ～52.12.7	御所ダム建設	溝、門、道路状遺構、掘立柱建物、竪穴住居、土壙、墓地	陶磁器、鉄器、古銭	御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書（55.3） 雫石町史（54.1）　日本城郭大系2（55.7）
8	太田館（館）	盛岡市上太田松の木	100×100	1,500	52.4.13 ～52.6.28	墓地拡張	段状遺構、柱穴群	磁器	館遺跡（55.3）
9	仁反田館	盛岡市川目第14地割	240×120	1,200	49.2.27 ～49.3.13	高令者対策研究事業団用地造成	空堀、土塁		岩手県教育委員会文化課調査未報告
					49.10 ～49.12				〃
					50.3				盛岡市教育委員会調査未報告
10	高田館（高田）	紫波郡矢巾町大字高田第12地割	200×200	20,723	52.12.9 ～52.12.23	宅地造成	柱穴群	陶器	高田遺跡緊急発掘調査概報（52.12）
11	高水寺城	紫波郡紫波町二日町字古館179	550×700	240	48.11.10 ～48.11.17	畑地改良	礎石	陶器、鉄製品、古銭	日本城郭大系2（55.7） 二日町古館遺跡第1次発掘調査報告書（51．3）
		同 46－3			49.4.22 ～49.4.29	学術調査	柱穴	鉄製品	同2次発掘調査報告書（51.3）
					53.4ほか		柱穴群、池跡	陶器、鉄製品、木製品、古銭	紫波町教育委員会未報告
12	片寄城（柳田館）	紫波郡紫波町片寄字中平54ほか	400×300	13,600	50.4.14 ～51.7.23	東北自動車道建設	空堀、土塁、郭、門、溝、掘立柱建物、竪穴遺構、竈状遺構、土壙ほか	陶磁器、金属製品、石製品、木製品、古銭、炭化穀類ほか	東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ（55.3） 日本城郭大系2（55.7）
13	堉館	紫波郡紫波町片寄字諏立11ほか	200×250	14,000	50.10.1 ～51.10.2	〃	土塁、溝、柱穴群		東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ（55.3） 日本城郭大系2（55.7）
14	大瀬川館（大瀬川C）	稗貫郡石鳥谷町大瀬川第8地割166ほか	300×400	23,000	49.6.5 ～49.11.9	〃	空堀、土塁、郭、門、溝、掘立柱建物、竪穴遺構、竈状遺構、井戸ほか	陶磁器、金属製品、石製品、古銭、炭化穀類	北奥古代文化第9号（52.8） 花巻市文化財調査報告書第2集（51.3） 石鳥谷町史上巻（54.3）日本城郭大系2（55.7）
15	小瀬川館	花巻市小瀬川	100×250		51.5.12 ～51.6.15	宅地造成	堀、土塁、掘立柱建物	陶磁器	岩手県教育委員会文化課調査未報告
16	円満寺城	花巻市円万寺		6,600	41.8.3 ～41.8.12	浄水場建設	礎石建物、溝	鉄製品、石製品	円満寺城の発掘（42.11）
17	本館	花巻市東宮野目第13地割本館105～110	400×200		40.8.27 ～40.8.30	宅地造成？		陶器、鉄製品	本館発掘調査概報（40.8）
18	中館（古館）	花巻市中根字古館58ほか	100×200	3,000	47.10.6 ～47.12.28	東北自動車道建設	堀、土塁、掘立柱建物、竪穴遺構	鉄製品、古銭、炭化穀類、種子	東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ（56.3） 日本城郭大系2（55.7）
19	二子城（坊館）（秋葉山）	北上市二子町	100×500		52.4.4 ～52.11.30	工業用水路			二子城坊館遺跡調査報告書（52.11）
					52.10.1 ～52.11.10	給水タンク建設	竪穴状遺構、墳墓		二子城秋葉山遺跡調査概報（53．1）
20	斉羽場城	北上市稲瀬町160の4			46.9.10 ～46.9.20	道路改良	柱穴群		斉羽場城発掘調査報告書（51）
21	鹿島館	北上市鬼柳町字上鬼柳	450×200		46.6.10 ～47.6.16	砂利採取	土塁、溝、掘立柱建物、竈状遺構	陶磁器、古銭	鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ（50.3） 日本城郭大系2（55.7）
		同第5地割128ほか		8,000	47.5. ～47.6.1		空堀、土塁、掘立柱建物、半地下式建物	陶磁器、金属製品、古銭	鹿島館遺跡調査報告書Ⅱ（50.3）
22	丸子館	北上市鬼柳町字下鬼柳第15地割79ほか	280×220	2,532	47.7.1 ～47.7.18	バイパス道建設	柱穴群、半地下式建物、井戸状、楕状遺構	陶器、鉄製品、古銭	北上市丸子館調査報告書（48.3） 日本城郭大系2（55.7）
		同笊渕		1,200	53.8～53.9 54.6.1～11.29	砂利採取	空堀、掘立柱建物、竪穴遺構	陶磁器、金属製品、古銭	東北地方北部の中世城郭発表資料（56.1）
23	岩崎城（梅の木）	和賀郡和賀町岩崎	600×300		41.8.18 ～41.8.22		竪穴遺構	陶磁器、鉄製品、古銭、炭化米	岩崎城の発掘（42.6）
		同 岩崎18の89－93		456	46.6.25 ～46.7.1	公民館建設	土塁、竪穴遺構、積石	陶磁器、鉄製品、石製品	岩崎城址発掘調査略報（47.1） 日本城郭大系2（55.7）
		同岩崎字梅の木		5,800	50.4.14 ～50.5.31	東北自動車道建設による土取り	空堀、溝、土壙	陶磁器、鉄製品	東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅸ（56.3）
24	大林城（館山）	胆沢郡金崎町	530×320		54.6.18 ～54.7.31	厚生年金福祉施設建設	掘立柱建物、井戸、焼土遺構	陶磁器、鉄製品、石製品、古銭	岩手県教育委員会文化課調査未報告
		同町永栄字館山		18,385	55.4.7 ～55.10.31	県立青少年の家建設	堀、掘立柱建物、竪穴住居、井戸、土壙	陶磁器、金属製品、木製品、古銭	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（56.3）
25	鈴ヶ沢館（鈴ヶ沢）	一関市萩荘鈴ヶ沢102の1	120× 90	2,500	51.5.11 ～51.9.19	東北自動車道建設	郭、掘立柱建物		東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ（55.3）
26	折戸館	東磐井郡千厩町千厩下駒場	300×200	1,200	55.8.4 ～55.8.9	遊園地建設	空堀、柱穴群	陶磁器、古銭	千厩町教育委員会調査未報告
27	鍋倉城	遠野市遠野町第6地割73～8イ	400×300	789	46.9.22 ～46.9.28	墓地造成	土壙、石敷、階段、礎石、柱穴群	陶磁器、鉄製品、石製品、古銭	遠野鍋倉城二の丸発掘調査報告書（46.1）
28	金浜館	宮古市金浜	150×120	（7,200）	55.5.12 ～55.11.23	老人福祉センター	空堀、掘立柱建物	陶磁器、鉄製品、古銭	東北地方北部の中世城郭発表資料（56.1）

未報告分については発掘担当者等による御教示を得たが、今後補正されるものである。

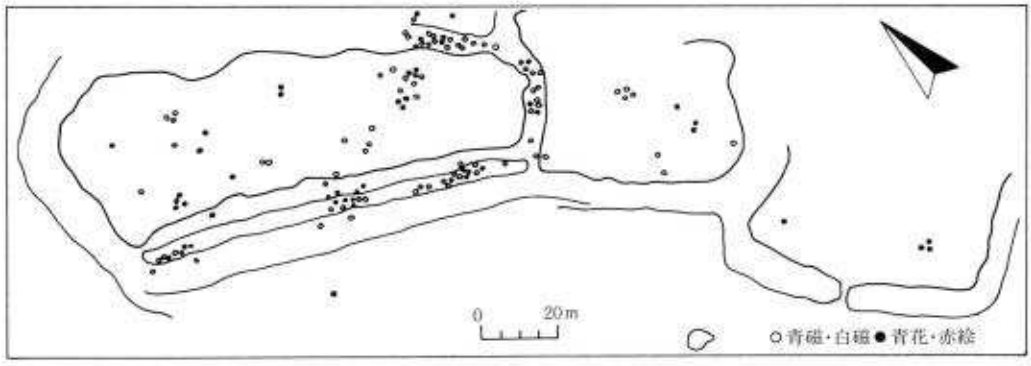
3．遺物

(1) 分布（第132、133図）

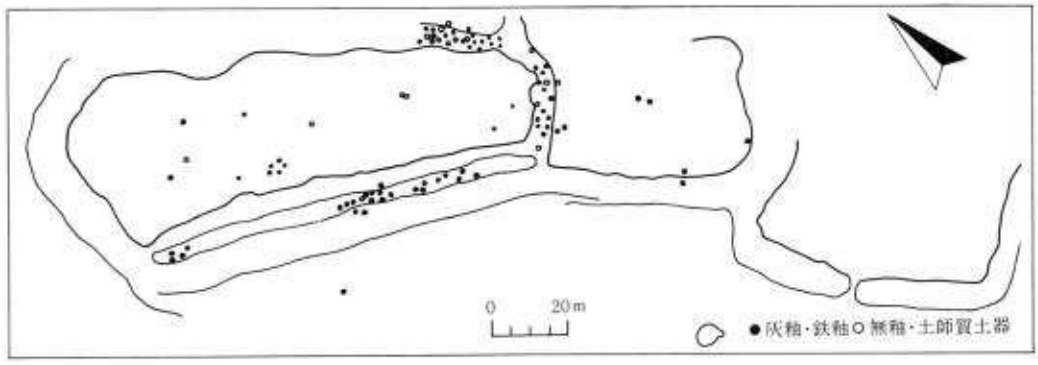
660点余りに及ぶ遺物は北西辺の塁壕や南辺に続く鞍部を除いてほゞ調査区域全域に分布している。特に一の郭とこれを画する3～5号堀に集中して全体の80.8%を占め、極めて偏在する分布が認められる。

塁壕では3～5号堀に全体の57.7%が含まれ、他は2号堀の1.6%である。1・6・7・8号堀では皆無、または数点に限られる。空堀開削以前の遺物を除いては3～5号堀で57.9%となり、その53.5%が4号堀に含まれる。また、三の郭を画する7、8号堀では皆無である。郭別によっては一の郭より順に23.3、7.9、6.8%となり、二、三の郭に著しく減少する。郭形成以前の遺物を除いては更にこの傾向は顕著となり、一～三の郭は順に25.9、8.9、4.6%となる。出土比率によって一の郭と3～5号堀、二、三の郭と2、6～8号堀が対応する関係とみなされ、遺構、特に掘立柱建物の配置にほゞ対応する点では3～5号堀の大部分が一の郭に伴う遺物と解される。殊にも磁器では同一個体の破片が一の郭より3～5号堀に及び、一の郭内では南・北二辺に分散して認められる。また、空堀の覆土が共に人為的な混土層を形成していることに符合するものである。

遺物の種類別による分布では全体に同様の傾向を示すが、郭によっては若干の相違が認めら



第132図　舶載磁器出土分布図



第133図　陶器・土師質土器出土分布図

れる。青磁、白磁、青花、赤絵の磁器では三の郭が青花のみであり、赤絵は一の郭に限られる。灰釉・鉄釉陶器や土師質土器等においては鉄釉陶器が一の郭及び3・4号堀に限られ、土師質土器は三の郭に出土していない。比較的出土量の少ない遺物は金属製品や石製品、穀類の出土量を含めて殆ど同様に分布し、共通する傾向にあるが、鉄滓や土器、石器では特に郭や塁壕の構築に対応する分布は認められない。

(2) **種類**（第47表）

発見された遺物は大別して陶磁器、土器、金属製品、石製品、石器、動・植物遺体等である。完形品は古銭など金属製品に若干含まれるが、大部分は小破片であり、器形の判明しないものが多い。

郭形成期に前後する遺物や不明なものを除いて用途別に分類するならば、次の10種に大別される。破片数によってそれぞれの概数を求めるならば、個体数を推定しても食膳用具がもっとも多量となり、調理用具や貯蔵用具が極めて低い比率を示すものである。

武器では小刀、小柄、鉄鏃の鉄製品4点、笄、鐔の銅製品3点であり、用途不明の鉄製品を考慮しても比較的少ない。鉄鏃1点が三の郭に、他はいずれも一の郭に伴う遺物とみなされる。出土量によっては少なくとも戦闘による落城廃絶している可能性が低いといえよう。

建築用材では円柱とみられる柱根があり、栗、桧が混在する。竪穴遺構では楢の炭化板材、欅の丸太材が含まれる。そのほか、雑木を含む割材が井戸の筒材として含まれる。鉄製品では斧、楔、釘合せて20点があり、不明鉄製品の中には更に木工用金具に含まれるものも推定される。楔状の鉄製品は先端に反返りとみられる歪みがあり、頭部ほど広い板状をなす。大小2種があり、長さは3寸、2寸と推定される。鉄釘は皆折釘がもっとも多く、切釘、角釘、両釘とみられるものが含まれる。頭部を叩き伸ばして折り曲げる皆折釘は長さ1.5～2寸とみられ、切釘は1寸である。

日常用具は別項に共通するものを含めて7種25点である。土師質土器はロクロ成形痕やハケ目様の調整が認められる良質の胎土をなし、灯明皿等の用途が推定される。鉄製品の毛抜き、火打鉄等は柳田館遺跡出土のそれに類似するものである。石製品は砥石、手洗鉢があり、共に二次火熱をうけるものが目立つ。土師質土器、砥石、手洗鉢各1点が二の郭の中央部以東に出土するほかいずれも一の郭とこれを画する空堀に含まれ、居住の中心は一の郭と知られる。

第47表　用途別遺物一覧表

No.	種別	遺物名	数量
1	武器	小刀、小柄、笄、鐔、鉄鏃	7
2	木工具 建築材	鉄斧、楔、鉄釘 柱根、板材、丸太材	20 36
3	日常用具等	香炉、灯明皿、毛抜、火打鉄、火箸、砥石、手洗鉢	25
4	文房具	水滴	2
5	調理具	鍋、穀磨臼	6
6	食膳具	碗、皿、盃	263
7	茶器	茶碗、茶入れ、茶臼	11
8	貯蔵具	甕	3
9	食料	米、大小麦、稗、小豆、蕎麦、桃	(8)
10	銭貨	中国・朝鮮の渡来銭、寛永通寶	23

文具としては水滴の同一個体２点であり、主要な建物に近接して出土する点で建物内における使用が推定される。

調理用具は鍋と推定される鋳造鉄の断片があり、３点中２点が三の郭に出土する。その他穀磨臼とみられる３点があり、礫岩のもの２点が含まれる。

食膳用具は陶磁器の大部分がこれにあたり、白磁盃１点が含まれるほか判明するものはすべて碗と皿である。磁器では青磁、白磁、青花、赤絵があり、赤絵を除く破片数の比率では1：２：３で青花がもっとも多い。陶器では灰釉の碗・皿があり、白磁とほぼ同量である。灰釉を含む碗・皿は１：３の割合となる。

碗は青・白磁が極めて少なく、大部分が青花である。青磁碗は口径14.0～16.0cmと推計され白磁碗では高台径5.5cmのものが含まれる。青花は口径15.0～16.0cmであるが、高台径は3.4～5.4cm、8.5～9.2cmと２分される。また、灰釉碗は口径11.6cm、高台径6.2cmと推計され、蓮弁文を有して青磁碗を模倣するものが含まれる。

皿は青磁、白磁、青花、赤絵の皿と灰釉皿である。青磁皿は共に稜花皿とみられ、口径12.0～14.0cm、高台径5.1cm、器高3.1cmのものが含まれる。白磁皿ではすべて薄手の端反り皿であり、砂高台とみられる。口径は11.0～14.0cm、高台径5.5～9.0cmとなり、大小が混在する。器高は3.0～3.5cmである。青花皿は端反りの皿と内彎するとみられる碁笥底の皿若干である。端反り皿の口径はほゞ３分され、9.0～9.6cm、10.1～13.2cm、14.0～15.0cmと推計され、12cm前後に集中する。高台径では同様に4.8～5.4cm、6.4～7.6cm、8.0～9.6cmまで認められ、器高は2.2cmのものが含まれる。赤絵は青花の最大口径に含まれるが、高台径は7.5cmで必ずしも対応するものではない。灰釉皿はすべて端反りの小皿とみられ、口径10.0～12.6cm、高台径5.5～6.6でほゞ一定し、器高は2.4～3.3cmである。

いずれも細片で二次火熱をうけて釉薬の変質するものが含まれる。特に一の郭及び３～５号堀に分布する点で一の郭の火災焼失に伴う可能性が強く、他の遺物と同様被災以後の造成による移動が推定され、食膳用具の大部分は陶磁器、特に舶載磁によっているものと把握される。

茶器は茶碗５点、茶入れ１点が含まれる。碗は小さいくびれを有する口縁部であり、口径13.0cm前後と推計される。そのほか、茶臼とみられる５点が含まれる。茶臼の断片が２号堀に出土するほかはいずれも一の郭及び３～５号堀に限られる。この点では一の郭における茶室の存在も推定されるものである。

食料では穀類、果実等があり、籾米のほか大麦、小麦、小豆が比較的多い。桃が主要建物の柱穴に出土するほか、穀類は一～三の郭に及んでいる。４号堀を除いては共に建物遺構、またはこれに近接して分布し、特に腰郭の竪穴遺構では貯蔵される穀類とみられ、籾米のほか空堀に流入する稗が想定される。これによって主たる食料は米とみなされ、穀類の消費、あるいは貯蔵が各郭に分散しているといえる。

貨幣は中国、朝鮮の渡来銭のほか、寛永通寶が含まれる。渡来銭では明銭がもっとも多く、舶載磁器の流入と共通するものであり、寛永通寶は若干の伊万里系の磁器に対応するものとみられる。

(3) 時期

もっとも出土量の多い陶磁器によってみるならば、その大部分は中世後半の城館遺跡に普遍的に認められるものである。舶載磁器では優品は含まれず、所謂日常雑器が主体をなす。青磁では簡略化された蓮弁文碗と稜花皿、薄手の端反りをなす白磁皿、青花・五彩は主として端反りの皿であるが、対称的に端反りの碗は殆ど含まれない等の特徴があげられる。更に青花の文様構成を加えて室町期後半より桃山期に共通するものであり、一乗谷朝倉氏遺跡[注(1)]や根来寺坊院跡[注(2)]等に出土する明代のそれに類似している。青花皿のうち端反り皿が内彎気味に立ち上がる型式に先行するとみてもほゞ同時期の使用が推定され、明中期の16世紀代に位置付けられる。季輝丙氏によれば竜泉窯系の青磁、景徳鎮系の白磁、青花、五彩が含まれ、嘉靖より万暦期にかかる民窯製品とされる[注(3)]。これに従うならば主として16世紀中葉より後半にかかる使用が推定されるものである。

国内産の陶器については主として灰釉・鉄釉陶器であり、美濃産とみなされる。灰釉陶器の大部分は口縁部の外反する小皿であり、施釉は全面に施される。内面底部には菊や梅の印花を有するものが含まれる。高台は著しく低い削り出し仕上げであり、高台内に輪トチンの痕跡を残す。碗では線刻状蓮弁文の灰釉碗と小さいくびれの口縁部をもち、高台の内ぞりとされる天目茶碗が含まれる。柳田館遺跡[注(4) 4]のそれに比して菊皿や内彎気味に立ちあがる小皿が含まれていないが殆ど同様の特徴がみられ、美濃大窯期に位置付けられる。柳田館の灰釉陶器には妙土窯址の出土品に酷似する皿類が含まれている点で上限は大窯II期[注(5)]と把えられ、ほゞこれに近接する段階が類推される。

従って舶載磁器と併用されているとみられる点では若干の隔たりがあるが、ほゞ16世紀中頃の中心とする時期が想定され、これより16世紀後半に及んでいるものとみることができる。

県内における陶磁器の類例には柳田館遺跡[注(4) 4]のほか、岩崎城[注(4) 7]があり、16世紀代とみられる舶載磁器では一戸城[注(4) 1]、館山遺跡[注(4) 11]、金浜館[注(4) 17]など広く分布しており、今後流通経路を含めて検討を要するものである。

その他の遺物は大部分これと同時期の使用が推定されるものである。これより以後の遺物では伊万里系の筒形碗、磁器化する灰釉碗、寛永通寶があるが、灰釉碗が幕末期とみられる点では廃城以後の使用とみなされるものである。また、築城以前の遺物では土器、石器のほか、銅製の蓋があり、隣接する大瀬川B遺跡と同時期の遺物が含まれている可能性もあげられる。

注(1) 一乗谷朝倉氏遺跡III 福井県教育委員会 (1972)
(2) 根来寺坊院跡発掘調査概報III 和歌山県教育委員会 (1980)
(3) 林謙作氏を介する御教示による (1974) (4) 岩手県内出土の舶載陶磁器一覧表
(5) 美濃の古陶 光琳社 (1976)、名古屋大学教授猪崎彰一氏御教示による (1980)

岩手県内出土の舶載陶磁器一覧表

56．3．31現在

No.	遺跡名	所在地	青磁	白磁	染付	赤絵	天目	時代	報告書等
1	一戸城	二戸郡一戸町北館	( ) 碗、皿	( ) 皿	( ) 皿			明 15～16C	東北地方北部の中世城郭発表資料（56.1）
2	つなぎⅢ	盛岡市繋字清水端	1 碗	1 碗			1 碗	明 15	御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書（55.3）
3	久保屋敷	紫波郡矢巾町室岡字久保			1 皿			明 16	東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ（54.3）
4	柳田館	紫波郡紫波町片寄字中平	137 碗、皿、香炉	220 碗、皿、盃	455 碗、皿、盃			明 16	東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ（55.3）
5	大瀬川C	稗貫郡石鳥谷町大瀬川第8地割	30 碗、皿	63 碗、皿、盃	104 碗、皿	3 皿		明 16	同上Ⅷ（56.3）
6	丹内山神社経塚	和賀郡東和町谷内第1地割1		1 壺				宋 12	東和町丹内山神社経塚発掘調査報告書（35－）
7	岩崎城	和賀郡和賀町岩崎			( ) 皿			明 16	岩崎城の発堀（42.6）
8	鹿島館	北上市鬼柳字宿			1～			明 15～16	鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ（50.3）
9	丸子館	北上市鬼柳町字下鬼柳	( ) 皿	( ) 皿				元 14～15	東北地方北部の中世城郭発表資料（56.1）
10	極楽寺	北上市稲瀬	1 ( )					宋 12	極楽寺遺跡発掘報告書（47.8）
11	館山	胆沢郡金ヶ崎町大字永栄字館山	(4) 碗、皿			1 碗		明 15～16	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（56.3）
12	膳性	水沢市佐倉河字膳性	(1) 碗	(2) 碗、梅瓶				宋元 13～14	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（56.3）
13	観自在王院	西磐井郡平泉町	1/1 ( )	2 ( )				北宋南宋 12	平泉毛越寺と観自在王院の研究（36.3）
14	毛越寺	西磐井郡平泉町		1 ( )				南宋 12	同 上（36.3）
15	毛越A	西磐井郡平泉町毛越173	11 碗	7 碗、壺				宋 12～13	東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ（55.3）
16	鈴沢	西磐井郡平泉町		1 壺				宋 13	岩手県埋蔵文化財センター所蔵未報告
17	金浜館	宮古市金浜	( ) 皿		( ) 皿			明 15～16	東北地方北部の中世城郭発表資料（56.1）

（そのほか、鬼柳西裏に明代の青磁片、高水寺城に明代の天目片がある。数量はNo.6を除いて破片数。( )は未確認、または不明。

4．むすび

大瀬川C遺跡は西方山地に続く丘陵に占地し、北西を葛丸川によって画される急崖を利して構築される城館遺跡である。大凡東西300m、南北400mに渡り、複郭によって構成される当地方の代表的な平山城である。調査区域は東西に連なる3郭で主郭を含む中枢部分にあたる。

現状における縄張りは連郭状の3郭に東・西の郭が外郭線として配置され、全体として梯郭状をなす。各郭は塁壕によって守備され、主郭では北辺の急崖に続く西辺の二重堀をもって背後を強化するものである。また、郭の開口部には架橋、または柵門をもって守護し、段状をなして続く郭と相俟って主郭の防衛には一体となる有機的な防禦体制が伺えるものといえる。

これに先行する築城期の縄張りは主として埋没する塁壕によって推定され、もっとも高位となる2郭の連郭とみなされる。東面を大手として同様の守備をなし、二の郭北東辺を広く外郭線とするものである。拡張期にはこれをほゞ踏襲して整備され、更に三の郭を付加するものであり、未調査区域の東・西の郭についても同様に類推される。

郭の形成は共に旧地形に沿って東西を限り、切土及び盛土によって造成される。郭には掘立柱建物と竈状遺構、貯水施設を有し、特に掘立柱建物では城主の居住する主殿と周辺の付属屋と推定される。その配置は主郭中央部の西偏に主殿が位置し、その周辺に付属建物、更に中央部以西には通路に沿って各種建物施設が配される。その具体的な変遷については必ずしも明確でないが、基本的には一貫した配置計画として把えられる。建物の重複によっては9～11次に渡る普請が推定され、拡張される郭によって対応関係を求めるならば、主として改修以後の重複と考えられ、縄張りの著しい変化が認められない点で継続して占地されるものと解される。

遺物によっては築・廃城に前後する若干の遺物を除いて中世後半の遺物である。主要な遺物は明代中期の舶載磁器を含む陶磁器であり、その隆盛期は16世紀中葉を大きく隔たらない時期と把えられるものである。

この点では稗貫氏家臣の築城のほか、永禄年中（1558～1570）に稗貫氏の鳥谷ヶ城転居が想起され、更に天正晩年の城主瀬川隠岐をもって廃城されている可能性が考えられる。稗貫氏の居城と永禄年中の移転については、改修以後の縄張りによってその可能性を否定できるものではないが、当初の居城とされる瀬川城や十八ヶ城の調査を待って解明される課題であり、現段階では期波氏の攻略をうける弘治2年（1556）には既に築城されているものとみられ、「稗貫家全盛時に斯波氏の押えの城」とみる境界守備の性格が強く、瀬川氏の居住が推定される。そのようにみるならば大瀬川館は天正期までの存続が考えられ、秀吉による奥州仕置を境に稗貫氏滅亡に伴う廃絶の可能性が強い。天正20年（1590）の「諸城書上」に大瀬川館を留めていない点に符合し、天正末期における廃城とみても矛盾するものではない。しかし、その間の経過や家臣団を含む具体的な様相については、未調査区域を含めて今後検討を要する問題である。

付章　遺物の分析と鑑定

1．陶磁器の胎土分析

岩手県工業試験場

1．試料（第1表）

分析試料は次の陶磁器5点である。

第1表　分　析　試　料

No	試料名	器種	部位	特徴	出土地点	遺構・層位	登録No.	備考
1	青磁	皿	体部	稜花皿とみられる	D a 18	3号堀 II	9	明代の粗製磁器
2	白磁	〃	底部	砂高台を有する	C h 27	二の郭 II	11	〃
3	青花	〃	体部	唐草文は暗い発色で，光沢が弱い	D h 3	3号堀 I	75	〃
4	灰釉陶器	〃	体－底部	端反り口縁の小皿である	D	4号堀 II	40	美濃
5	鉄釉陶器	碗	口縁－体部	小さいくびれを有する	D c 130	〃 〃	7	〃

2．化学分析値ならびにX線回折の結果（第2、3表）

第2表　陶磁器素地の定量分析結果

No	試料名	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	CaO	MgO	Na_2O	K_2O	Total
1	青磁 皿	74.46%	18.20%	3.61 %	0.47 %	−0.05%	0.02 %	0.22 %	2.72 %	99.75%
2	白磁 皿	74.42	19.49	1.80	0.18	0.29	0.09	1.13	3.49	100.89
3	青花 皿	72.59	20.99	1.64	0.21	−0.05	0.10	0.19	5.06	100.83
4	灰釉 皿	77.37	18.98	1.31	0.55	−0.05	0.11	0.14	1.47	99.98
5	鉄釉 碗	74.98	18.52	2.79	0.78	−0.05	0.39	0.16	2.53	100.20

陶磁器素地のうち、(1)青磁、(4)灰釉陶器、(5)鉄釉陶器の3点は、SiO_2/ Al_2O_3比が(2)白磁、(3)青花に比べて大きく、クリストバライトが検出される。これに対して(2)白磁、(3)青花ではクリストバライトが見い出されない。また、(2)白磁、(3)青花は前者に比べてアルカリ金属酸化物の含有量が多い。

以上によって(2)白磁、(3)青花は、長石や陶石の配合が多い原料を用いて焼成したと思われ、相当に磁器化が進んでいる。

第3表　陶磁器素地のX線回折法による分析結果

No	試料名	検出鉱物 M	Q	C
1	青磁 皿	+	++	++
2	白磁 皿	+	++	
3	青花 皿	+	++	
4	灰釉 皿	++	++	+
5	鉄釉 碗	+	++	++

備考

M；Mullite（$3Al_2O_3\ 2SiO_2$）

Q；α - Quartz（SiO_2）.

C；α - Cristobalite（SiO_2）

検出鉱物については最強線の大きさの順位を+++、++、+とし、おおよその目安とした。

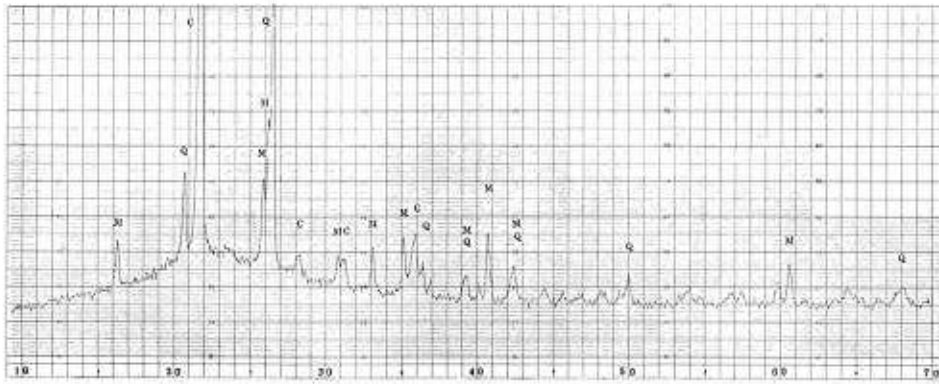
X線回折測定条件

対陰極；Cu　　フィルター；Ni　　電圧；30 Kv　　電流；16mA

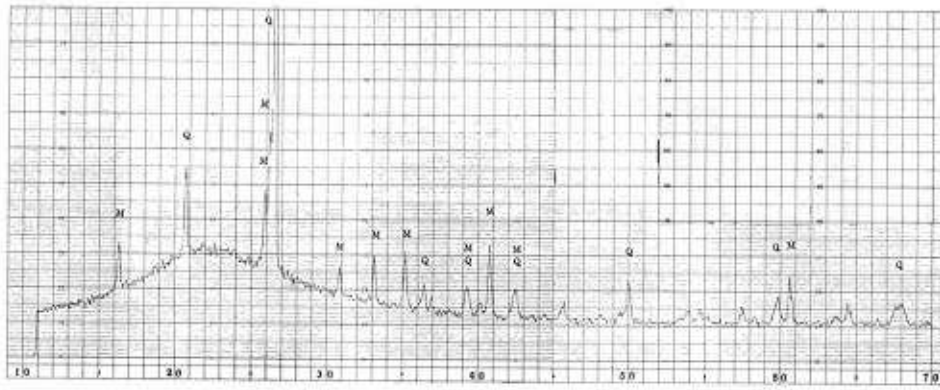
時定数；1 sec.　カウントフルスケール；2000 cps　　検出器；シンチレーション計数管

実施期日　55.12.2～3

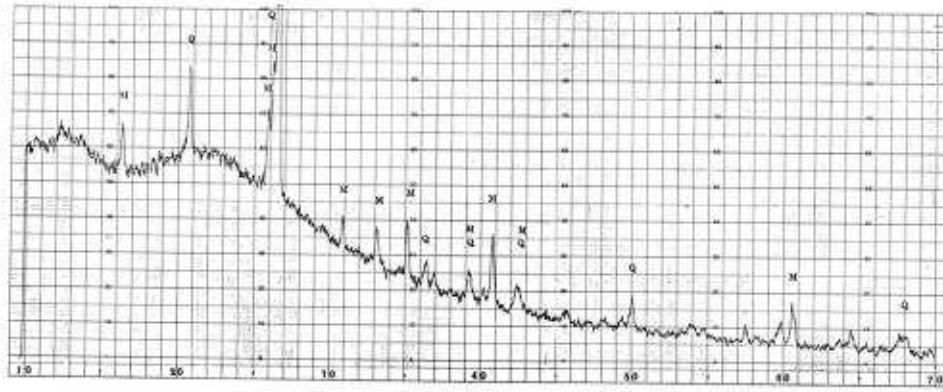
1．青磁皿



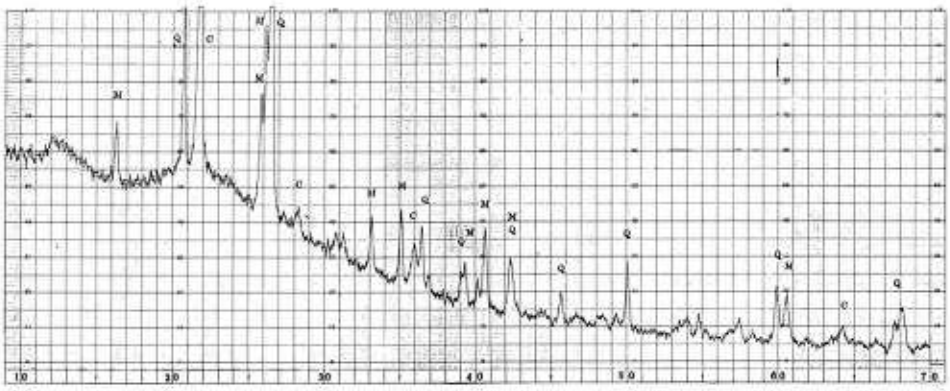
2．白磁皿



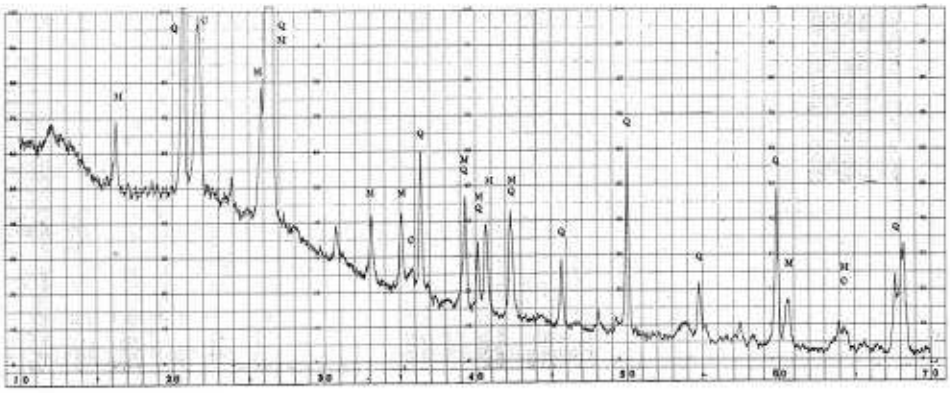
3．青花皿



4．灰釉皿



5．鉄釉碗



参考資料

1．柳田館遺跡における舶載磁器素地の化学組成分析値

No.	試料名	SiO_2	Fe_2O_3	TiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Na_2O	K_2O	Total
1	青磁皿	74.19%	3.16 %	0.29 %	16.72%	1.52 %	0.42 %	0.32 %	3.04 %	99.66%
2	白磁皿	73.53	2.19	0.17	17.82	0.85	0.29	0.97	3.24	99.06
3	染付皿	70.40	2.03	0.08	20.23	1.46	0.31	0.99	3.74	99.24

2．柳田館、北館遺跡における国産陶器素地の化学組成分析値

No.	試料名	SiO_2	Fe_2O_3	TiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Na_2O	K_2O	Total
1	染付碗(伊万里)	76.72%	1.10 %	0.04 %	13.98%	1.96 %	0.26 %	1.47 %	3.91 %	99.44%
2	染付碗(伊万里?)	72.42	1.06	0.06	19.39	1.28	0.26	0.40	4.51	99.38
3	灰釉皿(美濃)	75.62	2.43	0.56	19.18	tr	0.18	0.15	1.48	99.60
4	鉄釉碗(美濃)	68.39	3.06	0.83	25.14	tr	0.35	0.08	1.42	99.27

No.2は北館、他は柳田館遺跡出土

3．柳田館遺跡における国産陶器釉薬の化学組成分析値

No.	試料名	SiO_2	Fe_2O_3	P_2O_5	Al_2O_3	MnO	CaO	MgO	Na_2O	K_2O	Total
1	灰釉皿(美濃)	60.57%	1.66 %	1.42 %	13.10%	0.54 %	16.87%	2.67 %	0.26 %	2.09 %	99.18%
2	鉄釉碗(美濃)	66.36	3.93	0.16	22.99	0.13	2.43	0.85	0.18	1.81	99.84

「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」Ⅳによる

2．大瀬川C遺跡出土の獣歯骨

岩手県埋蔵文化財センター　上野　猛

岩手県稗貫郡石鳥谷町大瀬川C遺跡出土の獣歯骨については、そのほとんどが馬歯であり、それに付随する若干の骨片を残すのみである。

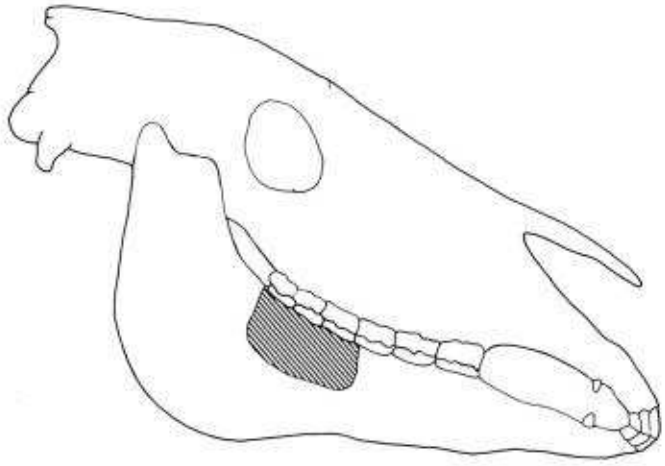
獣歯骨に関しては、種別、部位、年令、雌雄の別、個体数等々について各個別に記するものであるが、当遺跡出土のそれは一見して馬歯と判断しうるもののみであり、他の種類の獣歯骨としては､明確に断定し得るものではないが僅かに１例が含まれているとみられるものである。歯の部位については、左右、上下顎と歯の部位が明記でき、また、年令についてもある程度まで推察される。歯の部位の判定により個体数を推定することも可能であるが、雌雄の別に関しては、その特徴を表わす部位の骨等が欠けている場合、単に歯およびそれに付随する周辺の骨片のみでは非常にむずかしく、また決定的なものとはなし得ない。以上のような点から、当遺跡の獣歯骨についての判別を行なっていくこととする。

資料はすべて４号堀 Da 18—II層出土のものである。３箱に含まれている資料は、合せて51点の上下歯であり、一見してそれらがそれぞれ１個体分のものであろうことは容易に推察される。それらのうち、２例は顎骨片に付随した状態で得られたものである。(図版48—１、２)。それ以外のものはすべて単独に歯部分のみのものであるが、前記したごとくそれらは歯の序列にしたがって並べれば、すべて接続して一個体分の歯列を形成するのであるが、欠落しているものが多分にみられる。これは前歯、いわゆる門歯がほとんどといってよいが、欠落していることである。他の発見例をみても門歯に比して臼歯の残る例が圧倒的である事例からみても同様のことと考えられる。

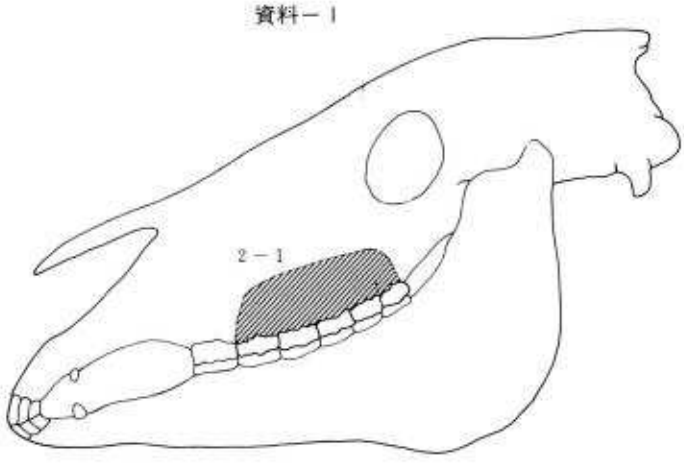
資料—１（図版48—１）

右下顎骨片およびそれに付随する臼歯３点、出土当時のままの状態である。歯の表面が種々の出土時以後の保存その他の状態により多少欠落している部分があるが、右下顎骨片および第１、２、３後臼歯である。これらと同一の地点より検出された歯は他に10点が数えられるが、うち４点は下顎歯である。右下顎第２、３前臼歯および左下顎第１、２後臼歯である。

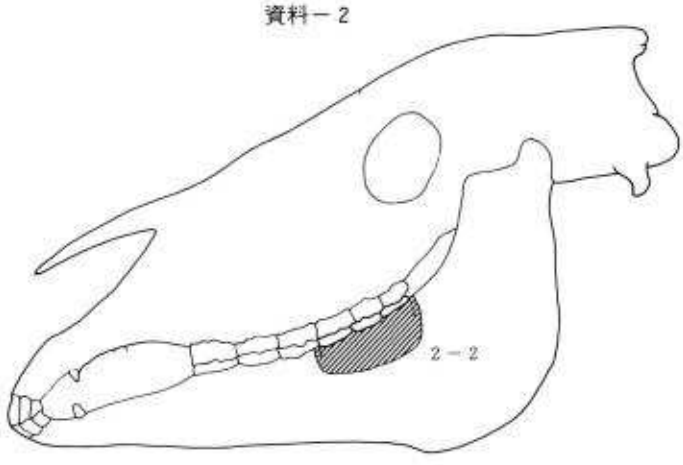
他の６点は上顎歯であり、右上顎第１、２、３前臼歯および後臼歯のものである。他に数片の細い顎骨片を含むが、接合は不可能である。他の事例との参照をくわしく行う必要があるが、単にこれらの歯の状態からみて年令は10才前後のものと推察される。歯表面は強度の磨耗等はみられず、通常の飼料による食物を取っていたものと考えられる。また、特に歯骨に関する病気等の特徴はみられない。個体数としては歯列よりみて１～２個体を考えることが出来よう。



資料－1



資料－2



資料－2

大瀬川Ｃ遺跡出土の馬歯骨

資料－2（図版48－2）

17点の上下歯および若干の顎骨片数片がある。左下顎片およびそれに付随する第1、2後臼歯がある。直接に接合しえないが、第3後臼歯でおそらくこれの後に接続すると考えられるもの1点である。さらに左下顎前臼歯とみられるもの、第1、2前臼歯各1点と第3臼歯1点がある。これらは前記の左下顎後臼歯の前方位に位置するものと考えることが出来る。

その他下顎歯3点、右下顎第1前臼歯、左下顎第1、2前臼歯が別にある。上顎歯としては右上顎歯5点、すなわち第2、3前臼歯、第1～3後臼歯がある。また、他に3点の上顎歯がある。歯表面の保存状態が悪く、明確に部位を指示し得ないが、その状況よりみて前臼歯の一群と推察される。

資料－2の歯による個体数は左下顎骨および歯が2例、右下顎歯1例、右上顎歯列1例を数えることが出来、個体数としては不明確ではあるが、2～3個体を推定しうる。本資料における年令は上顎歯の状態により資料－1と同様10才前後とみるべきであろう。

資料－3

おそらくは牛であろうと考えられるもの2点がある。比較的小形であり、歯表面の摩耗も少ないため若い動物の臼歯と考えられるものである。

当遺跡より出土した獣歯骨については当初に記したが、そのほとんどが馬歯である。個体数としては資料－1、2を合せて最大5個体、最小3個体が考えられる。左右、上下顎骨片および歯のみでは明確に同一個体のものと断定するのはさけねばならないため、このような不確定の個体数が考えられるものである。

調査者における検出当時の状況では、本遺跡と直接に関係する何らかの遺構よりの出土状態ではなく、空堀の覆土土層中からの出土であるために年代的には不明確な点が多いとの事である。元来、歯骨に関する発見資料に古いものはなく、当然日本に馬が渡来して以後のものであり、古代馬に関しては古墳出土のハニワの例をもって述べられているもののみであり、はっきりしたこれらの遺物の特徴は記しえない。本遺跡の時代より新しいものであろうことは出土状態より推察できよう。

参考文献としたものは直接馬歯等に関係するものではないが、日本以外の地域における動物家畜化の点について書かれたものとしてあげるものである。

参考文献

Atlas of Animal Bones. For Prehistorians, Archaeologist and Quaternary Geologists. 1972
Journal of Near Eastern Studies. The American Journal of Semitic Languages and Literatures. 1970
Prehistory and Human Ecology of The Deh Luran Plain. An Early Village Sequence from Khuzistan, Iran. 1969

3．大瀬川C遺跡と柳田館遺跡出土の植物遺体

大阪市立大学　生物学教室　粉川　昭平

1．大瀬川C遺跡出土の植物遺体（図版49）

岩手県稗貫郡石鳥谷町大瀬川所在の大瀬川C遺跡は16世紀頃の城跡で、出土木炭化植物遺体（イネは別に佐藤敏也氏が調査された）の送付をうけ、同定を行った。次のような結果がえられた。

R－1（Ah27，I－P59）－オオムギ（*Hordeum vulgare*）6個。ソバ（*Fagopyrum* sp.）14個。非常にかたく木炭化している。火をうけた為、するどい翼状の稜角は鈍化し、目立たなくなる傾向がある。従って三角錐状の外形を呈するものが多い。1つの稜が熱の為2裂して4稜とみえるものが1個ある。

R－2（Ah24，I－P34）－イネ（*Oryza sativa*）17個、変形したものが多い。ソバ25個。

R－7（De～h12～3，3号堀）－イネ。多数の millet（注(1)）（アワ・ヒエ・キビなどの穀粒の総称）。

R－10（Ee124，II－P47）－リョクトウ？（*Phaseolus aureus*）材片1個。

R－11（Ef121，II－P49）－リョクトウ？数個。不明の種子1個。

R－12（Ef124，II－P48）－リョクトウ？6個。イネ1個。

R－13（Ef124，II－P50）－アズキ（*Phaseolus angularis* f. *angularis*）9個。

R－14（Ef124，II－P51）－アズキ　多数。

R－17（Ef124，II－P58）－リョクトウ？4個。

R－18（Eg124，II－P60）－ソバ？1個、やけて変形し、翼も欠失している。他の1破片は不明。

R－20（Fd127，II－P207）－アズキ　多数。

R－22（Gh127，III－P32）－オオムギ　21個。イネ　3個。

以上のように、イネ・オオムギ・millet（注(1)）など、イネ科の禾穀類に、ソバ・アズキ類が伴出している。この試料では他に自然遺物とみえるものはない。すべて火をうけて木炭化している。なお millet（注(1)）の種属の同定は、今回の報告に間に合わなかった。

2．柳田館遺跡出土の植物遺体（図版49）

岩手県紫波郡紫波町片寄所在の柳田館遺跡は、中世末から近世初め（16世紀頃）にかけての城跡である。送付された試料は、多くが火をうけて木炭化している。予察的に肉眼及び双眼実体顕微鏡を用いて、現生種と比較しながら同定を行った。その結果は次のようである。なお以下の試料に加えて、多数のイネが出土しているが、それは別に佐藤敏也氏が調査されている。

№1（Ci24，Ⅲ）－アズキの種子1個、長さ4.5㎜余。マメ類の種子と見えるもの2個。火をうけふくれて変形がひどく、よくわからない。さらに小木片1個がある。

№2（Da106，P1）－アズキの種子4個。

№3（Fa51，Ⅰ）－リョクトウ？の種子1個。アズキに比し小形のもの。

№4（Ef30，Ⅱ）－ムギ類の木炭化した種子多数。

№5（Ef100，Ⅰ）－ムギ類の木炭化した種子多数。

№6（Fb30，Ⅰ）－マツ属（アカマツかクロマツ）の種子1個、これは火をうけていない。イネ、炭化米3個。ハリギリの種子、2個がくっついている、木炭化していない。ホホノキの種子1個、これも木炭化していない。この他、小種子3個があるが、何かよくわからない。うち1個は種子ではなく虫瘿（虫こぶ）かもしれない。

№7（Fe30，P1）－オオムギ（カワムギ）？13個。炭化米1個がまじる。

№8（Ff30，Ⅲ）－炭化米5個。草木らしい茎1個。他はマメ類の種子が火をうけて変形したものか？

№9（Ff30，Ⅱ）－サンショウの種子1個。

№10（Fa9～6，Ⅱ）－ヨウラクツツジ属とみられる壺型の蒴果（*capsule*）1個。火をうけていない。長さ5㎜、巾は上部で2㎜、下部で4㎜、無毛、5心皮がかたくくっつき、開裂していない。花柱は保存していない。内部構造を調査したいが，1個しかない為こわす事が出来ず、不可能である。

№11（Fa103，土壙）－多数のアズキの種子。

№12（Ff100，P1）－コムギと思われる木炭化種子。丸みをおびている。

№13（Ff100，P1）－アズキ20個。5～7㎜の長さがあり、ヘソの部分は保存せずへこむ。

№14（Ff103，Ⅱ）－エゴノキの内果皮1個。火をうけず、木炭化していない。

№15（Ff103，Ⅱ）－変形がひどい多孔質の不規則塊9個で、マメ類の炭化したものと推定される。

№16（Fh3，Ⅰ）－アズキ3個。

№17（Fj100～103，Ⅰ）－炭化米4個。ナラ属の子葉1枚、幼根の部分がのこり、表面にしわあり。

№18（Fd112，Ⅰ）—ムギ類14個、炭化米1個。

№19（Ff115，P）—millet[注(2)]多数（milletとは、アワ、ヒエ、キビ等の穀粒の総称）。保存わるく、含水した穀粒がかなりの空気量中で火をうけた為か、多くの粒がふくれ破裂して、一部は粉状となっている。millet[注(2)]の同定は将来に期待する。

№20（Fg112，Ⅰ）—炭化米17個。リョクトウ？1個。クリ？の子葉と思われる炭化物2片、多くのしわがあり、かちぐりの如く乾燥したものが、蒸し焼きにされたものか？

№21（Gf36，Ⅱ）—オオムギと思われるムギ類多数。

№22（Gh33，Ⅰ）—オオムギと思われるムギ類多数。小木炭片1個。クリの子葉と見える炭化物1個。非常にしわが多く、多孔質となっているが、2枚の子葉は認められる。

№23（Gj12，Ⅲ）—millet[注(2)]の塊、脱穀はしていないらしい。アワかヒエかキビかである。

№24（Gd6～3，Ⅰ）—ムギ類1個。炭化米11個。

№25（Gh109，Ⅱ）—エゴノキの内果皮1個。火をうけず木炭化していない。

№26（Hb106，P3）—アズキ又はリョクトウの種子多数。昆虫の蛹が1個混っている。

№27（Hb106，P2）—不規則な形の炭化物5個であるが、アズキなどのマメ類が炭化したものらしい。

№28（Dg30）—ソバ？1個。不完全で先端部は欠失しているが、4本の鈍い稜がみえ、ソバではないかと思われる。ソバは稜が3本であるが、火をくぐると時に1本の稜が裂開して2本となり、一見4本の稜があるように見えるのである。この試料は、ダッタンソバではない。恐らく普通ソバであろう。

№29（Dg30，Ⅳ）—アズキらしい種子1個。ヘソは残っていない。大きさは6×4㎜程度。

№30（Dg30，Ⅳ）—ムギ類1個。やや細長い。

№31（Dg30，Ⅳ）—millet[注(2)]の塊状の集合物。脱穀していない。葉の一部もあるらしい。

№32（Dg30，Ⅶ）—リョクトウ？1個。

№33（Hh100，Ⅱ）—ムギ類5個。アズキ類似のマメ類2個、大きさは5×3㎜。

№34（Gh33，Ⅰ）—炭化米8個。ムギ類4個。他の1個はわからなかった。

以上をまとめて分類に従ってならべると次のようになる。

裸子植物　——マツ属の一種（*Pinus* sp.）

被子植物、単子葉類——オオムギ（*Hordeum vulgare*）

コムギ（*Triticum aestivum*）

イネ（*Oryza sativa*）

millet[注(2)]類（*Setaria, Echinochloa, Panicum* sp.）

被子植物、双子葉類――ナラ属の一種（*Quercus* sp.）

クリ（*Castanea crenata*）

ソバ（*Fagopyrum esculentum*）

ホホノキ（*Magnolia obovata*）

アズキ（*Phaseolus angularis* f. *angularis*）

リョクトウ（*Phaseolus aureus*）

サンショウ（*Xanthoxylum piperitum*）

ハリギリ（*Kalopanax pictus*）

ヨウラクツツジ属の一種（*Menziesia* sp.）

エゴノキ（*Styrax japonica*）

合計10科14属15種を同定した。

15種のうち食用とならないものは、ホホノキ・ハリギリ・ヨウラクツツジ属・エゴノキの4種で、他はすべて食べられる。特にイネ・ムギ類・マメ類（アズキ・リョクトウ）が目立っている。ドングリ類（*Quercus*）が、わづか子葉1枚しか出ていない事は注目に値する。この他当然、モモ等の果物類・野菜類などがあったものと思われるが、今回の試料にはなかった。樹木はマツ属をのぞき、落葉広葉樹で、常緑のものはない。温帯に位置する岩手県下の遺跡からの出土遺物として当然である。オニグルミ・トチノキなどが出土せず、先にのべたように、ドングリ類が1個しかみえないという事は、中世末から近世初頭ともなれば、縄文・弥生時代や古代とはことなって、食生活における農耕による草本作物の比重が圧到的となった事を意味しているのであろうか。東北地方における中世・近世の遺跡に伴う植物を、さらに多数調査して日本全体の同時代資料と比較する必要がある。

注(1)、(2)　millet はヒエと判明する。東京大学人類学教室　松谷暁子研究員による。

付記　柳田館遺跡出土の植物遺体については、内部の諸事情によって当該報告書に掲載できなかったため、ここに一括して補正するものである。№1～34は登録順であり、（　）内はそれぞれグリット名、層位、または遺構名を示している。「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」IV（1980）参照

4．大瀬川C遺跡出土の米粒

佐藤　敏也

1．出土粒と計測平均値（第1表　図版50、51）

第1表　平　均　値

資料番号	遺構	粒数	計測数	平均 (L.)粒長	(B.)粒幅	(Th.)粒厚	粒長／粒幅	粒長×短幅	備考
R－1	P．59	2	2	4.35	2.55	2.05	1.71	11.09	土塊中2粒、ほかに大麦、ソバ、笹
R－2	P．34	26	20	4.71	2.89	2.09	1.63	13.59	ほかに破片13
R－3	P．175	塊	－	－	－	－	－	－	小米塊
R－4	P．752	20	20	4.64	2.62	2.09	1.78	12.17	他に破片10
R－5	P．745	69	30	4.44	2.67	2.06	1.66	11.88	他に破片143
R－6	4号堀	塊	－	－	－	－	－	－	
R－7	3号堀	土塊	100	4.38	2.86	2.02	1.54	12.54	水洗い正常粒 241粒より抽出
R－8	De6竪穴	塊	34	4.59	2.78	2.08	1.66	12.80	長粒あり
R－9	Dh109竪穴	87	20	4.69	2.82	2.01	1.67	13.19	87粒中の完形20計測
R－10	P．47	7	7	4.40	2.64	1.97	1.67	11.63	長粒あり、他に小豆混る
R－12	P．48	2	2	－	3.00	2.25	－	－	粒頂欠損、他に小豆混る
R－13	P．50	1	1	5.00	2.80	2.40	1.78	14.00	不明種子、麦、小豆混る
R－16	P．55	2	2	4.60	2.65	2.10	1.79	12.19	1粒短粒、ほか長粒
R－19	P．65	10	10	4.20	2.83	2.02	1.49	11.91	他に破片10、ソバ実、小豆混る
R－20	P．207	7	7	4.81	3.03	2.16	1.59	14.59	他に麦、小豆混る
R－24	P．81	44	44	4.60	2.89	2.04	1.59	13.29	他に破片20
R－25	P．143	115	60	4.54	2.96	2.23	1.54	13.46	他に破片51、小麦1混る
R－27	P．160	2	2	4.65	2.55	2.15	1.83	11.84	1粒は長粒
R－28	P．142	53	53	4.35	2.73	2.05	1.60	11.91	
R－21	Gg118竪穴	大麦 96	30	6.32	3.37	2.82	1.88	21.40	他に破片39粒、粒の縦溝を手前に計測
R－27	P．160	小麦 166	40	4.55	3.07	2.56	1.48	14.01	他に破片32粒
合　計		709	484	遺構ごとに異質粒あり、累計せず					出土完形粒の68.27%計測

米粒に穎稈を伴うものがすくないことから、おそらく米穀として調製されたものらしいが、R－8－2、De6竪穴遺構（図版50　R－8の2）出土のように稲穂のまま焼かれているものもある。粒に焼け太り（図版50　R－4の6）、焼けぶくれ（図版50　R－2の3；R－7の11、52、88、99；R－24の14）が含まれ、伴出の小豆、ソバ実、大麦および小麦粒（図版50　R－21；27の1、2、3）も焼けている点からみて貯蔵中に火災に遭ったものと想像される。

2．米粒の粒形とその大きさ（第２、３表　図版50、51）

粒形をあらわす分類基準として粒長/粒幅比をとり、その2.00以上のものを長粒（L, long type)、1.40以上2.00未満のものを短粒(S , short type)、1.40未満のものを円粒(R, round type)とした。また大きさでは粒長×粒幅積を分類基準とし、その20.00㎜以上を大粒(large)、16.00㎜以上20.00㎜未満を中粒(medium)、12.00㎜以上16.00㎜未満を小粒(small)、8.00㎜以上12.00㎜未満を極く小粒（min small)、8.00㎜未満を極々小粒（m.m. small）として次の表を構成し、計測した粒をそれぞれ表の各欄へプロットして、その出土遺構ごとの粒形と粒の大きさを分類した。

第２表　３号堀出土粒の粒形と大きさ

Shape ＼ Size		8.00㎜～ 極々小	極小	小	16.00㎜～ 中	合計	備考
長粒	2.00以上	－		9，10、11		3　粒 (3.00%)	いづれも未熟粒
短粒	1.80～2.00 以上　未満	－	48、59	1、7、8、13		77　粒 (77.00%)	
	1.60～1.80 未満	－	28、35、36、46、47、57、58、71、82、83	3、4、5、6、12、18、19、20、21、22、27、33、34			
	1.40～1.60 未満	－	66、67、68、77、78、79、80、81、88、91、93、95、96、98、99、100	14、15、16、17、23、24、25、26、29、30、31、32、37、38、39、40、41、42、43、44、45、51、52、53、54、55、56、64、65、69、70	2		
円粒	－1.40 未満	－	94、97	49、50、60、61、62、63、72、73、74、75、76、84、85、86、87、89、90、92		20　粒 (20.00%)	
合　計		－	30粒（30.00%）	69粒（69.00%）	1　粒 (1.00%)	100　粒	

注　プロットされた欄の数字はOSC 74R－7　De 12　3号堀出土粒の計測表にある番号

３号堀出土粒群の構成は長粒３（但し未熟粒　図版51　R－７の10、11）３%、短粒77%、円粒20%となり、短粒の小つぶ（77%のうち48%が小粒、28%が極小つぶ）で主体をなし、それに20%の円粒（18%が円粒小つぶ、2%が円極小つぶ）が伴っている。

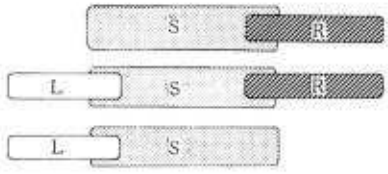
みかけはＬＳＲのパターンであるが実際はＳＲのパターンを呈する。

第３表　各遺構出土粒の粒形とその大きさの組成

形 ＼ 大きさ ＼ 遺構	長粒 小	極小	小計	短粒 中	小	極小	小計	円粒 小	極小	小計	合計
R－7	3	－	3(3.00)	1	48	28	77(77.00)	18	2	20(20.00)	100
R－2	1	－	1(5.00)	1	13	4	18(90.00)	1	－	1(5.00)	20
R－4	1	1	2(10.00)	－	8	10	18(90.00)	－	－	－	20
R－5	－	1	1(3.33)	－	14	15	29(96.67)	－	－	－	30
R－8	2	－	2(5.88)	1	20	11	32(94.12)	－	－	－	34
R－9	1	－	1(5.00)	－	16	3	19(95.00)	－	－	－	20
R－10	1	－	1(14.29)	－	1	3	4(57.14)	1	1	2(28.57)	7
R－19	－	－	－	－	4	5	9(90.00)	1	－	1(10.00)	10
R－20	－	－	－	2	4	－	6(85.71)	1	－	1(14.29)	7
R－24	1	1	2(5.00)	2	32	1	35(87.50)	3	－	3(7.50)	40
R－25	－	－	－	5	35	11	51(85.00)	9	－	9(15.00)	60
R－28	－	－	－	－	26	25	51(96.23)	2	－	2(3.77)	53

注（　）内は%

粒形とその大きさの構成比率で整理すると第3表のようになり、(1)短粒と円粒から成るもの、(2)長粒、短粒、円粒から成るもの、(3)長粒と短粒から成るものの三つに区分される。これを図示すると



R－19、R－20、R－25、R－28

R－2、R－7、R－10、R－24

R－4、R－5、R－8、R－9

第1パターン（SR）は東北地方に古くから栽培されていた稲の粒の基本的パターンに属し、最も古くから現在にまで続いているパターンであり、第2（LSR)、第3（LS）のパターンは、後出のパターンである。但しこの遺跡の第1パターンを呈するR－19、R－20、およびR－25にはそれぞれソバ実、小豆、小麦、麦および小豆などが混在する点を考慮すると、県内で第1のパターンを呈する水沢市・真城雷神、同高山、江釣子村・猫谷地の雑穀を伴なわない遺跡の出土米粒よりも時期は新しいものと考えられる。第2のパターンを呈するR－7米群は第3のパターンを呈するR－8、R－9竪穴遺構出土米粒群からの流出と考えられ、この遺跡においては第2のパターンは第3のパターンよりも新しいと考えられる。R－2にソバ実、麦を、R－10には小豆を伴う様子から第1のパターンの時期と同時頃か、極めて近い時期に属するものと考えられる。花巻市・古館出土の米粒は第2のパターンに属している。

3．柳田館4号堀出土粒との比較（第4、5表　図版52)

(a)　柳田館4号堀出土粒の検討

「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ柳田館遺跡」1980　P.56に昆野靖氏によって一括計測されている24粒の粒形とその大きさは第2のパターンを呈し、大麦、稗、小豆を混在し、明代の青磁、白磁、染付などが検出されている。

第4表　柳田館4号堀出土米粒

出土地＼米粒	粒長			粒幅			粒厚			粒長／粒幅			粒長×粒幅			備考
	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	
柳田館4号堀	5.20	3.80	4.68	3.20	1.70	2.70	2.20	1.40	1.86	2.36	1.34	1.76	15.04	6.40	12.64	昆野測'80　24粒
同Ⅲ－Ⅵ層	5.40	4.00	4.67	3.60	1.80	2.81	2.50	1.30	2.11	2.26	1.38	1.67	19.44	7.20	13.12	佐藤測'80　92粒
柳田館5号堀	4.80	3.50	4.41	2.90	1.80	2.35	2.00	1.50	1.72	2.61	1.52	1.91	12.69	6.30	10.43	昆野測'80　10粒
大瀬川C3号堀	5.20	3.40	4.38	3.20	2.40	2.86	2.40	1.40	2.02	2.08	1.25	1.54	16.32	8.16	12.54	佐藤測'80　100粒

これらの計測値相互に検討した結果では、4号堀出土米粒は昆野・佐藤計測共に差は認められないが、4号堀出土粒と5号堀出土粒との対比においては粒形にあっても、その大きさについても非常に差のあることが認められる。また、柳田館4号堀、5号堀いづれの出土粒も大瀬川C3号堀出土粒との間にはかけはなれた差が存する。

(b) 柳田館4号堀出土粒形とその大きさと大瀬川C3号堀（R－7）出土との比較

第5表　柳田館4号堀の粒形とその大きさ（パターンの検討）

形 / 大きさ / 遺構	長粒				短粒				円粒			備考
	小	極小	極々小	小　計	中	小	極小	小　計	小	極小	小　計	
柳田館4号堀	－	1	2	3(12.50)	－	15	4	19(79.17)	2	－	2(8.33)	24粒　昆野測
4号堀　III層	－	1	1	2(10.00)	－	15	3	18(90.00)	－	－	－	20粒　佐藤測
〃　IV層	－	2	－	2(6.25)	2	24	3	29(90.63)	1	－	1(3.13)	32粒
〃　V層	1	1	－	2(10.00)	－	12	4	16(80.00)	2	－	2(10.00)	20粒
〃　VI層	1	－	－	1(5.00)	1	13	5	19(95.00)	－	－	－	20粒
III～VI層　計	2	4	1	7(7.61)	3	64	15	82(89.13)	3	－	3(3.26)	92粒

昆野計測米群では第2パターンである。佐藤層別計測では第IV層と第V層は第2パターンを呈し、第III層と第IV層は第3パターンを示し、第III～IV層綜合では第2のパターンである。佐藤の計測と昆野の計測は一致する。大瀬川C3号堀（R－7）は第3表でみるとおり第2パターンである。柳田館4号堀と大瀬川C3号堀出土粒のパターンが似ていて、粒形の異なるのは柳田館4号堀粒に長粒（図版52　YD－IV－IV層の1、4、図版52　YD－IV－V層の1）が多く含まれている関係からであろう。[注(1)]

注(1)

$n=92$　　$P=p\pm1.96\sqrt{V(p)/n}$

$r=7$

$p=7.61\%$　　$V(p)=\frac{r(n-r)}{n^2}\times10^4$

$2.16<\mu<13.03$

4．要約

米粒はすべて焼けている。伴出する雑穀類も焼けている。

粒形は短粒小つぶの粒が大部分で、それに極く小量の円粒小つぶと小量の長粒極小つぶが伴う。

粒形では柳田館・大瀬川C遺跡とでは若干相違があるが、それは、たまたま長粒の含まれる量の多少に原因するものと考えられる。粒形と粒の大きさのパターンは両遺跡とも極めて相近い、そのうえ両遺跡とも雑穀類を随伴する点においても相似た様相を呈している。

大瀬川C遺跡出土焼米計測表

(1) R－1 (Ah27 P.59)

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	4.20	2.70	2.10	1.55	11.34	
2	4.50	2.40	2.00	1.87	10.80	

土塊中　米粒共に破損している。
大麦6粒，粒の変異大きい。
笹種実1粒（或は大麦の未熟種か）。
ソバ実13粒、粒の変異が大きい。

(2) R－2 (Ah24 I－P.34)

米粒不完形13、完形26粒中20粒計測

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.40	2.70	2.10	2.00	14.58	胚芽焼けぶくれ
2	5.10	2.90	2.30	1.75	14.79	
3	5.10	3.00	(1.70 3.10)	1.70	15.30	厚さ焼けぶくれ
4	5.10	(2.90 3.60)	2.00	1.75	14.79	横幅焼けぶくれ
5	5.10	(2.80 3.20)	2.00	1.82	14.28	胚芽焼けぶくれ
6	5.00	3.20	(2.00 3.10)	1.56	16.00	厚さ焼け太り
7	4.90	3.00	2.40	1.63	14.70	厚さ焼け太り
8	4.80	(2.90 3.50)	2.10	1.65	13.92	横腹焼けぶくれ
9	4.70	3.20	2.10	1.46	15.04	
10	4.70	3.00	(2.00 2.60)	1.56	14.10	厚さ焼け太り
小計	49.90	29.60	21.70	16.88	147.50	

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
11	4.70	3.00	2.00	1.56	14.10	
12	4.60	(2.90 3.00)	2.00	1.58	13.34	焼けぶくれ
13	4.60	(2.60 3.10)	2.00	1.76	11.96	同上
14	4.60	2.60	2.00	1.76	11.96	
15	4.60	2.70	2.00	1.70	12.42	
16	4.40	(2.70 3.10)	2.00	1.62	11.88	焼けぶくれ
17	4.30	2.60	(3.00 2.30)	1.65	11.18	厚さ焼けぶくれ，被検残る
18	4.20	(3.00 3.40)	2.10	1.40	12.60	焼けぶくれ
19	4.20	2.90	1.90	1.44	12.18	
20	4.10	3.10	2.00	1.32	12.71	
小計	44.30	28.10	20.00	15.79	124.33	
合計	94.20	57.70	41.70	(1.63) 32.67	(13.59) 271.83	
平均	4.71	2.89	2.09	1.63	13.61	

(3) R－4 (Be18 P.752)

20粒計測　不完10粒

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.40	2.50	2.20	2.16	13.50	
2	5.20	2.70	2.20	1.92	14.04	
3	5.20	2.70	2.10	1.92	14.04	
4	5.10	3.00	2.10	1.70	15.30	
5	5.10	2.60	(2.00 2.40)	1.96	13.26	焼け太り
6	4.80	(2.90 3.00)	(2.00 2.50)	1.65	13.92	同上
7	4.90	2.40	2.10	2.04	11.76	
8	4.70	2.70	2.20	1.74	12.69	厚さ焼け太り
9	4.70	2.80	2.30	1.67	13.16	同上
10	4.60	2.80	2.00	1.64	12.88	
小計	49.70	27.10	21.20	18.40	134.55	

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
11	4.60	2.50	2.00	1.84	11.50	
12	4.50	2.60	2.00	1.75	11.96	
13	4.40	2.70	2.10	1.62	11.88	
14	4.40	2.60	2.30	1.69	11.44	厚さ焼け太り
15	4.30	2.40	2.20	1.79	10.32	同上
16	4.30	2.30	2.00	1.86	9.89	
17	4.20	2.70	1.70	1.55	11.34	
18	4.20	2.50	2.10	1.68	10.50	
19	4.20	2.50	2.00	1.68	10.50	
20	4.00	2.40	2.10	1.66	9.60	
小計	43.10	25.20	20.50	17.23	108.93	
合計	92.80	52.30	41.70	(1.78) 35.63	(12.17) 243.48	
平均	4.64	2.62	2.09	1.77	12.16	

(4) R－5 (Bf18 P.745)

正常粒69粒中30粒計測，不完形 143粒

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.10	2.70	2.30	1.88	13.77	厚さ焼け太り
2	5.00	3.00	2.30	1.66	15.00	同上
3	4.80	2.90	(1.90 2.50)	1.65	13.92	
4	4.80	2.80	2.30	1.71	13.44	厚さ焼け太り
5	4.80	2.80	2.00	1.71	13.44	

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
6	4.80	2.70	2.20	1.77	12.96	
7	4.80	2.40	1.70	2.00	11.52	
8	4.60	(2.70 3.20)	2.00	1.70	12.42	焼けぶくれ
9	4.60	2.50	2.10	1.84	11.50	
10	4.60	2.60	2.20	1.76	11.96	焼け太り
小計	47.30	27.10	21.00	17.68	129.93	

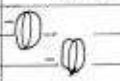
No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
11	4.50	2.80	1.80	1.60	12.60	
12	4.40	3.00	2.00	1.46	13.20	
13	4.40	(2.80 3.10)	2.00	1.57	12.32	焼けぶくれ
14	4.40	2.80	2.10	1.57	12.32	
15	4.40	3.10	2.10	1.41	13.64	
16	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88	
17	4.40	2.60	2.00	1.69	11.44	
18	4.30	2.80	2.00	1.53	12.04	
19	4.30	2.80	2.30	1.53	12.04	焼け太り
20	4.30	2.40	2.10	1.79	10.32	
小計	43.80	27.80	20.40	15.77	121.80	

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
21	4.30	2.70	2.10	1.59	11.61	
22	4.30	2.70	2.00	1.59	11.61	
23	4.30	2.50	2.00	1.72	10.75	
24	4.20	2.50	2.10	1.68	10.50	
25	4.20	2.50	2.20	1.68	10.50	焼け太り
26	4.10	2.50	2.00	1.64	10.25	
27	4.10	2.50	2.10	1.64	10.25	厚き焼け太り
28	4.00	2.50	2.10	1.60	10.00	
29	4.00	2.40	2.00	1.66	9.60	
30	4.00	2.40	1.90	1.66	9.60	
小計	41.50	25.20	20.50	16.46	104.67	
合計	133.20	80.10	61.90	(1.66) 49.91	(11.88) 356.40	
平均	4.44	2.67	2.06	1.66	11.85	

(5) R— 7 (De～h12 3号堀)　　土塊水洗ヒエ、米粒正常 241

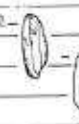
No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.20	2.70	2.20	1.92	14.04	俵形
2	5.10	3.20	2.00	1.59	16.32	
3	5.00	3.10	2.00	1.61	15.50	
4	5.00	3.00	2.10	1.66	15.00	
5	5.00	2.90	2.10	1.72	14.50	
6	5.00	2.90	2.20	1.72	14.50	
7	5.00	2.70	1.90	1.85	13.50	
8	5.00	2.70	2.40	1.85	13.50	厚き焼け太り
9	5.00	2.40	1.60	2.08	12.00	未熟粒
10	5.00	2.40	1.60	2.08	12.00	同上
小計	50.30	28.00	20.10	18.08	140.86	
11	5.00	2.40	1.60	2.08	12.00	未熟粒
12	4.90	3.00	2.20	1.63	14.70	
13	4.90	2.70	2.20	1.81	13.23	
14	4.90	3.10	2.10	1.58	15.19	
15	4.80	3.20	2.30	1.50	15.36	
16	4.80	3.20	(2.20 2.40)	1.50	15.36	焼け太り
17	4.80	3.10	2.10	1.54	14.88	
18	4.80	3.00	2.10	1.60	14.40	
19	4.80	3.00	2.00	1.60	14.40	
20	4.80	2.90	2.00	1.65	13.92	
小計	48.50	29.60	20.80	16.49	143.44	
21	4.70	(2.80 3.40)	2.10	1.67	13.16	焼けぶくれ
22	4.70	(2.70 3.40)	1.90	1.74	12.69	焼け太り
23	4.70	(3.10 3.40)	(2.00 2.60)	1.51	14.57	同上
24	4.70	3.30	(2.20 2.60)	1.42	15.51	焼けぶくれ
25	4.70	3.10	1.90	1.51	14.57	
26	4.70	3.00	2.10	1.56	14.10	
27	4.70	2.80	2.00	1.67	13.16	
28	4.60	(2.60 3.52)	2.20	1.76	11.96	焼け太り
29	4.60	3.00	2.30	1.53	13.80	
30	4.50	3.20	(2.10 2.50)	1.40	14.40	焼け太り
小計	46.60	29.60	20.80	15.77	137.92	

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
31	4.50	3.10	2.10	1.45	13.95	
32	4.50	3.00	2.00	1.50	13.50	
33	4.50	2.80	2.20	1.60	12.60	
34	4.50	2.80	(1.90 2.20)	1.60	12.60	焼け太り
35	4.50	2.60	2.20	1.73	11.70	
36	4.50	2.60	2.00	1.73	11.70	
37	4.40	3.10	2.00	1.41	13.64	
38	4.40	3.00	2.10	1.46	13.20	
39	4.40	2.90	(2.00 2.40)	1.51	12.76	焼け太り
40	4.40	2.90	(2.00 2.50)	1.51	12.76	同上
小計	44.60	28.80	20.50	15.50	128.41	
41	4.40	2.90	2.10	1.51	12.76	
42	4.40	2.90	2.00	1.51	12.76	
43	4.40	2.80	2.00	1.57	12.32	
44	4.40	2.80	2.00	1.57	12.32	
45	4.40	2.80	2.00	1.57	12.32	
46	4.40	2.60	1.50	1.69	11.44	未熟粒
47	4.40	2.60	2.00	1.69	11.44	焼けぶくれ
48	4.40	2.40	1.50	1.83	10.56	未熟粒
49	4.30	3.20	2.20	1.34	13.76	
50	4.30	3.10	2.20	1.38	13.33	
小計	43.80	28.10	19.50	15.66	123.01	
51	4.30	3.00	(1.90 2.80)	1.43	12.90	焼け太り
52	4.30	(2.90 2.80)	2.00	1.48	12.47	同上
53	4.30	2.90	(2.00 2.80)	1.48	12.47	同上
54	4.30	2.90	2.10	1.48	12.47	
55	4.30	2.90	2.10	1.48	12.47	
56	4.30	2.90	2.10	1.48	12.47	
57	4.30	2.50	2.10	1.72	10.75	
58	4.30	2.50	2.00	1.72	10.75	
59	4.30	2.20	1.60	1.95	9.46	未熟粒
60	4.20	3.20	2.10	1.31	13.44	
小計	42.90	27.90	20.00	15.53	119.65	

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
61	4.20	3.20	2.20	1.31	13.44	
62	4.20	3.10	2.20	1.35	13.02	
63	4.20	3.10	2.00	1.35	13.02	
64	4.20	3.00	2.20	1.40	12.60	
65	4.20	3.00	2.10	1.40	12.60	
66	4.20	(2.70 3.40)	2.10	1.55	11.34	幅焼け太り
67	4.20	2.70	(1.80 2.40)	1.55	11.34	厚同上
68	4.20	2.70	1.80	1.55	11.34	
69	4.20	2.90	2.00	1.44	12.18	
70	4.20	2.90	2.00	1.44	12.18	
小計	42.00	29.30	20.40	14.34	123.06	
71	4.20	2.50	2.10	1.68	10.50	
72	4.10	3.10	2.00	1.32	12.71	
73	4.10	3.00	2.00	1.36	12.30	
74	4.10	3.00	2.10	1.36	12.30	
75	4.10	3.00	2.10	1.36	12.30	
76	4.10	3.00	2.10	1.36	12.30	
77	4.10	2.90	2.00	1.41	11.89	
78	4.10	2.90	1.80	1.41	11.89	
79	4.10	2.90	2.30	1.41	11.89	厚き焼け太り
80	4.10	2.80	2.00	1.46	11.48	割れ
小計	41.10	29.10	20.50	14.13	119.56	

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
81	4.10	2.60	2.10	1.57	10.66	
82	4.10	2.50	2.00	1.64	10.25	
83	4.10	(2.50 3.50)	2.20	1.64	10.25	焼け太り
84	4.00	3.20	2.10	1.25	12.80	厚き少々焼けぶくれ
85	4.00	3.20	2.10	1.25	12.80	同上
86	4.00	3.10	(2.00 2.40)	1.29	12.40	同上
87	4.00	3.10	2.20	1.29	12.40	同上
88	4.00	(2.70 3.10)	2.00	1.48	10.80	横焼けぶくれ
89	4.00	3.00	(2.10 2.30)	1.33	12.00	厚き焼けぶくれ
90	4.00	3.00	2.00	1.33	12.00	
小計	40.30	28.90	20.80	14.07	116.36	
91	4.00	2.60	1.40	1.53	10.40	未熟粒
92	3.90	3.20	2.10	1.21	12.48	厚き焼けぶくれ
93	3.90	(2.70 3.20)	2.00	1.44	10.53	
94	3.90	3.00	1.70	1.30	11.70	
95	3.80	(2.50 3.20)	2.10	1.52	9.50	焼けぶくれ
96	3.80	(2.60 3.20)	2.10	1.46	9.88	同上
97	3.70	3.00	(2.00 2.20)	1.23	11.10	焼けぶくれ
98	3.60	2.40	1.50	1.50	8.64	
99	3.60	(2.50 3.00)	2.00	1.44	9.00	焼けぶくれ
100	3.40	(2.40 3.00)	2.00	1.41	8.16	同上
小計	37.60	26.90	18.90	14.04	101.39	
合計	437.70	286.20	202.30	(1.64 153.61)	(12.54 1,253.66)	
平均	4.38	2.86	2.02	1.53	12.53	

(6) R－8 (De6－I 竪穴遺構) 米焼塊(頴稲)

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.70	2.60	2.10	2.19	14.82	長粒 
2	5.10	3.00	2.00	1.70	15.30	
3	5.10	2.90	2.10	1.75	14.79	
4	5.00	3.20	2.10	1.56	16.00	
5	5.00	3.10	2.20	1.61	15.50	
6	5.00	3.00	1.90	1.66	15.00	
7	5.00	2.80	2.00	1.78	14.00	
8	5.00	2.50	1.90	2.00	12.50	
9	4.90	3.00	2.10	1.63	14.70	
10	4.80	3.10	2.20	1.54	14.88	
小計	50.60	29.20	20.60	17.42	147.49	
11	4.80	2.90	2.20	1.65	13.92	
12	4.80	2.90	2.30	1.65	13.92	
13	4.80	2.50	2.10	1.92	12.00	
14	4.70	3.10	(2.20 2.40)	1.51	14.57	焼けぶくれ、粋着
15	4.70	3.00	2.20	1.56	14.10	
16	4.50	3.00	2.10	1.50	13.50	
17	4.50	2.80	2.10	1.60	12.60	
18	4.50	2.70	2.00	1.66	12.15	
19	4.50	2.70	2.00	1.66	12.15	
20	4.40	3.00	1.90	1.46	13.20	
小計	46.20	28.60	21.10	16.17	132.11	

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
21	4.40	3.00	2.30	1.46	13.20	
22	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88	
23	4.40	2.70	2.10	1.62	11.88	
24	4.40	2.40	1.60	1.83	10.56	未熟粒
25	4.30	2.60	2.20	1.65	11.18	
26	4.30	2.60	2.00	1.65	11.18	
27	4.30	2.40	2.10	1.79	10.32	
28	4.30	2.30	2.00	1.86	9.89	
29	4.20	3.00	2.30	1.40	12.60	
30	4.20	3.00	2.30	1.40	12.60	
小計	43.20	26.70	20.90	16.28	115.29	
31	4.20	2.70	2.20	1.55	11.34	
32	4.10	2.80	2.20	1.46	11.48	
33	3.90	2.20	1.70	1.77	8.58	未熟粒
34	3.80	2.30	2.00	1.65	8.74	同上
小計	16.00	10.00	8.10	6.43	40.14	
合計	156.00	94.50	70.70	(1.66 58.30	(12.80 435.03	
平均	4.59	2.78	2.08	1.65	12.76	
幅	5.90	3.20	2.90	1.84	18.88	
薄葉	—	2.70	2.20	—	—	節目上

(7) R－9 （Dh－109 竪穴遺構） 87粒中の完形粒

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks	No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.30	2.60	2.10	2.03	13.78		11	4.70	2.60	1.30	1.80	12.22	未熟粒
2	5.10	2.90	2.00	1.75	14.79		12	4.60	2.50	2.10	1.84	11.50	
3	5.00	2.90	2.00	1.72	14.50		13	4.50	3.00	1.90	1.50	13.50	
4	5.00	2.80	2.00	1.78	14.00		14	4.40	3.10	1.90	1.41	13.64	
5	5.00	2.90	2.00	1.72	14.50		15	4.40	3.00	2.30	1.46	13.20	
6	4.90	2.90	2.20	1.68	14.21		16	4.40	3.00	2.20	1.46	13.20	
7	4.90	2.80	2.10	1.75	13.72		17	4.40	2.80	2.40	1.57	12.32	
8	4.80	(3.00 / 3.80)	2.10	1.60	14.40	焼けぶくれ	18	4.40	2.60	2.00	1.69	11.44	
9	4.70	3.00	2.00	1.56	14.10		19	4.30	2.80	2.10	1.53	12.04	
10	4.70	2.70	2.00	1.74	12.69		20	4.20	2.40	1.50	1.75	10.08	
小計	49.40	28.50	20.50	17.33	140.69		小計	44.30	27.80	19.70	16.01	123.14	
							合計	93.70	56.30	40.20	(1.67 / 33.34)	(13.19 / 263.83)	全体に非常にもろい
							平均	4.69	2.82	2.01	1.66	13.23	

(8) R－10 （Ee124 P.47） 他に小豆

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks	No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.30	2.60	2.00	2.03	13.78		6	4.20	2.40	2.00	1.75	10.08	
2	4.80	2.90	2.00	1.65	13.92		7	3.60	2.60	2.10	1.38	9.36	
3	4.30	2.60	2.00	1.65	11.18		計	30.80	18.50	13.80	(1.67 / 11.69)	(11.63 / 83.42)	
4	4.50	2.40	(1.70 / 2.20)	1.87	10.80		平均	4.40	2.64	1.97	1.67	11.62	
5	4.10	3.00	2.00	1.36	12.30								

(9) R－12 （Ef124 P.48） 他に小豆4粒

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	(4.50)	3.00	2.10	…	…	胚部欠
2	(3.90)	3.00	2.40	…	…	同上，厚さ焼け太り
3	(8.40)	6.00	4.50	…	…	

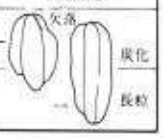
(10) R－13 （Ef124 P.50） 他に麦粒、小豆5粒

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.00	2.80	2.40	1.78	14.00	形態は炭に似ているが特徴を残さず不明

(11) R－15 （Ef124 P.53） ソバ実 3.20×3.00×2.70mm

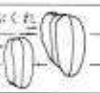
(12) R－16 （Ef124 P.55）

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	4.60	3.10	2.20	1.48	14.26	欠落
2	4.60	2.20	2.00	2.09	10.12	炭化 長粒



(13) R－19 （Eg127 P.65） 米穀完10粒、破片10粒、ソバ2粒、小豆2粒

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks	No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	4.50	3.10	1.90	1.45	13.95	焼けぶくれ	4	4.30	2.70	2.20	1.59	11.61	
2	4.40	(3.10 / 3.20)	2.10	1.41	13.64	同上	5	4.30	3.00	2.30	1.43	12.90	厚さ焼けぶくれ
3	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88		6	4.20	2.90	2.20	1.44	12.18	



No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
7	4.10	3.10	2.00	1.32	12.71	
8	4.00	2.50	1.90	1.60	10.00	
9	4.00	2.50	2.00	1.60	10.00	
10	3.80	2.70	1.60	1.40	10.26	
計	42.00	28.30	20.20	(14.49) 14.86	(11.91) 119.13	
平均	4.20	2.83	2.02	1.48	11.89	

Size / Shape	～ 8.00 極小	8.00～12.00 小	12.00～16.00 中	合 計
長 2.00～	－	－	－	－
短 1.8～2.0				
1.6～1.8	3、8、9			
1.4～1.6	4、10	1、2、5、6	－	9 90%
円 ～1.4	－	7	－	1 10%
合 計	5(50.00%)	5(50.00%)	－	10 100%

(14) R－20 (Fd127 P.207)

他に麦2粒、小豆24粒

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.20	3.20	(2.00) (2.30)	1.62	16.64	
2	5.20	3.10	2.20	1.67	16.12	
3	4.90	3.00	2.40	1.63	14.70	厚き焼け太り
4	4.80	2.70	2.10	1.77	12.96	
5	4.60	3.00	2.10	1.53	13.80	
6	4.60	3.00	2.20	1.53	13.80	
7	4.40	3.20	2.10	(1.37) (1.59)	(14.08) (14.59)	
計	33.70	21.20	15.10	11.12	102.10	
平均	4.81	3.03	2.16	1.59	14.57	

(15) R－24 (Ha118 P.81)

米粒完形、破片20

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.30	2.80	1.90	1.89	14.84	
2	5.20	3.30	2.00	1.57	17.16	
3	5.20	2.40	2.00	2.16	12.48	長粒
4	5.10	3.20	2.10	1.59	16.32	
5	5.10	2.90	1.90	1.75	14.79	
6	5.10	2.90	2.00	1.75	14.79	
7	5.10	2.70	1.90	1.88	13.77	
8	5.00	3.10	1.80	1.61	15.50	
9	5.00	3.00	2.00	1.66	15.00	
10	5.00	3.00	2.20	1.66	15.00	
小計	51.10	29.30	19.80	17.52	149.65	
11	5.00	3.00	2.30	1.66	15.00	
12	5.00	2.80	2.10	1.78	14.00	
13	4.90	3.00	2.10	1.63	14.70	
14	4.80	3.00	2.10	1.60	14.40	焼けふくれ
15	4.80	3.00	2.10	1.60	14.40	
16	4.80	2.70	2.20	1.77	12.96	未熟粒、厚き焼けふくれ
17	4.80	2.90	2.00	1.65	13.92	
18	4.70	2.90	1.90	1.62	13.63	
19	4.70	2.80	1.90	1.67	13.16	
20	4.70	2.30	2.10	2.04	10.81	
小計	48.20	28.40	20.80	17.02	136.98	
21	4.60	(2.90) (4.20)	2.00	1.58	13.34	焼けふくれ
22	4.60	3.10	2.20	1.48	14.26	
23	4.60	3.00	2.20	1.53	13.80	
24	4.60	3.00	2.00	1.53	13.80	
25	4.60	2.80	2.00	1.64	12.88	
26	4.50	2.90	2.20	1.55	13.05	
27	4.50	2.70	1.90	1.66	12.15	
28	4.50	2.50	2.10	1.80	11.25	
29	4.40	2.90	2.00	1.51	12.76	
30	4.40	2.90	2.20	1.51	12.76	厚き焼けふくれ
小計	45.30	28.70	20.80	15.79	130.05	
31	4.30	3.00	2.10	1.43	12.90	
32	4.30	2.90	2.00	1.48	12.47	
33	4.30	2.90	2.20	1.48	12.47	厚き焼けふくれ
34	4.20	3.20	2.00	1.31	13.44	
35	4.20	(3.10) (3.30)	2.20	1.35	13.02	
36	4.20	3.10	2.10	1.35	13.02	
37	4.20	3.00	2.00	1.40	12.60	
38	4.20	3.00	2.00	1.40	12.60	
39	4.20	2.90	2.00	1.44	12.18	
40	4.20	2.90	2.00	1.44	12.18	
小計	42.30	30.00	20.60	14.08	126.88	
41	4.00	(3.10) (3.20)	1.90	1.29	12.40	焼けふくれ
42	3.80	2.50	2.00	1.52	9.50	
43	3.80	2.50	1.70	1.52	9.50	
44	3.70	2.60	2.00	1.42	9.62	
小計	15.30	10.70	7.60	5.75	41.02	
合計	202.20	127.10	89.60	(1.59) 70.16	(13.29) 584.58	
平均	4.60	2.89	2.04	1.59	13.29	44粒

(16) R−25 (Hd136 P.143)

未粒完形 115粒、破片51、60計測、小麦1粒

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks	No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.20	3.30	2.50	1.57	17.16	焼け太り	31	4.50	3.00	2.30	1.50	13.50	
2	5.10	3.20	2.40	1.59	16.32	同上	32	4.50	3.00	2.40	1.50	13.50	
3	5.10	3.40	2.40	1.50	17.34	同上	33	4.40	3.20	2.20	1.37	14.08	
4	5.10	3.40	2.40	1.50	17.34	同上	34	4.40	3.10	2.10	1.41	13.64	
5	5.10	2.90	2.30	1.75	14.79		35	4.40	3.10	2.40	1.41	13.64	
6	5.10	3.00	2.00	1.70	15.30		36	4.40	3.00	2.20	1.46	13.20	
7	5.00	2.70	2.40	1.85	13.50		37	4.40	3.00	2.10	1.46	13.20	
8	5.00	3.20	2.10	1.56	16.00		38	4.40	2.90	2.20	1.51	12.76	
9	5.00	3.10	2.60	1.61	15.50		39	4.40	2.90	2.40	1.51	12.76	
10	5.00	2.80	2.10	1.78	14.00		40	4.40	2.90	2.10	1.51	12.76	
小計	50.70	31.00	23.20	16.41	157.25		小計	44.20	30.10	22.40	14.64	133.04	
11	4.90	2.70	2.10	1.81	13.23		41	4.40	2.70	2.20	1.62	11.88	
12	4.80	3.20	2.10	1.50	15.36		42	4.30	3.40	2.30	1.26	14.62	焼け太り
13	4.80	2.80	2.10	1.71	13.44		43	4.30	3.10	2.20	1.38	13.33	
14	4.80	2.50	2.40	1.92	12.00		44	4.30	3.10	2.20	1.38	13.33	
15	4.80	3.00	2.50	1.60	14.40		45	4.30	2.80	2.30	1.53	12.04	
16	4.80	2.80	2.00	1.71	13.44		46	4.30	2.80	2.20	1.53	12.04	
17	4.70	3.40	2.10	1.38	15.98		47	4.30	2.80	1.90	1.53	12.04	
18	4.70	3.00	2.30	1.56	14.10		48	4.30	2.70	2.10	1.59	11.61	
19	4.70	2.90	2.20	1.62	13.63		49	4.30	2.30	1.90	1.86	9.89	未熟粒
20	4.70	2.70	2.00	1.74	12.69		50	4.20	(2.80 3.50)	2.30	1.50	11.76	
小計	47.70	29.00	21.80	16.55	138.27		小計	43.00	28.50	21.60	15.18	122.54	
21	4.70	2.90	2.50	1.62	13.63	焼け太り	51	4.20	2.70	2.10	1.55	11.34	
22	4.70	3.00	2.20	1.56	14.10		52	4.20	2.70	2.20	1.55	11.34	厚さの方向へ焼けぶくれ
23	4.60	3.30	2.50	1.39	15.18	焼け太り	53	4.20	2.60	2.10	1.61	10.92	
24	4.60	3.20	2.30	1.43	14.72		54	4.10	3.10	2.50	1.32	12.71	焼け太り
25	4.60	3.20	1.80	1.43	14.72		55	4.10	3.00	2.30	1.36	12.30	
26	4.60	3.10	2.20	1.48	14.26		56	4.10	3.00	2.10	1.36	12.30	
27	4.60	3.10	2.30	1.48	14.26		57	4.10	2.90	2.30	1.41	11.89	
28	4.60	3.00	2.20	1.53	13.80		58	4.10	2.60	2.00	1.57	10.66	
29	4.50	3.20	2.10	1.40	14.40		59	4.00	2.60	2.20	1.53	10.40	
30	4.50	3.00	2.50	1.50	13.50		60	3.90	2.70	2.10	1.44	10.53	
小計	46.00	31.00	22.60	14.82	142.57		小計	41.00	27.90	21.90	14.70	114.39	
							合計	272.60	177.50	133.50	92.30	(13.46) 808.04	
							平均	4.54	2.96	2.23	1.53	13.44	

(17) R−28 (He136 P.142)

米粒、全量53粒

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks	No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	4.90	3.00	2.20	1.63	14.70		11	4.60	2.80	1.90	1.64	12.88	
2	4.80	3.00	2.40	1.60	14.40		12	4.50	3.00	2.30	1.50	13.50	
3	4.80	2.80	2.30	1.71	13.44		13	4.50	2.80	2.00	1.60	12.60	
4	4.70	3.00	2.10	1.56	14.10	厚さの方向へ焼けぶくれ	14	4.50	2.80	2.00	1.60	12.60	
5	4.70	2.90	2.10	1.62	13.63		15	4.50	2.80	2.00	1.60	12.60	
6	4.70	2.90	2.10	1.62	13.63		16	4.50	2.80	2.10	1.60	12.60	
7	4.60	(3.00 3.40)	2.30	1.53	13.80	焼けぶくれ	17	4.50	2.70	2.20	1.66	12.15	
8	4.60	3.00	1.90	1.53	13.80		18	4.50	2.60	2.20	1.73	11.70	
9	4.60	3.00	2.10	1.53	13.80		19	4.50	2.40	1.90	1.87	10.80	未熟粒
10	4.60	2.90	2.00	1.58	13.34		20	4.50	2.40	2.00	1.87	10.80	
小計	47.00	29.50	21.50	15.91	138.64		小計	45.10	27.10	20.60	16.67	122.23	

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks	No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
21	4.40	3.00	2.00	1.46	13.20		41	4.10	2.40	1.70	1.70	9.84	
22	4.40	2.80	2.00	1.57	12.32		42	4.00	3.10	2.30	1.29	12.40	
23	4.40	2.80	2.30	1.57	12.32		43	4.00	3.10	2.10	1.29	12.40	
24	4.40	2.80	2.10	1.57	12.32		44	4.00	2.80	2.20	1.42	11.20	
25	4.40	2.70	2.10	1.62	11.88		45	4.00	2.50	2.10	1.60	10.00	
26	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88		46	4.00	2.50	1.90	1.60	10.00	
27	4.40	2.70	2.10	1.62	11.88		47	4.00	2.60	2.00	1.53	10.40	
28	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88		48	4.00	2.40	1.60	1.66	9.60	
29	4.40	2.60	2.10	1.69	11.44		49	4.00	2.40	1.70	1.66	9.60	
30	4.40	2.60	2.00	1.69	11.44		50	3.80	2.70	2.20	1.40	10.26	
小計	44.00	27.40	20.70	16.03	120.56		小計	39.90	26.50	19.80	15.15	105.70	
31	4.40	2.40	2.00	1.83	10.56		51	3.60	2.40	1.90	1.50	8.64	
32	4.30	3.00	2.20	1.43	12.90		52	3.50	2.50	2.00	1.40	8.75	
33	4.30	3.00	2.20	1.43	12.90		53	4.90	3.10	2.40	1.58	15.19	
34	4.30	2.80	2.30	1.53	12.04		小計	12.00	8.00	6.30	4.48	32.58	
35	4.30	(2.80 3.40)	2.00	1.53	12.04	磨滅けぶくれ	合計	230.27	144.60	108.90	(1.60) 84.72	(11.91) 631.25	
36	4.30	2.70	2.00	1.59	11.61		平均	4.35	2.73	2.05	1.59	11.88	
37	4.30	2.40	1.50	1.79	10.32	未熟粒							
38	4.20	2.40	1.90	1.75	10.08								
39	4.20	2.30	1.90	1.82	9.66								
40	4.10	2.30	2.00	1.78	9.43								
小計	42.70	26.10	20.00	16.48	111.54								

(18) R－27 （He133 P.160）　　米粒２粒

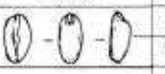
No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.00	2.50	2.10	2.00	12.50	
2	4.30	2.60	2.20	1.65	11.18	

(19) R－21 （Gg118 竪穴状遺構）　　大麦の正常粒96粒，30粒計測，破片49粒，溝を手前に見て計測

No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks	No.	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	7.30	3.50	3.10	2.09	25.55		17	6.20	3.20	2.90	1.94	19.84	
2	7.30	3.80	3.10	1.92	27.74		18	6.20	3.40	2.90	1.82	21.08	
3	7.20	3.20	3.00	2.25	23.04		19	6.20	3.10	2.90	2.00	19.22	
4	7.10	3.20	3.20	2.22	22.72		20	6.10	3.20	2.60	1.91	19.52	
5	7.00	3.20	2.90	2.19	22.40		小計	63.10	34.80	29.60	18.22	219.77	
6	7.00	3.60	3.10	1.94	25.20		21	6.10	3.20	2.80	1.91	19.52	
7	6.90	3.80	2.60	1.82	26.22		22	6.00	3.50	2.60	1.71	21.00	
8	6.90	3.50	3.00	1.97	24.15		23	5.80	3.60	2.90	1.61	20.88	
9	6.80	3.70	3.00	1.84	25.16		24	5.70	3.40	2.50	1.68	19.38	
10	6.80	3.10	2.50	2.19	21.08		25	5.70	3.20	2.60	1.78	18.24	
小計	70.30	34.60	29.50	20.43	243.26		26	5.60	3.40	2.90	1.65	19.04	
11	6.70	3.40	3.00	1.97	22.78		27	5.50	2.70	2.00	2.04	14.85	
12	6.40	4.00	3.10	1.60	25.60		28	5.40	3.20	2.50	1.69	17.28	
13	6.40	3.80	3.00	1.68	24.32		29	5.30	2.90	2.60	1.83	15.37	
14	6.40	3.60	3.00	1.78	23.04		30	5.10	2.60	2.10	1.96	13.26	
15	6.30	3.50	3.40	1.80	22.05		小計	56.20	31.70	25.50	17.86	178.82	
16	6.20	3.60	2.80	1.72	22.32		合計	189.60	101.10	84.60	(1.86) 56.57	(21.40) 641.85	
							平均	6.32	3.37	2.82	1.88	21.30	

(20) R—27 (He133 P.160)

小麦 166粒中，32粒破片，完形の30%計測

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
1	5.50	3.10	2.60	1.77	17.05	
2	5.40	3.70	2.70	1.45	19.98	
3	5.40	3.20	2.40	1.68	17.28	
4	5.30	3.50	2.90	1.51	18.55	
5	5.10	3.30	2.60	1.54	16.83	
6	5.00	3.60	3.00	1.38	18.00	
7	5.00	3.40	3.00	1.47	17.00	
8	5.00	3.20	2.60	1.56	16.00	
9	4.90	3.30	2.50	1.48	16.17	
10	4.90	3.20	3.00	1.53	15.68	
小計	51.50	33.50	27.30	15.37	172.54	
11	4.80	3.20	2.80	1.50	15.36	
12	4.70	3.20	3.00	1.46	15.04	
13	4.70	3.20	2.60	1.46	15.04	
14	4.70	2.90	3.00	1.62	13.63	
15	4.70	2.90	2.60	1.62	13.63	
16	4.70	2.80	2.40	1.67	13.16	
17	4.60	3.10	2.50	1.48	14.26	
18	4.60	3.00	2.40	1.53	13.80	
19	4.50	3.30	2.50	1.36	14.85	
20	4.50	3.10	2.50	1.45	13.95	
小計	46.50	30.70	26.30	15.15	142.72	

No	L.	B.	Th.	L/B	L×B	remarks
21	4.50	3.10	2.50	1.45	13.95	
22	4.50	3.10	2.60	1.45	13.95	
23	4.50	3.05	2.30	1.47	13.72	
24	4.40	3.20	2.40	1.37	14.08	
25	4.40	2.70	2.60	1.62	11.88	
26	4.30	3.10	2.50	1.38	13.33	
27	4.30	3.10	2.30	1.38	13.33	
28	4.30	2.80	2.50	1.53	12.04	
29	4.20	3.20	2.40	1.31	13.44	
30	4.20	3.00	2.30	1.40	12.60	
小計	43.60	30.35	24.40	14.36	132.32	
31	4.20	2.90	2.60	1.44	12.18	
32	4.20	2.90	2.20	1.44	12.18	
33	4.20	2.80	2.50	1.50	11.76	
34	4.10	2.90	2.40	1.41	11.89	
35	4.00	3.10	2.60	1.29	12.40	
36	4.00	2.60	2.30	1.53	10.40	
37	4.00	2.50	2.40	1.60	10.00	
38	3.90	2.80	2.40	1.39	10.92	
39	3.80	3.00	2.30	1.26	11.40	
40	3.80	2.60	2.60	1.46	9.88	
小計	40.20	28.10	24.30	14.32	113.01	
合計	181.80	122.65	102.30	(1.48) 59.20	(14.01) 560.59	
平均	4.55	3.07	2.56	1.48	13.97	

5．年代測定

日本アイソトープ協会

1．測定試料

^{14}C測定は次の3点について実施する。

No.	試料名	出土地点	遺構・層位	出土状況
1	丸太状の炭化材	Bg48	3号堀復土 II層	一の郭側より斜め方向に積たわる。被災後の投棄？
2	炭化材の小片	Bd45	一の郭P846 上層	柱穴検出段階に上層にのみ認められる
3	板の炭化板材	De6	De6－I竪穴遺構	床面に壁際より並列する

2．測定結果

No.	試料名	C－14 年代	換算年代
1	丸太状の炭化材	265±80 y B. P.（255±75 y B. P.）	1605～1765（1620－1770）
2	炭化材の小片	430±80 y B. P.（415±80 y B. P.）	1440－1620（1445～1615）
3	板の炭化板材	325±70 y B. P.（315±70 y B. P.）	1555～1695（1565～1705）

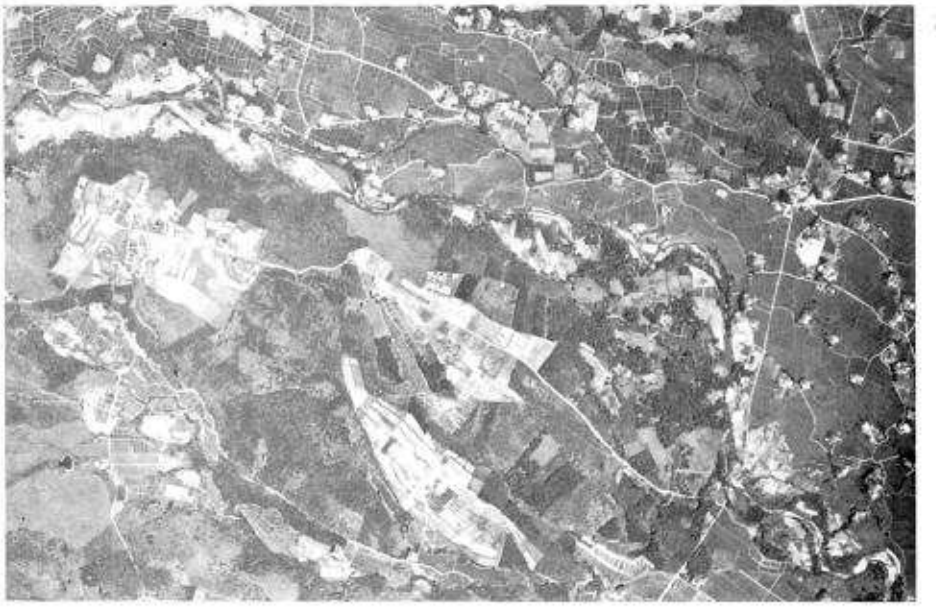
但し換算年代は執筆者で付加するものである。

年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお、^{14}C年代は必らずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

写　真　図　版

図版Ⅰ　遺跡の遠景(1)　1.大瀬川A～C　2.大地渡　3.後在所A～D　4.墳館　5.大明神　6.柳田館の各遺跡

1．1948年
（1：40,000）



2．1962年
（1：20,000）

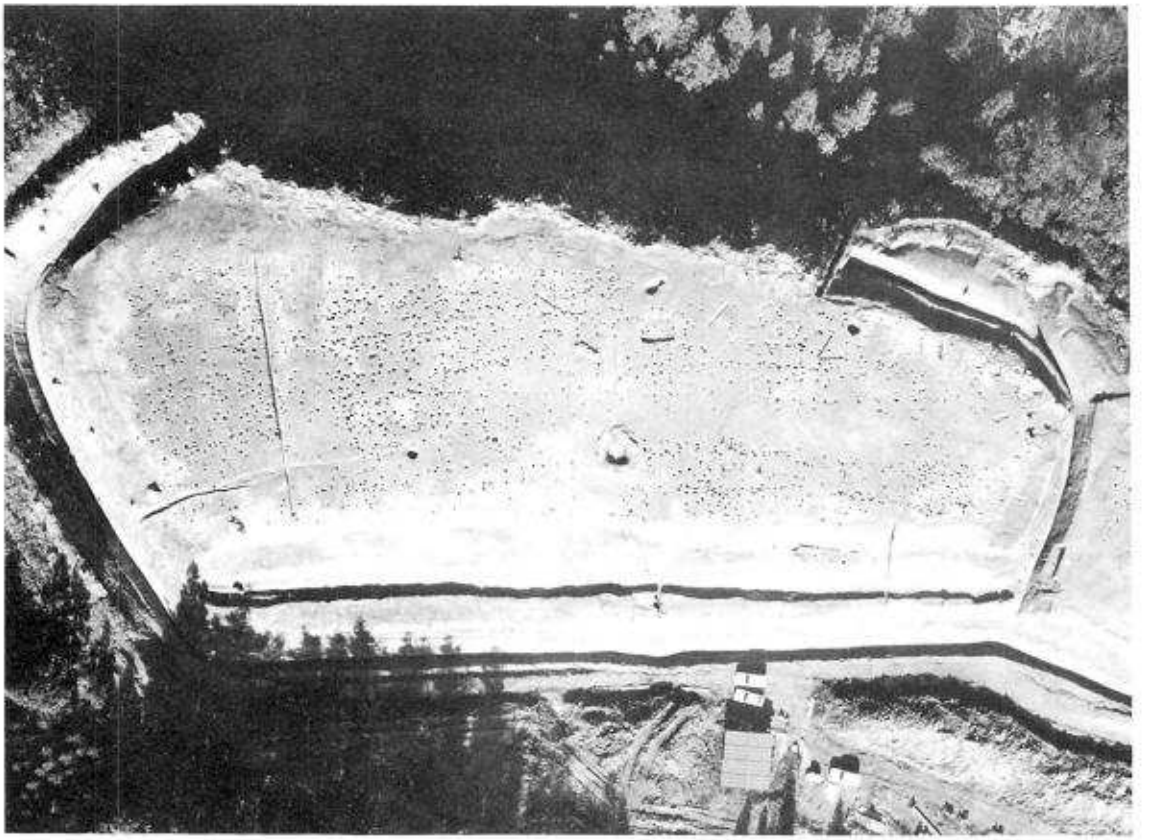
3．1978年
（1：8,000）

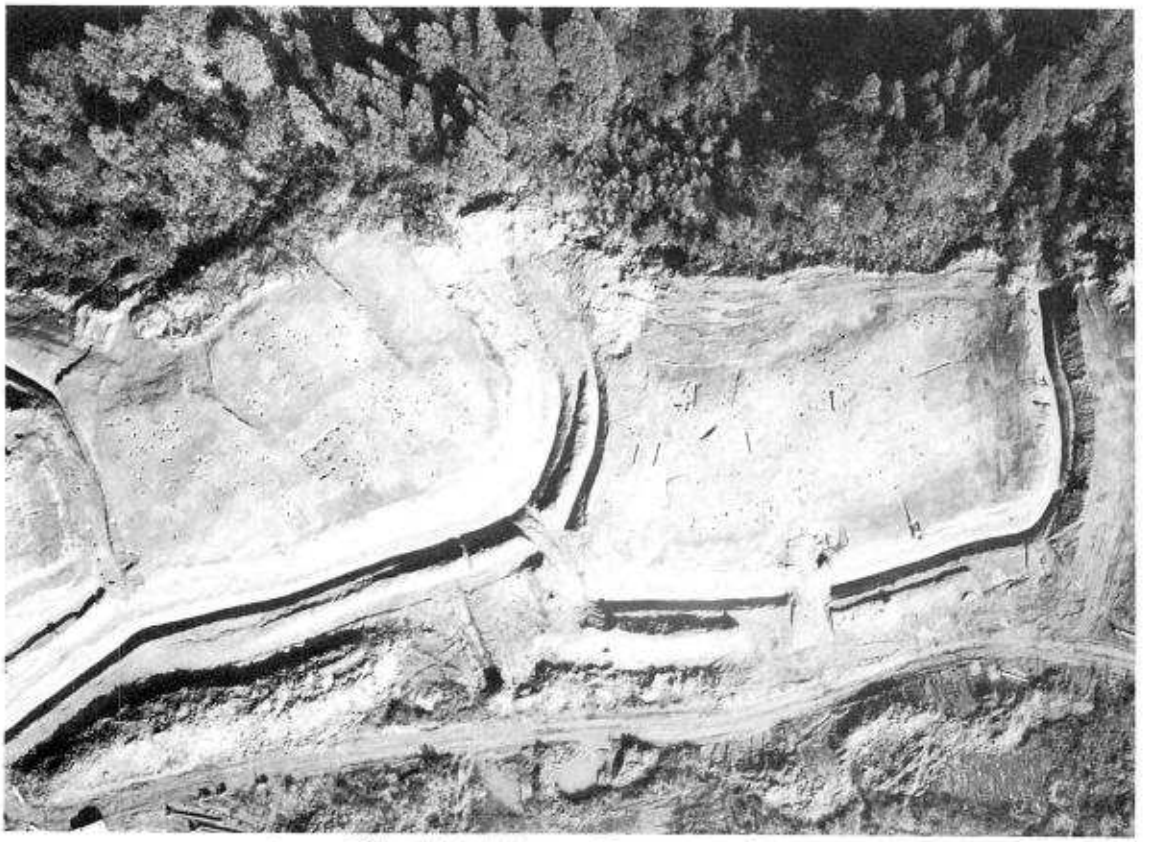
図版 2

遺跡の遠景(2)

1．調査前（1974年5月）2．調査後（同年10月）

図版3　遺跡の全景(1)　調査の前後

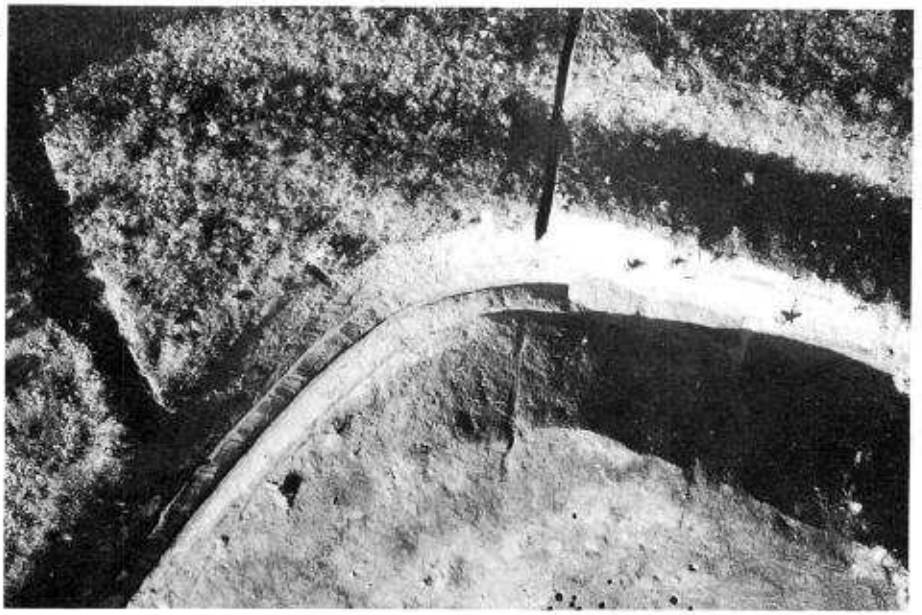




1．一の郭（1：1,000）　2．二、三の郭（1：1,000）

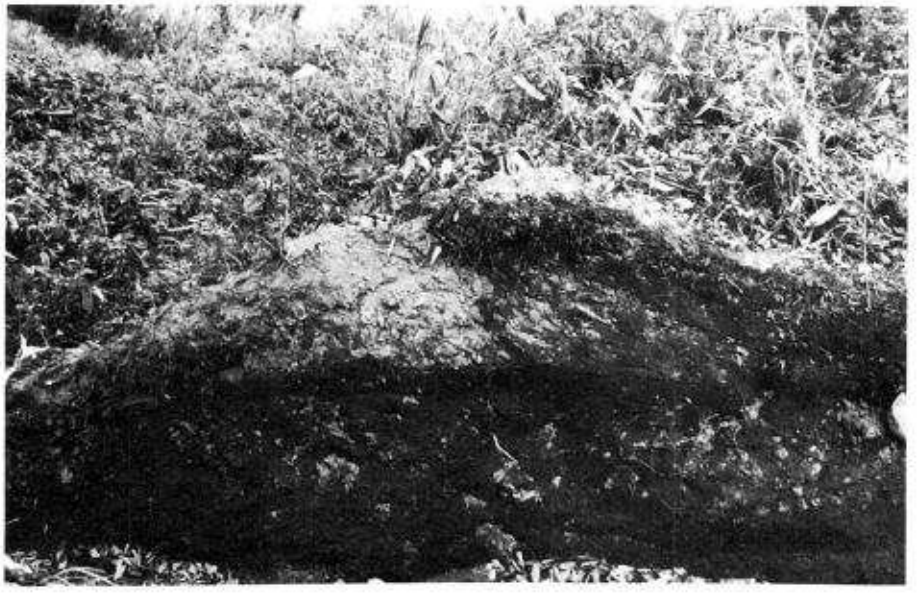
図版4　遺跡の全景(2)　一～三の郭

1．1·2号堀と土塁



2．1号堀
Aa60トレンチ
（南より）

3．1号堀土塁
Aa60トレンチ
（南より）

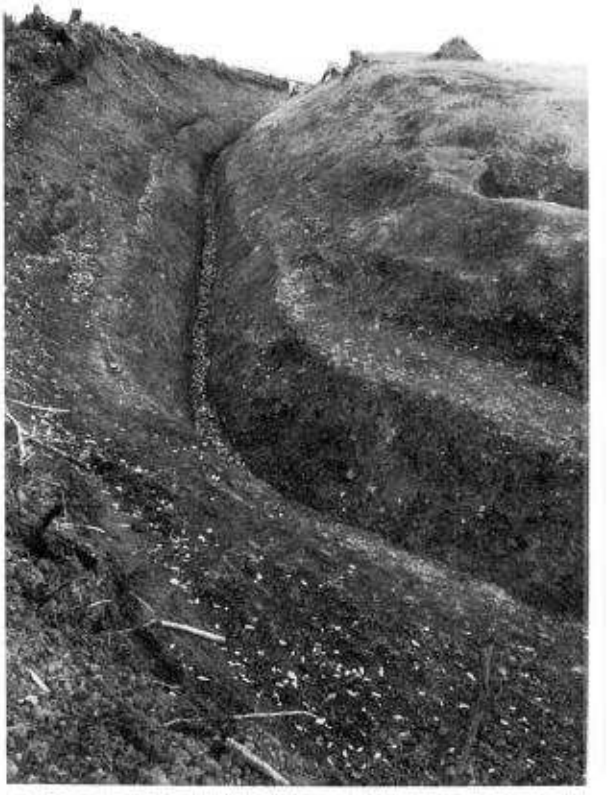


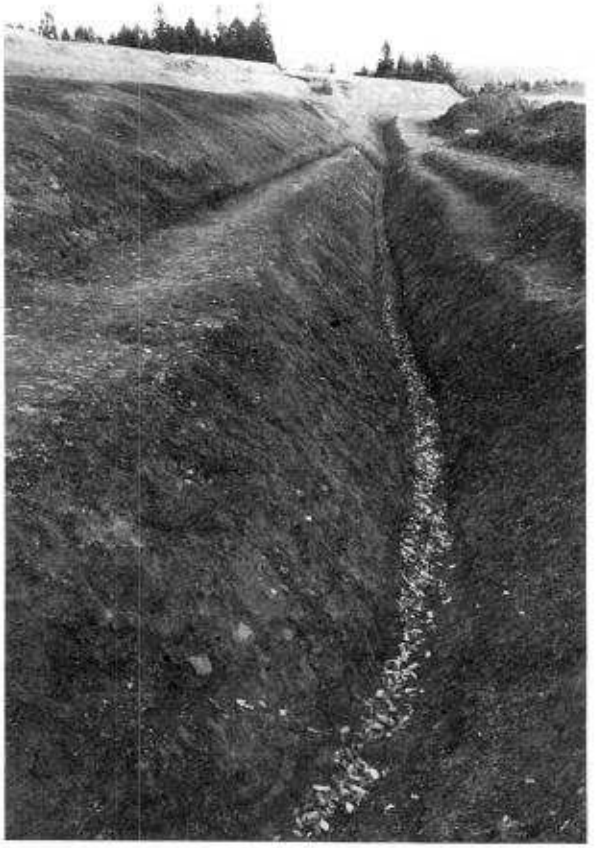
図版 5

墨壕(1) 1·2号堀

1．2号堀
一の郭西辺
（北より）

2．2号堀
一の郭西辺
（南より）

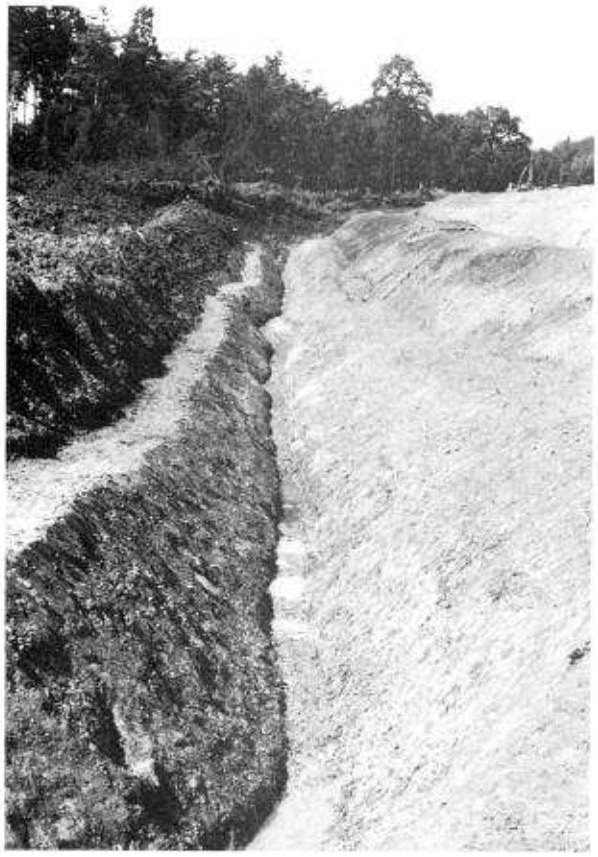




3．2号堀
一の郭南辺
（西より）

図版 6

墨塚(2) 2号堀



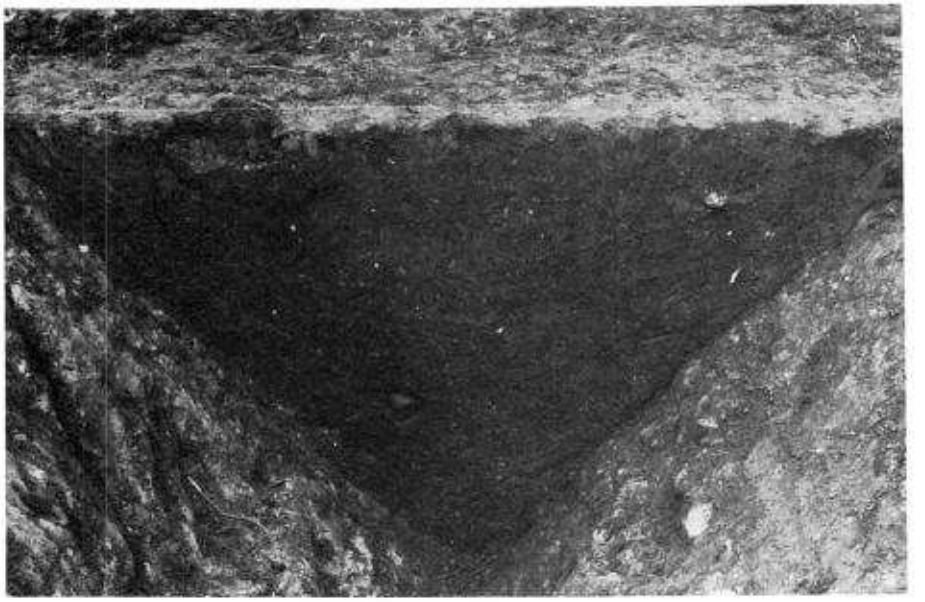
1．2号堀
一の郭南辺
（東より）

2．2号堀
二の郭南東辺
（東より）

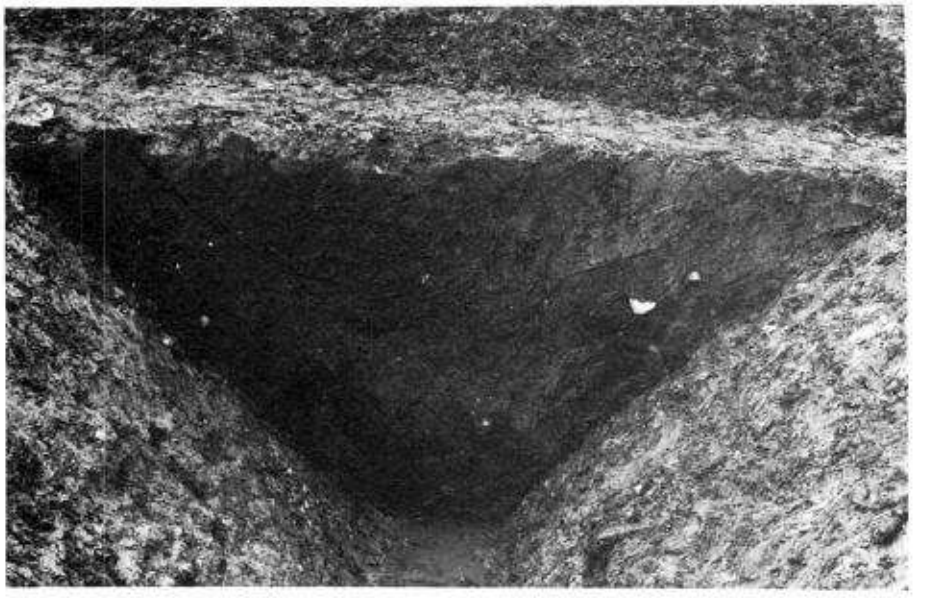
3．2－5号堀
接合部
（東より）

図版 7

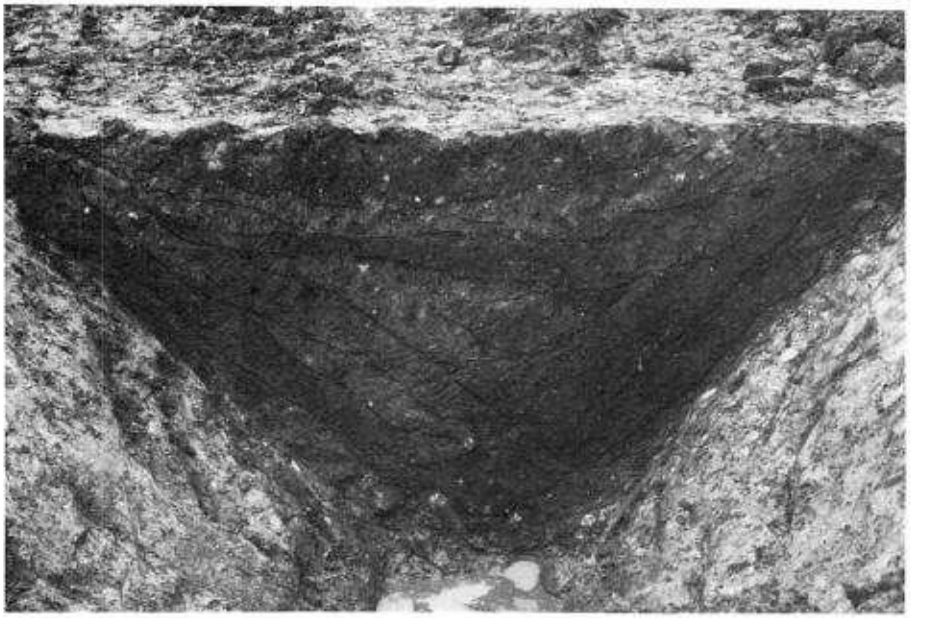
墨壕(3) 2·5号堀



1．2号堀
Bi60トレンチ
（東より）



2．2号堀
Da24トレンチ
（東より）



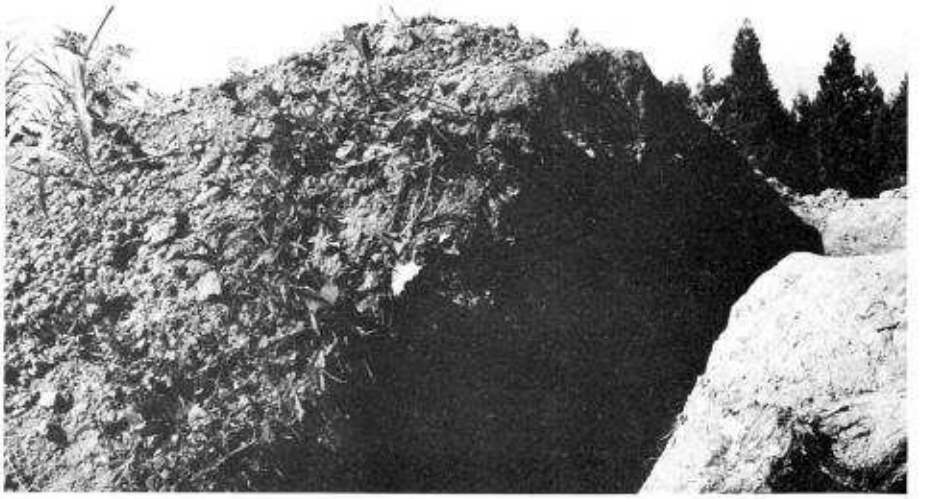
3．2号堀
Ee3トレンチ
（東より）

図版 8

墾壕(4) 2号堀

1．2号堀土塁
Aa30トレンチ
（北より）

2．2号堀土塁
Aa60トレンチ
（南より）



3．2号堀土塁
Fi106トレンチ
（東より）

図版 9

墨壕(5)　2号堀土塁

1．3·2号堀
（西より）

2．3号堀
（西より）

3．3号堀
（南より）

図版10

墨壕(6) 2・3号堀